

それらの註釋書を著はした。關東にては實朝が萬葉集を愛好してよりその研究が盛んとなり、僧仙覺はその校訂と註釋に貢獻するところが大であつた。なほ定家の弟子源光行及びその子親行は源氏物語の校合を行ひ、その註釋書として水原抄が著はされた。

この時代には單に文學書のみならず、記紀の研究が行はれ、その成果の擧つたことは既に述べたところである。

**文學の特色** 鎌倉時代の新興精神に應じて、文學も自ら簡勁直截な特色を示しつつあつた。しかも一方に前代からの傳統的な傾向はこの時代にも文學の背景としてなほ大きく存してゐる點に、この時代の文學の特色がある。

**軍記物** この時代の文學に特に異彩を放つて新しい趣きを加へたのは軍記物である。これは時代獨特の雄勁な思想と簡潔な敘述とによりつゝ、なほ朗々誦すべき前代の華麗さの面影を残し、加ふるに前代末期から特に著しい佛教的無常觀を滲透せしめてゐるのを特色とする。軍記物の主なるものは保元物語平治物語平家物語源平盛衰記等であり、これらの内容は何れも源平以來の治亂興亡を題材として如實

に戰鬪の有様を寫したものであるが、時代の好尚に應じて冗漫の弊を避け、巧みに漢語佛語を交へた明快な假名混り文を用ひたことは、正しくこの時代の創意とすべく、また生別離苦の哀傷を佛教的色彩を以て敘べてゐることも時代精神の反映を思はしめる。中でも平家物語は情緒濃やかな筆致を以て美しくも儂ない平家一門の榮華と没落とを描き、その中に諸行無常盛者必衰の理を敘べたものである。これはまた琵琶に彈じて語られ、世人にもてはやされた。平家の没落といふ一大悲劇を内容としながら、その詞章の間に溢れた一種の諧調のために深刻なる陰慘の氣分を與へないことは、時代の背景たる武家的な素樸性を感じしめると共に、また平安時代の文學傾向たる敘述の華麗さの遺存を思はしめるものである。

**和歌** 和歌は京都鎌倉を中心として盛んに行はれた。殊に後鳥羽天皇及び式子内親王は和歌の道に優れさせ給ひ、同じく鎌倉初期には藤原定家や藤原家隆、僧慈圓、藤原良經、源實朝等の著名な歌人が輩出した。定家は歌學を大成し、また家隆と共に勅を奉じて新古今和歌集二十卷を撰した。この歌集は歌調が流麗であり、歌想が巧緻なる點に於いて實に勅撰和歌集中に重きをなした。また實朝の詠が古雅にし



て雄渾なるなど、何れも當代初期の盛況を偲ぶに足るものである。されど後にはその作風は花鳥風月に戀愛情調におよそ前代以來の範疇を出ないものとなつた。しかのみならず、同じ題の下に多數の摺紳が歌を作る所謂題詠が流行して、かゝる弊害は著しく現はれ、類型に墮し形式に流れ、个性的特色は失はれるに至つた。一方新興の武士の間にも和歌は嗜まれたが、その歌には武人たる特質も独自の生活環境も十分表現されなかつた。かくして總じて和歌には創造的意義を認め得なくなり、むしろこの後は連歌によつて新しい境地が開拓されんとしつゝあつた。

説話集と紀行文隨筆 前代に起れる説話集はこの時代に益多く現はれ、行住坐臥の間に道を求め、見聞を廣めんとする士民にとつて心の糧となつた。これらの多くは倫理的宗教的意味を含めてゐるが、また文學としても見られるものである。十訓抄、沙石集等は特に教訓的色彩に富み、宇治拾遺物語古今著聞集等は話柄豊かに興味深く、總じて寓意の興趣表現の平明を以て人心に投じた。なほ京都鎌倉間の往來の漸く繁くなつたことが契機となつて海道記東關紀行十六夜日記等の紀行文が生まれることも注意に價する。

隨筆としてはこの時代の初めに鴨長明の方丈記があり、無常觀を中心として自己の生活心情を敍べてゐる。また時代は稍降るが、次の吉野時代に吉田兼好の徒然草がある。これは現實生活の中から事物の表裏明暗を衝いて自己の人生觀や自然觀を巧みな筆のすさびに表現してゐる。

學問の地方傳播 この時代の學問は歴史的傳統のまゝに京都を中心とし、地方の學問は概して京都に育まれたものを享受するに止まつた。鎌倉では將軍實朝及びその後京都より將軍の下向するに至る頃から漸く京都の文化が浸潤し始め、延いてはこゝから關東諸國に移植された。元來武士は武藝に長ずるを本分とし、多くは學問に努めなかつたが、幕府が學問を保護獎勵するに至つて次第に發達し、武藏の金澤文庫、下野の足利學校等が開設されるに至つた。金澤文庫は北條泰時の甥實時がその別業たる金澤の稱名寺に文庫を營み、家藏圖書を收めて一族の研究に資したのに始まる。その子顯時孫貞顯また父祖の風を繼いで好學の人であつた。足利學校の創設事情は明確を缺くが、恐らくこの時代に足利氏一族の學問所が設立せられ、それが室町時代の上杉憲實によつて足利學校として中興されたものであつて、禪僧が教

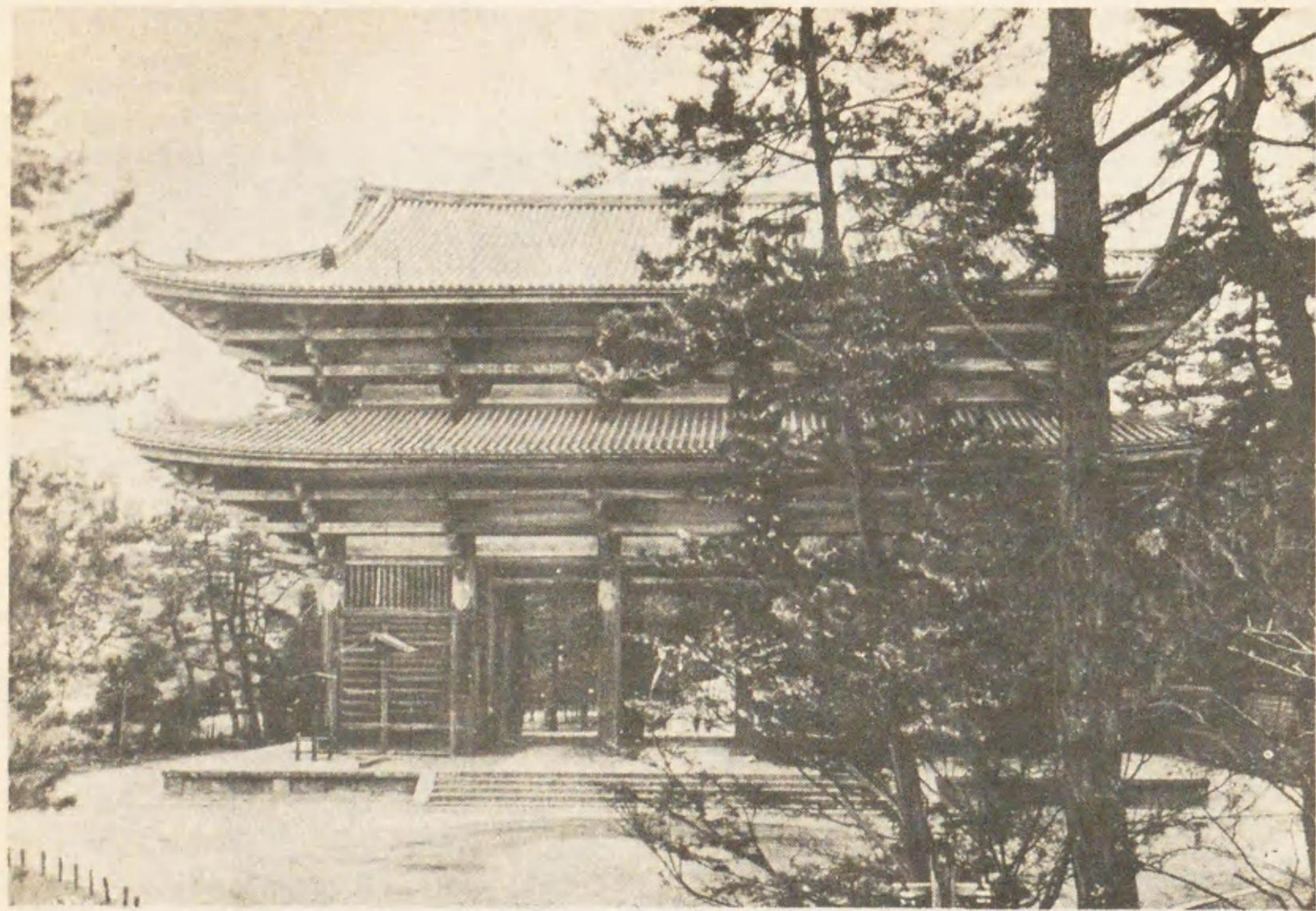


導の師となつて宋學を講じた。なほ鎌倉時代には寺院に於ける庶民教育が起り、諸種の往來物などが讀習された。往來物は書翰の文例を主として當時の常識たるべき事項を多く載せ、これによつて知識を涵養せしめると共に、兼ねて習字の手本としたものである。

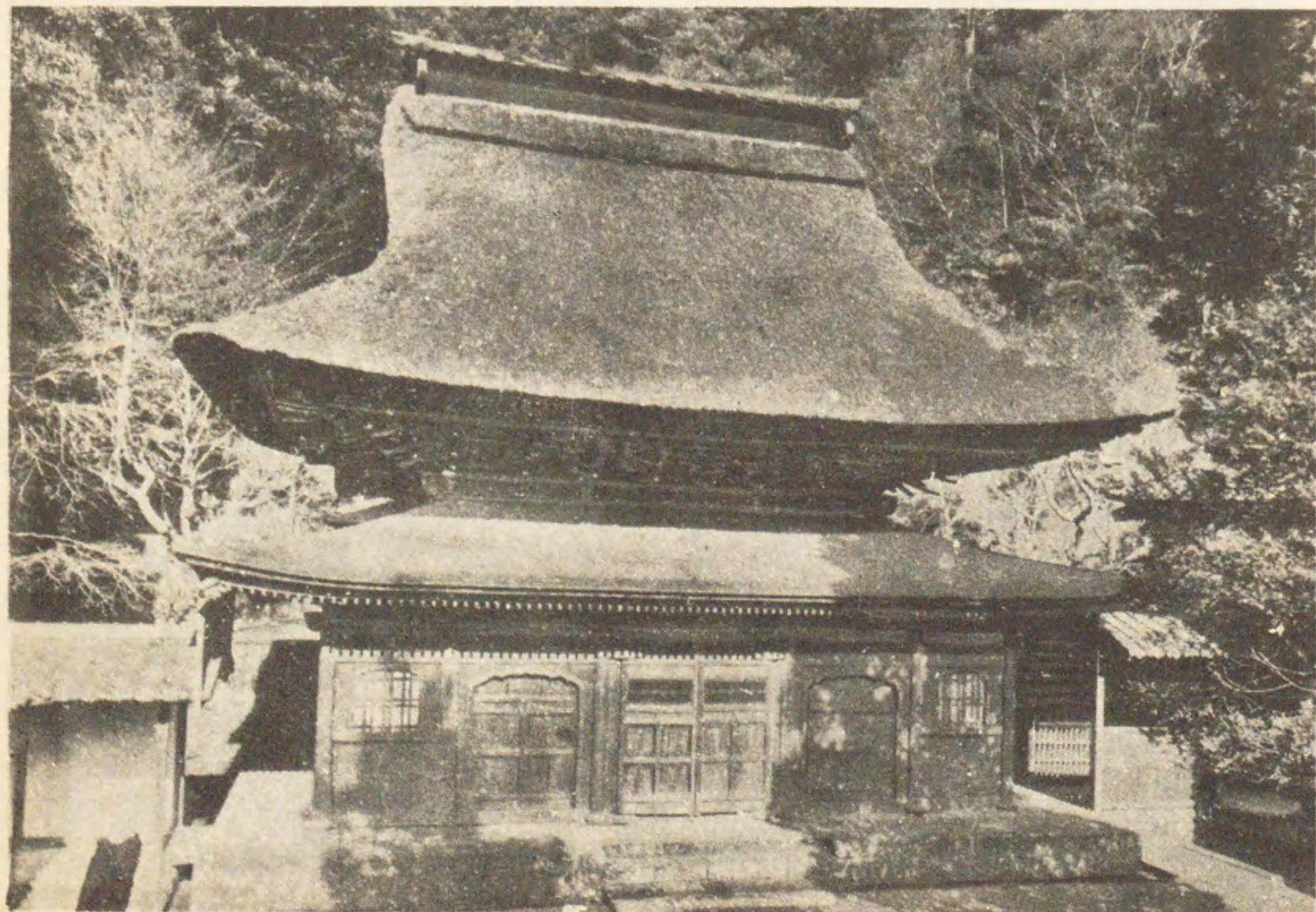
### 五 美術工藝

時代の新傾向 前代の美術工藝は幾多の優秀な作品を遺したが、それらは主として貴族生活の表現であり、優美纖細に過ぎた觀があつた。従つて鎌倉時代に入ると共に、かゝる傾向を更新せんとする機運が自ら起るに至り、前時代の傳統から生かすべきものを生かし、更に奈良時代の様式から清楚にして力強いものを復活せしめ、これに廣く大陸様式の採るべきものを加へて、新時代の風格を現はした新様式を育成したのである。

建築 神社建築は由來佛寺建築と異なり、古い傳統がよく守られ、構造上極めて簡素で、時代による變化が少いのであるが、前代以來これにも自ら宮殿や佛寺建築に

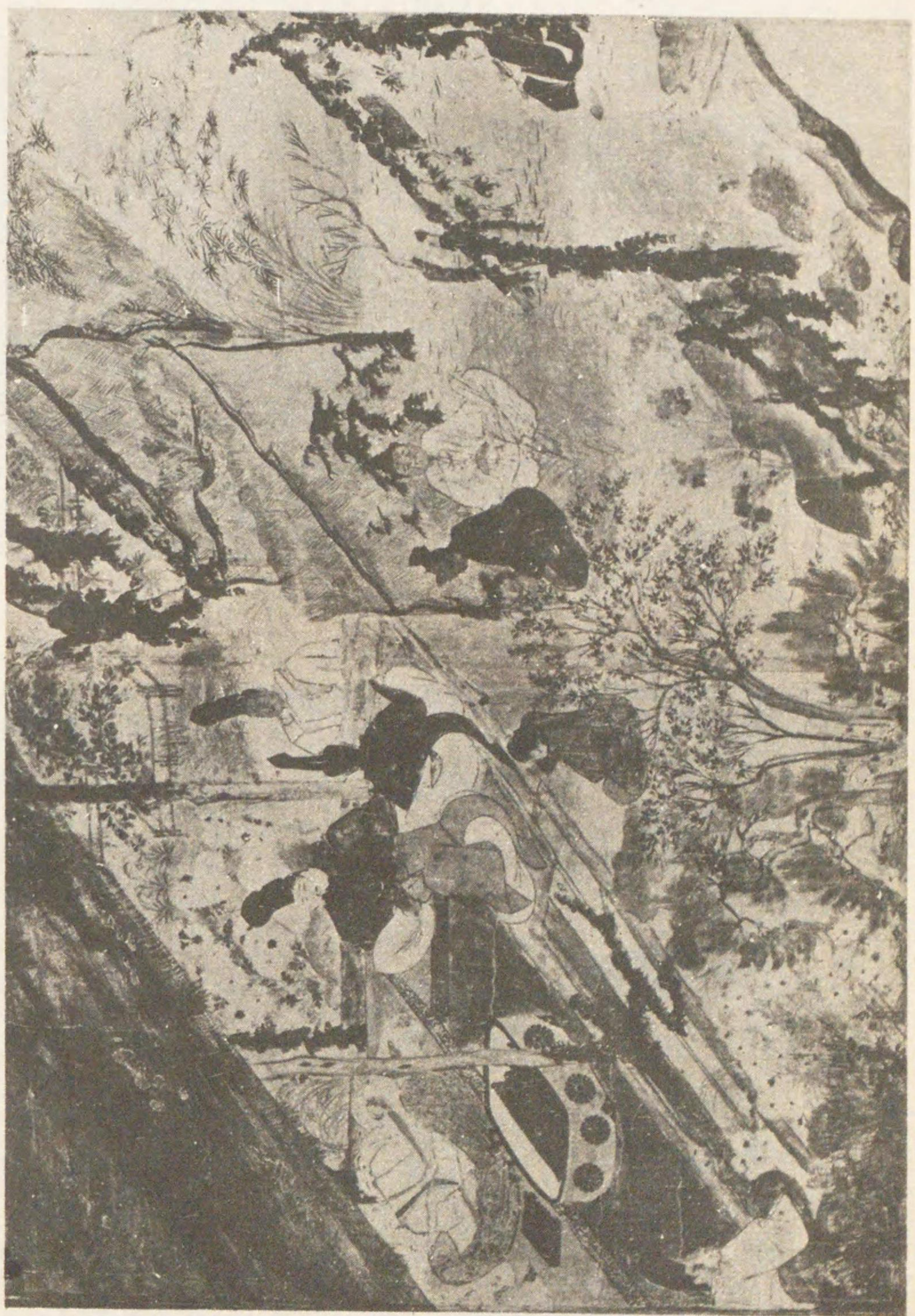


東大寺南大門

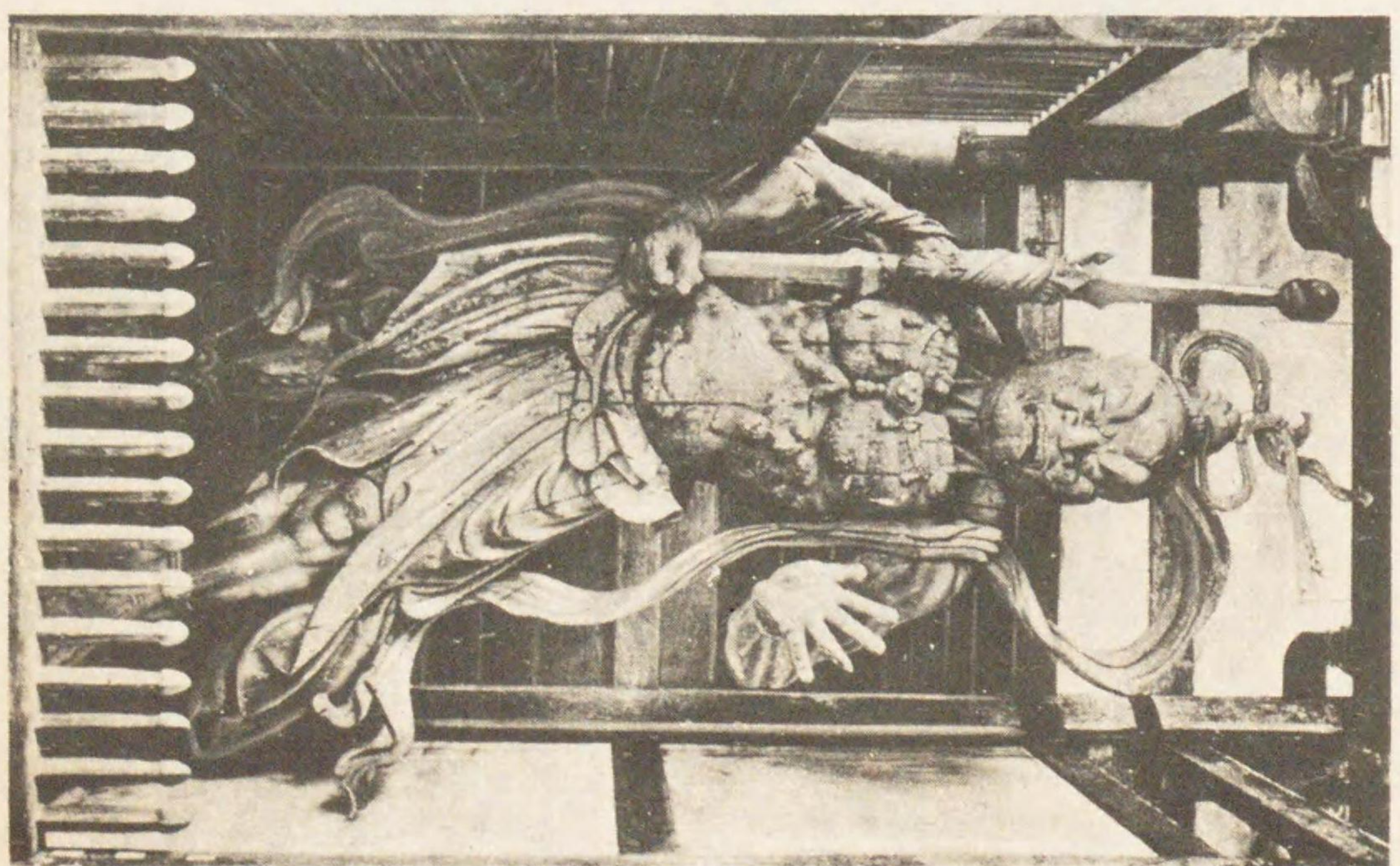


圓覺寺舍利殿

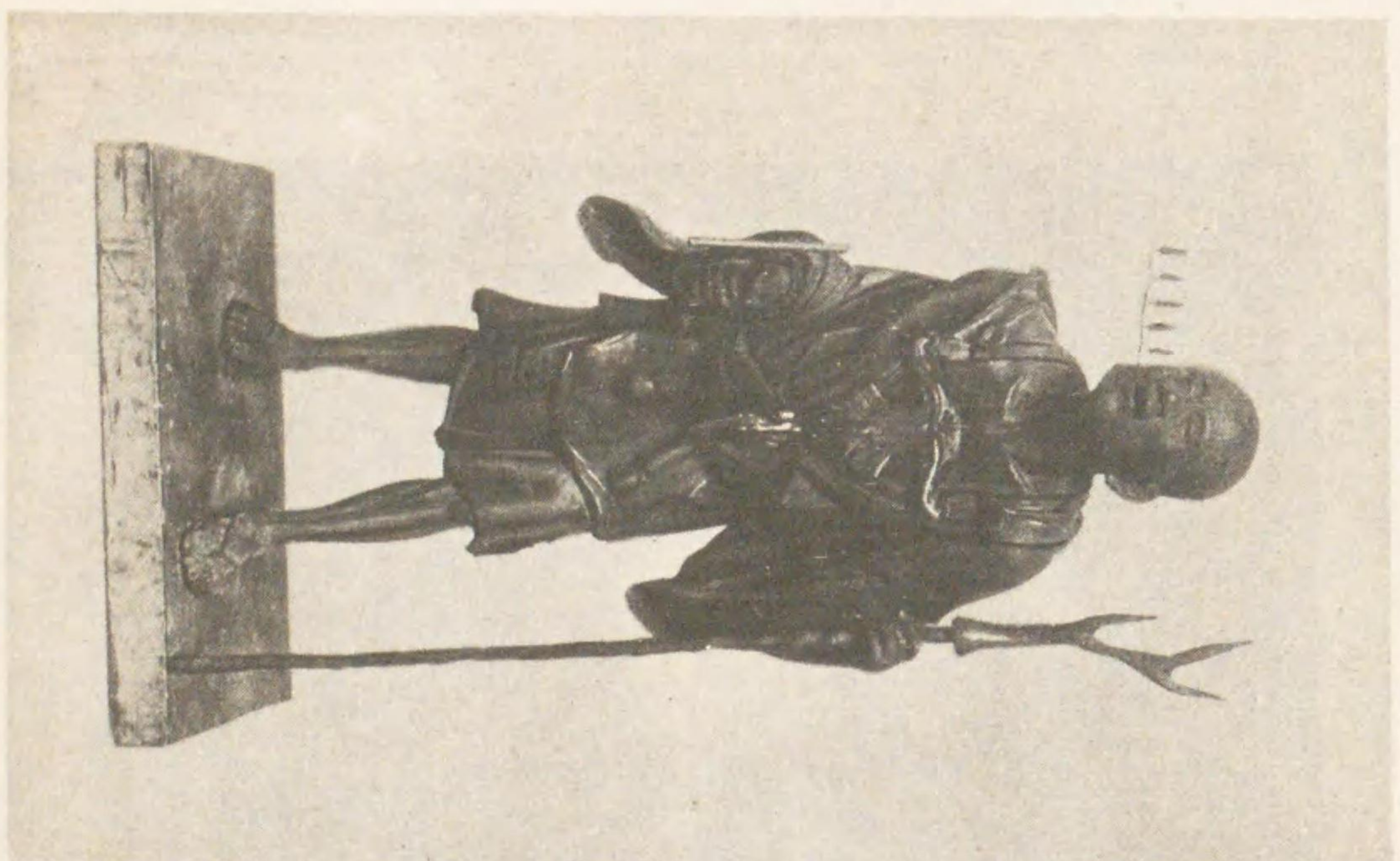




北野天神緣起繪卷



大東大南門金剛力士像



空也上人像





源 頼 朝 畫 像

於いて練られた手法が影響した。その盛んに用ひられたものは流造の形式であつたが、また大規模なものも見られるに至つた。今日に遺れるものとしては、寢殿造の形式が應用せられた嚴島神社攝社ましろ神社本殿の如き、その最も大なるものである。單に簡素を旨とした前代までの神社建築に對比して一つの進展と見なければならぬ。

寺院建築は平安時代に於いては技巧美に偏し、建築本來の構造や意匠になんらの發展をも見せなかつたのに對し、この時代に入ると、新時代の風潮に應じて巧緻纖細の技よりも雄渾豪壯な建築構造の持つ力の美しさを表現するに至つた。而して平安時代以來の傳統的様式には和様建築があり、石山寺多寶塔、京都蓮華王院本堂、三間堂等がその例であるが、しかも時代の好尚に應じて簡素雄偉の美を示してゐる。新様式として第一に注意せられるのは天竺様であつて、これは俊乗坊重源ちゅうげんが平氏の兵火に焼失した東大寺大佛殿以下の伽藍を復興するに際して始めて用ひた様式である。この様式は支那宋代に源流を有し、その特色は要部の構造が簡單で、しかも大規模な建築を構築し得る點にある。その遺構としては東大寺南大門や播磨の淨土



寺淨土堂等が擧げられる。第二には新興の禪宗伽藍に見られる唐様建築がある。これは完成された様式として支那からそのまゝ移入せられ、先づ時頼の起した建長寺伽藍の建築に用ひられ、次いで時宗の營んだ圓覺寺伽藍に於いて大成せられ、その後鎌倉京都を二大中心として次第に地方にまで擴まつた。圓覺寺舍利殿は當時のまゝの建築を今日に遺してゐる。これは前代以來の堂塔と異なつて白木で造られ、質實なる禪の精神を現はしてゐる。更に第三には前代以來の和様建築に天竺様と唐様とを加味した折衷式建築がある。その遺構にはこの時代に續く建武年間に出來た河内の觀心寺本堂がある。

以上の諸様式は始めは夫々の特徴を明らかに示してゐたが、時代の降ると共に本來の特徴を失ひ、和様を中心として綜合されるのである。

住宅建築ではこの時代に武家造が創始せられた。武家造とは鎌倉に於ける武士の間に營まれた住宅形式で、從來の寢殿造系統の建築を基礎に幾多の新味を適宜に加へたものである。即ち寢殿造の如き、左右均齊に一棟づつ廊下を以て連續するものでなく、一棟の主殿を夫々利便によつて數室に分ち、正面に玄關を設け、屋根を板葺

とするもので、實際を重んずる武士生活のよき表象である。

彫刻 平安後期に於ける彫刻は概ね婉麗典雅に偏し、潑刺たる生氣に乏しかつたが、この時代にはかゝる様式手法を脱し、雄渾闊達にして多様な表現を示し、時代の新興機運を現はすと共に、更に遡つて奈良時代の優れた彫法に通ずるものを潛ましめた。もとよりこの時代の精神は文化全般に復古的なものとなつてゐるが、これがいみじくも彫刻に見られるのは、偶平氏の兵燹に罹つた奈良の東大寺興福寺の復興に際して、そこに残された遺品に接した佛工が自己の創作心に投合するものをこれに感じたことにもよる。しかもよく現實に生き、眞率を尙ぶ時代精神を反映して、寫實的表現や、個性の表現が重んぜられた。

作者としては名匠運慶が優れた天稟を示してこの時代の初めに活躍し、その子湛慶、弟子快慶等がその後を承けて一門繁榮した。運慶快慶の合作たる東大寺南大門の金剛力士像はその代表的作品で、雄渾な彫法を以て巧みに躍動感を横溢せしめてゐる。その他同門の康勝の作たる京都六波羅密寺藏の空也上人像は念佛を唱へる行脚僧の姿を如實に現はし、東大寺の重源像、興福寺の世親無著像は鎌倉明月院の上



杉重房像と共に肖像彫刻に新生面を開いた代表作である。

繪畫 鎌倉時代の繪畫は、時勢の推移と共に前代の唯美主義的傾向から開放され、躍動的現實的となり、また在來の類型的なものから個性的、説明的なものへと進んだ。繪畫の中、最も多數に見られるのは佛畫であつて、前代の靜的にして色彩の調和を重んじたのに對して、圖様は豊富となり、動的にして力強い描線が用ひられ、且つ一般に説明的なものが多い。それと共に我が國本來の時間的連鎖を重んずる精神が具體性を尙ぶ時代精神に結合して、繪卷物が益々盛んとなり、題材の豊富、描寫の多様性が見られ、遺存の作品も尠くない。即ち平安時代の繪卷物が抒情的な物語文學を主題としたのに對し、この時代は多く軍記物文學、社寺の縁起、高僧の傳記等から採擇され、詞書とも關聯して劇的進行の表現に重きを置き、時代人心の嗜好に投じて盛んに製作せられた。既に前代末には源氏物語繪卷その他の名作が生まれてその發展を示唆したが、この時代に入つて平治物語繪卷、蒙古襲來繪詞等の戰爭繪卷、北野天神縁起、春日權現驗記繪卷等の社寺縁起、法然上人繪傳、一遍上人繪傳等の高僧傳、三十六歌仙の肖像繪卷等が續々と現はれてゐる。またこの時代には個性的なるものの尊重

から個人の特徴を寫す似繪（にまゐり）が生まれ、隆信、信實父子の名手を出した。肖像を描きまはは彫刻することは既に古くからあつたのであるが、個性描寫を意識的に行ふのはこの時代から著しくなつた。隆信筆と傳へられる京都神護寺藏平重盛、源頼朝等の肖像畫は大幅の名品として代表作に數へられる。

なほ禪宗の渡來に伴なつて宋元風の新しい畫題と畫趣とが入り來り、我が國の繪畫界に轉換を齎さんとしつゝ、あつたが、この新傾向は室町時代に水墨畫となつて立派に結實するのである。

書道 書道に於いては、鎌倉時代に入る頃から上代様に對して雄勁にして銳敏なる書法が興り、世を風靡するに至つた。畏くも後宇多天皇、花園天皇、後醍醐天皇の御書は、殊に御筆力俊秀高邁にして、御運筆暢達にましまし、眞に畏敬すべき神韻が拜せられる。また伏見天皇、後伏見天皇は雅馴な上代様の御書をものし給ひ、稀なる御名手と拜せられる。伏見天皇の皇子、尊圓親王は實にこの二流の書法を大成せられ、優美豊潤な御書風を開かせられ、永く後世に書道の模範と仰がれ給うた。後に江戸時代になつて一般に行はれた御家流（おゐけりゅう）と稱するものは親王の御筆法を承けたもので



ある。なほ支那との間に禪僧の往復が繁くなるに伴つて宋元の力強い書風が専ら禪僧や武士の間に取容れられ、榮西・道元を始め、泉涌寺の中興開山俊枋は能書家として名高く、また歸化僧は何れも書に秀でてゐた。

**工 藝** 時代を貫ぬく尙武の風尙と武士の需要とに應じ、甲冑・刀劍等武具の製作技術は大いに進み、武士社會を背景として著しい特徴を示した。

甲冑は前代末期に我が國獨特の大鎧が製作されるに至つたが、この時代の初期に明珍<sup>みやうちん</sup>が出て明珍家の始祖となり、精巧なる製作によつて名を擧げ、永く子孫に及んだ。刀劍についてはその盛名は既に支那にても讚へられたが、この時代になつて更に獨特の發達を遂げ、名品を多く遺してゐる。殊に後鳥羽上皇は御親ら菊御作<sup>きくごさく</sup>を鍛へ給ひ、また諸國の刀工を召し、月別に御番鍛冶を定めて鍛鍊に従事せしめられた。かくてその技は益々進み、鎌倉時代末期には京都に粟田口吉光、鎌倉に岡崎正宗、越中に郷義弘<sup>ごうぎ</sup>等の名工が現はれた。

金工にはなほ精巧にして氣品ある佛具類が多く作られ、漆器にも蒔繪・螺鈿等を施した名作を出したが、なほ見逃し得ないものに陶器がある。陶器は古代より發達を

遂げてゐたが、この時代になつて宋の製陶法の優れたるものを採用して革新的な發展を見た。例へば加藤景正は道元に從ひ渡宋して陶法を修め、歸朝して尾張の瀬戸に窯を築き、その子藤四郎は黄色の釉藥を發明して黄瀬戸を製した。その他各地に窯業の發達があり、後世名物として愛玩されるものにはこの時代の遺作が尠くない。かくして鎌倉時代の美術工藝は、古來の傳統を生かしつつ、雄渾にして即實的なる精神を發揮し、更にその中に宋元文化の攝るべきものをよく溶融し、優れたる國民文化として發達したのである。正に日本文化の特質たる傳統性・包容性と、これに加ふるに獨創性とを最もよく顯現したものと云ふべきである。



## 第二章 建武中興と吉野時代

### 第一節 建武中興とその精神

#### 一 後醍醐天皇の親政と北條氏の滅亡

院政の廢止 後醍醐天皇は文保二年(一九七八)實算三十一を以て御位に即かせられた。既に十分なる御年をめされ、且つ天稟英邁にして、進取的な御氣性にましました。御父君後宇多上皇は慣例のまゝに院政を行はせられたが、英明なる後醍醐天皇に御望を囑せられ、天皇即位の後、三年にして院政を廢し、天皇親政の御代となし給うた。こゝに於いて朝政は本然の姿に復したのである。北畠親房はこれを以て「天下こぞりて是をあふぎ奉る。公家のふるき御政にかへるべき世にこそと、高きもいやしきも兼てうたひ侍りき」と神皇正統記に讚へ奉つてゐる。

かくて天皇は記録所を復活して政務に精勵あらせられ、裁判の公正にして私なきを期し、官職を授くるにその人を選び、學術の興隆を圖り給うた。併しながら兵馬の實權はなほ鎌倉幕府の壟斷せるものなるが故に、幕府の存續する限り、如何に政治上の御改革をなし給ふとも、それは不徹底たるを免れない。されば天皇は平安時代親政の行はれた醍醐天皇の聖代、延いては肇國の御精神に復つて政治を刷新せんとの御志を懷かせられた。

天皇の御研學 天皇の御修養には洵に景仰し奉るべきものが多かつた。天皇は夙に吉田定房・五條良枝等に就いて御學問にいそしまれ、また和歌の道にも秀でさせられた。神皇正統記には天皇の御學問について、後宇多の帝こそゆゑしき稽古の君にましまししに、その御跡をば能く嗣ぎ申させ給へり、剩へ諸々の道を好み知らせ給ふこと、有りがたき程の御事なりけんかし」と讚へ、凡て和漢の道にかね明かなる御事は、中頃よりの代々には超えさせましましけるにや」と頌し奉つてゐる。増鏡にも、御歳もいとほしたなうものしたまへば、萬の事くもりなかんぬり。三史五經の御論議などもひまなし」と記し奉つてゐる。而してその御學問の中にも理氣を重んずる宋學



即ち程朱の學を深く勵み給うた。從來の朝廷の學問は大江家菅原家などによつて傳へられてゐたが、天皇は更に僧玄惠などを召して宋學に御精進あそばされたのである。なほ天皇は神道及び國史にも御造詣深くましまし、佛教では密教の御修行にも勵み給ひ、或は僧疎石妙超等に參禪せられて悟道に入り給うた。かくて清新にして活潑なる學風が宮中に興され、朝臣また何れも學問修行に精進し、大義を明らかにして氣節を振起し、忠誠の精神を鼓舞して政道を興さんとするに至つた。

人材の拔擢 以上の如く、叡明なる天皇の下に積極進取の人材が雲集し、朝廷には大いに活氣が漲つたが、それはまた天皇が人材拔擢に御意を注がれ、適材あれば門閥の高下を問はず用ひ給うた結果でもあつた。北畠親房まこと萬里まご小路宣房のり吉田定房の所謂三房が重用せられたのを始め、日野資朝も人物俊秀なるによつて參議に列せられ、また同じ日野氏の末流日野俊基が三十歳餘で五位の藏人に補せられ、何れも御知遇に感激して、政道の刷新に輔翼の誠を捧げた。花園上皇はその宸記に、天皇の御政について「近日政道歸淳素君已爲聖主、臣又多入歎」と記し給ひ、天皇の下に人材多きを讚へられた。されば一方北條氏の越權と失政が相續くとき、朝政の振肅が討幕計畫へ

と進展するのは當然であつた。

幕府の失政 後鳥羽上皇の討幕の御雄圖が挫折してより、幕府は益々權勢に驕り、北條氏の越權は皇位繼承の御事にまで干與するに至つた。而して長い歲月に亘つて兩統の迭立があり、朝臣は自ら黨を分つた情勢にあつたが、その惡弊が次第に反省されるに至ると共に、武家政治が國體に悖るものなることが痛感されて來た。然るに幕府はなんら反省するところなく、たゞ頼朝以來の舊慣を固執せんとし、且つ不遜にも朝廷に對峙する意識を濃厚にした。

而して幕府が内部に對して信望を失墜するに至つたものに財政問題がある。文永弘安の役後、家人の財政は漸く困難となつたに拘らず、幕府は戦後の處置について恩賞授與の方策を講じ得ず、家人の窮乏が日に加はつたので、その救済に腐心し、遂に永仁五年（一九五七）所謂徳政令を發して、賣却質入せる土地を無償にて返却せしめ、金錢及び貸借に關する訴訟を受理しないこととした。然るにこのことは却つて經濟を混亂せしめ、家人は米錢の融通を阻止され、その後愈々窮地に陥つた。

かゝる際に北條高時が執權となつたが、彼は弱年にして性來暗愚、幕政統率の器で

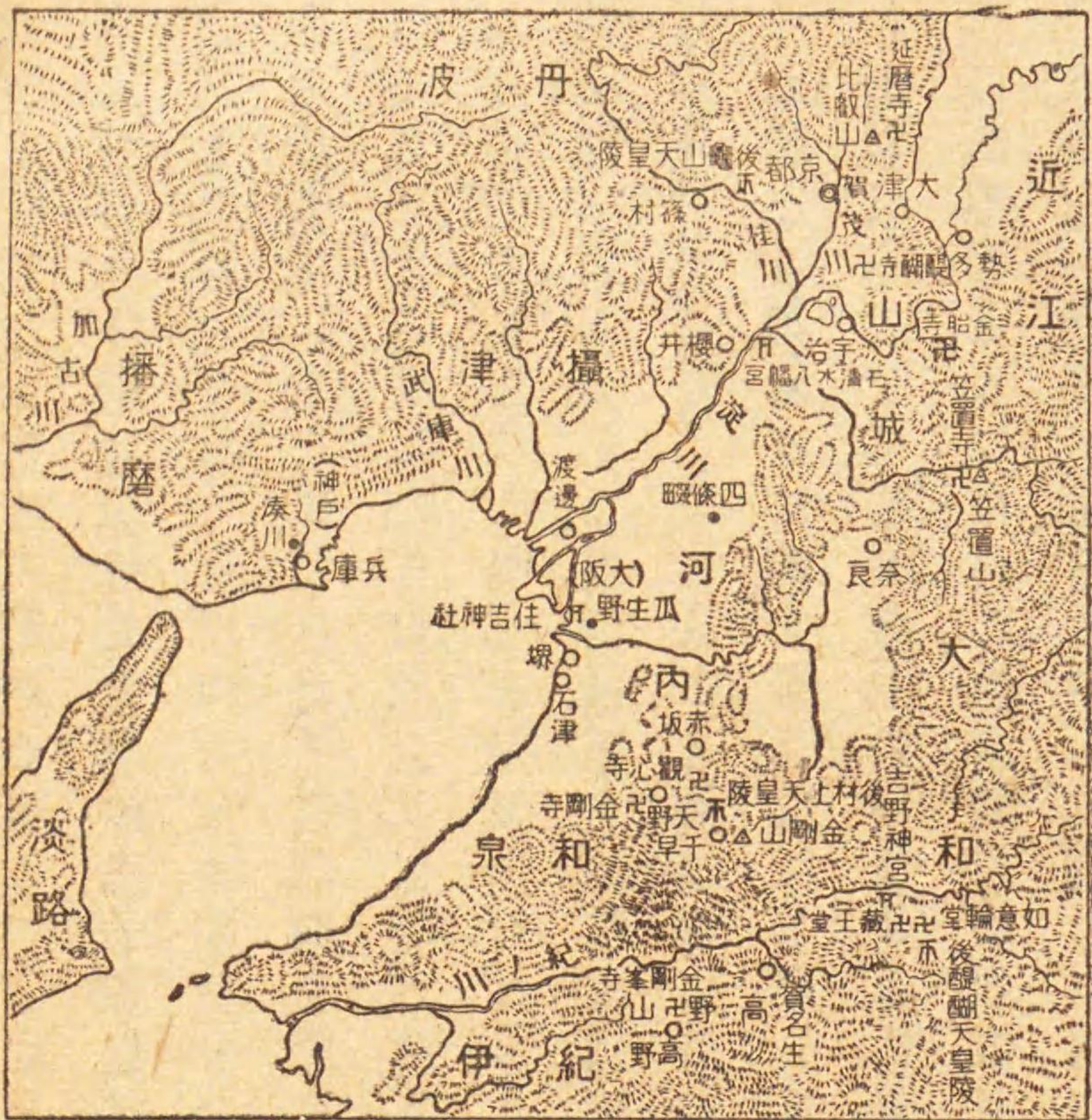


なく、家臣長崎高資に實權を握られ、嘉暦元年(一九八六)二十四歳にして執權職を退いて出家した。この間内訌續出して幕府の威信は地を拂ひ、北條氏衰頹の兆は愈、明らかとなつた。

**正中の變**　こゝに於いて後醍醐天皇は正中元年(一九八四)御近臣の日野資朝同俊基等をして勤皇の武士を諸國に募らしめられ、討幕の事を企て給うたが、やがてこのことが六波羅探題に洩れるや、幕府は兵を發して計畫に與つた武士を殺し、資朝俊基等を捕へた。よつて萬里小路宣房は勅命を拜して鎌倉に下向し、事なきに努めたため、幕府は資朝を佐渡に流したのみで事件が落着した。世にこれを正中の變といふ。

**元弘の變**　天皇は一旦の御蹉跌にも屈し給はず、再び討幕の御企を進めさせられ、皇子護良親王を始め、俊基法勝寺圓觀醍醐寺文觀等の公卿僧侶をしてこれに參畫せしめられた。或は親しく南都北嶺に行幸あらせられてその關係を緊密にし給ひ、また護良親王を天台座主として延暦寺に遣はされ、一山の僧徒が勤皇の誠を致す基を固くせられた。近畿の武士の間にも朝臣等勸説の效があつて天皇に忠誠を捧げんとする者が次第に現はれた。然るにこの隱密の計畫も機未だ熟せざる中に元弘

元年(一九九二)再び幕府の知るところとなり、御雄圖の貫徹は前途の多難なるを思はしめた。



近畿要圖

幕府は討幕の秘策が叡慮に出でさせられしを察知するや、事態容易ならずとなし、六波羅をして兵を發して皇居に迫りまゐらしめんとした。こゝに於いて同年八月、天皇は畏くも神器を奉じて京都を出で給ひ、叡山行幸と見せて花山院師賢をこれに遣はし、實は山城の鷲峯山金胎寺に幸し、次いで笠置山に行幸せられ、こゝを根據として近畿の諸國に勤皇の兵を募らせられた。河内の豪族楠木正成が御前に馳せ參じ、



感涙に咽びつゝ、聖運の開かせ給ふべき旨を奏上したのはこの時のことである。幕府は同年九月擅に後伏見上皇の皇子量仁親王光嚴院を奉じ、且つ諸將をして行在所を侵しまるらせた。笠置山の天嶮も賊の大軍を支へ切れず、天皇は神器を奉じて河内の赤坂城に向かはれたが、遂に賊兵を避け給ふこと能はず、六波羅に移御あらせられることとなつた。この翌元弘二年三月、幕府は無道にも承久の故例を奏し、天皇は盛りの花をあとにして都を發輦あらせられ、海路はるけく隱岐の孤島に遷り給うた。幕府は事に參畫した資朝俊基を斬り、文觀圓觀を遠流に處した。

## 勤皇諸臣の活躍

これより先、笠置山の未だ陥らざる時、正成は護良親王を迎へて、その館なる赤坂城に兵を擧げ、雲集し來れる賊の大軍をよく防いでこれを惱ました。しかし衆寡敵せずして落城の餘儀なきに至り、護良親王の御行方と正成の所在は賊軍には不明となつた。この間、親王は近畿各方面を往來せられ、令旨を諸國に發して勤皇の士を召され、正成も再擧の畫策を進めた。故に赤坂落城後も京畿の動搖は熄まず、正成は再び赤坂城を奪還し、また攝津に出でて六波羅の兵を破り、更に金剛山の中腹に千早城を築いてこれに據り、護良親王は吉野に據つてよく賊軍を防がれた。

天皇は隱岐に遷らせられて後も、朝威の回復に御心を傾け給ひ、護良親王との御連絡もとらせられてゐた。一方正成は如何にもして宸襟を安んじ奉らんとし、寡兵を率ゐて大敵重圍の千早城を守り、智謀を盡くして雲霞の如き賊軍を惱まし、よく孤城を支へて官軍のために萬丈の氣焰を擧げた。されば諸國の武士にして大義を辨へたものは、何れも菊水の旗風に誘はれ、各、その郷國に於いて勤皇の軍を起すに至つた。諸國に蹶起した勤皇武將の主なるものは、肥後の菊池武時、伊豫の土居通増、能通綱播磨の赤松則村、圓心等であつた。就中、菊池武時は肥後の豪族であつて、累代武勇の家に生まれ、有力なる勤皇武將として義兵を擧げたが、元弘三年（一九九三）三月、博多の九州探題を攻め、惜しくも櫛田濱の戦に壯烈な忠死を遂げた。しかしその後には嫡子武重以下多數の一族があり、その勢力は侮り難いものがあつた。

## 北條氏の滅亡

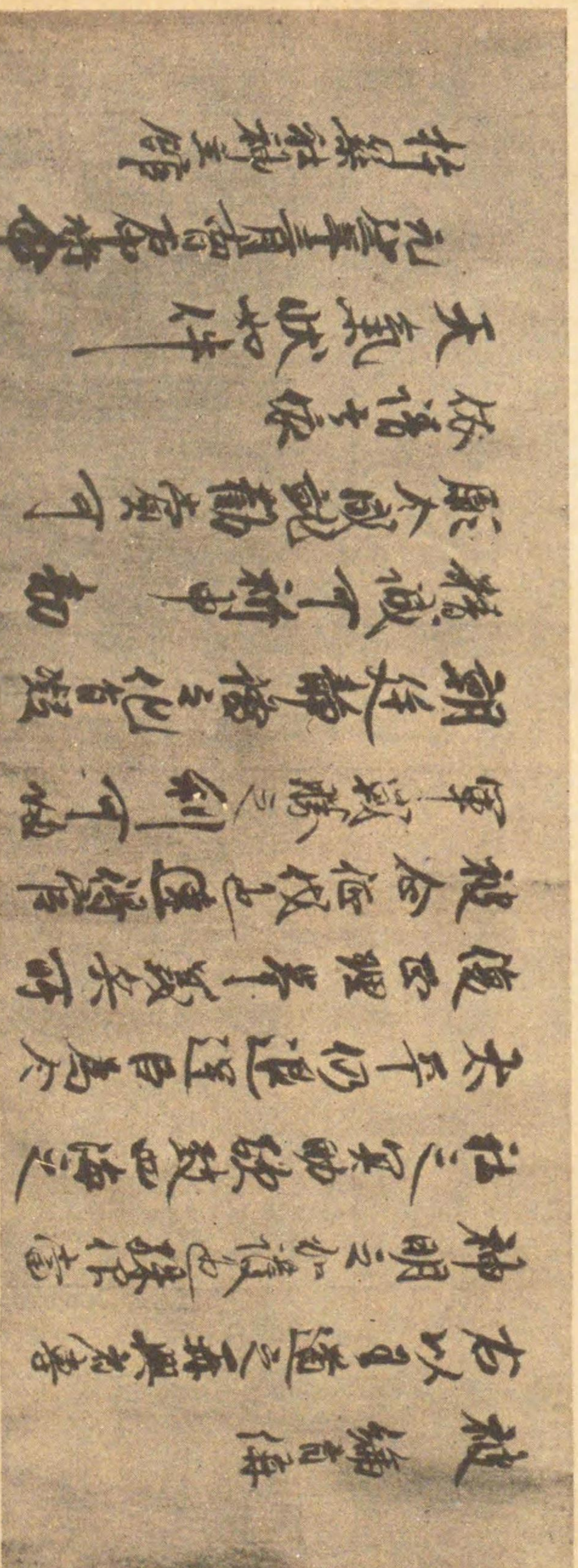
隱岐にまします天皇は官軍が諸國に振起せる報を得させられるや、元弘三年閏二月、千種忠顯を従へられ、玉體を一葉の舟に託して伯耆に向かはれ、名和長年の奉迎を受けさせられて船上山の要害に移り給うた。かくて官軍の勢は愈々振るひ、三月天皇は綸旨を杵築社出雲大社に下して王道の再興を祈らしめられ、やが



て忠顯は軍士を率ゐて伯耆を發し、赤松則村と合して京都六波羅に迫つた。一方幕府は大軍を伯耆に送らんとし、足利高氏名越高家を將として西上せしめたが、高家は忠顯、則村等と山城に戦つて敗死した。然るに高氏は豫てより幕府に對し異圖を懷いてゐたので、丹波に入るや忽ち歸順し、馬首を返して忠顯、則村等の軍と共に六波羅を攻めて同年五月これを陥れた。こゝに於いて近畿の大勢定まり、賊軍は多く歸服した。

この頃關東にては、新田義貞が護良親王の令旨を奉じ、その一族を率ゐて上野に兵を擧げ、進んで武藏に出て鎌倉に迫つた。結城宗廣を始めとしてこの勤皇軍に馳せ參ずる者多く、同じく五月遂に鎌倉を陥れた。高時以下一族郎黨多數自害し、北條氏はこゝに滅んだ。鎌倉幕府は頼朝の開設以來百四十餘年にして倒れたのである。

天皇は官軍の勝敗を氣遣はせ給ひつゝ、京都還幸の途に就かせられ、路次に續々と捷報を聞召されながら、五月の末兵庫福嚴寺に着御、六月初め同地を御發輦、正成その先驅を承り、巡狩還幸の御儀を以て龍顏麗しく京都に歸らせられた。承久の變以來百十餘年、後鳥羽上皇の御理想はこゝに於いて實現せられ、これより建武中興の宏謨



後醍醐天皇再興繪旨







我が國本來の政治たることはいふまでもない。かくて天皇は國體本然の姿に於いて親政を行ひ給ひ、且つ御臨終までは御讓位の御儀がなかつたのである。

次にこのことに關聯して天皇は中興に際し關白を置かれず、萬機を親裁あらせられた。攝政關白は平安中期頃より常置せられるに至つたもので、大命を奉じて政治を行ふものであるが、屢、聖旨に背いて天皇統治の根本義に悖る不臣の行爲が尠くなかつた。従つて後醍醐天皇が斷然これを廢止せられ、政治の正しかりし古き世に復せられたことは、中興精神として重要なるものであつた。

次に北條氏を討伐して頼朝以來百數十年に亙る武家の專斷、殊に承久以來大政に容喙した無道なる執權政治を斷乎として除き、上世の盛世に復し給うたことは、同時に國家政治最大の障礙たる幕府政治の拂拭を意味するのである。而してその政權を親政の下に收め給ひ、萬民皆その所を得る政治を布かせられることは、中興精神の主たるものであつたが、社會の因襲久しきため、施政の具體的な方法については特に大御心を注がせ給ふところがあつた。天皇は中興の御政治に當つて政治上の要職に多くの武家を任用し給ひ、宏大なる皇謨を示させられたが、武家人材の拔擢起用は

斷じて武家政治の容認を意味するものではない。即ちそれは明治維新の官武一途の精神と相通じ、歴史を貫ぬく肇國の精神に歸するものである。併しながら既成の莊園制度や、その地盤の上に立つた地頭制等は、そのままに認められ、これを改廢せずして一統の政治を實現せんとせられた。義良親王を陸奥に、成良親王を鎌倉に遣はし給ひ、征夷大將軍の職もなほこれを置かれて皇子護良親王を以て補せられたことは、文武一統の大義を顯示し給へるものである。

而して以上を通じて見られるものは復古的精神である。このことは上に述べたことによつて自ら明らかであるが、更に他の二三の例にも具體的に顯現せられてゐる。即ち天皇は親しく年中行事を撰せられて朝儀の復興を圖り給ひ、また中興政治の劈頭に大内裏の造營を始められて朝政を復興せんとせられた。天皇はまた貨幣制度の上にも復古的改革を意圖せられ、この頃盛んに流通してゐた貨幣が何れも支那の錢貨であることを思召されて、建武元年（一九九四）三月、詔して乾坤通寶の鑄造を始めんとせられた。これは平安時代、村上天皇の御代以來斷絶したものの復活であつて、その結果を詳かにしないが、國家的精神殊に復古意識の發揚が窺はれ、中興精神



の一端と拜せられる。

要するに建武中興は國體の本義に照らし、復古即維新の精神の下に展開せられ、政治の時弊を革め、以て皇道政治の顯揚を期せられたものであつて、先の大化改新後の明治維新と相通じて一貫する肇國精神の輝かしき發露であつた。

### 三 中興の新政

中興の政治機關 中興政治の施設として最も重きものは、京都還幸の後に復せられた記録所である。これは先に後宇多上皇の院政廢止によつて置かれたものよりも權限が擴大され、政務を總攬すべき中樞の機關とせられた。次に雜訴決斷所を新設して、記録所にて取扱はない雜多な事項を處理せしめられ、公卿及び明法道の人々を寄人としてその裁決に當らしめられた。建武新政の實行に際し、先づ當面すべき障礙は土地に關する問題であり、しかもそれらの關係が複雑を極めた時であるから、この政廳の特設を必要としたのである。またこれに關聯して時局收拾の第一歩である恩賞の事を取扱ふために恩賞方が設けられ、その機關の重要性に鑑みてこれに

出仕する人々を中興功臣中から選ばれた。その他武者所むしやどを置き、新田義貞を頭人かみとして専ら武士をして京都を警衛せしめられた。

諸國に於いては國司と守護とを併置せられた。鎌倉時代は國毎に公家衆を國司、幕府の武士を守護として補任し、武士が國司たる場合のみ守護を兼ねる例であつたが、中興政治にては國司と守護とを並立して補任せられ、しかも國司を公家衆に限らず、守護を武家に限らず、共に同様に任ぜられたので、この點にも文武一統の精神が示されてゐる。而して奥羽と關東は遠く京都を離れ、且つ幕府勢力の根據地であつたから、特にその鎮撫に御意を用ひさせられた。即ち皇子義良親王を奥羽に下して多賀國府に居らしめ、北畠顯家を陸奥守に任じて輔けしめ、また皇子成良親王を鎌倉に下し、足利直義なほを相模守に任じて皇子を輔けしめられたのである。

新政運用の困難 天皇は以上の如き中興の政治機關を整へ給ふと共に、元弘四年(二九九四)正月、建武と改元して親政の輝かしき發足とせられた。併しながら新政運用の實績は急速には擧らず、前途は頗る困難であつた。即ち中央官衙の重臣は文武一統の精神によつて公卿武家雙方の功臣から補任せられたが、庶幾に反してその間



に屢、利害の背反も見られ、また政務に慣れずして庶政の處理に澁滯を來たすことが尠くなかつた。しかも重臣が概ね種々の職を兼任せしめられたことは御苦心の存するところであつたが、同時にその職掌權限の不明瞭なるものがあり、直ちに整然たる官職制度の實施に進み得なかつた。殊に地方には中興の精神を體せざる舊態依然たる勢力が蟠居して、大業は容易に實現しなかつた。もとより中興の精神は武士の存在を否認せられるものではなく、臣民各、その分を以て天皇親政を翼賛し奉るにあり、恰も上世の氏族制度に於いて各氏が夫々に傳はる職業に従つて天皇に奉仕した關係に通ずるものであつた。しかしこの時代に於ける現實の問題として、永年の武士主従の關係及びこれを基礎とする土地領有形態は、因襲的に根強いものがあり、公家衆の國司守護は武家に壓倒せられて吏務は名ばかりとなり、一統政治の成果は容易に擧らなかつた。尤もこれは草創の際として運用上未だ確乎たる具體性の樹立する暇のなかつたことを意味するものであつて、その成果は實に將來に俟つべきものであつた。

## 恩賞の困難

中興政治の始めに當つて、政務の運用と共に、處置の困難なのは恩賞

の問題であつた。北條氏の運命窮まると見て多數の幕府家人が歸順した事情は、多くの場合、畢竟父祖傳來の土地を保持し、且つ恩賞に與つて功名利達を遂げんがためであつた。されば中興政治は忠勤を抽んでた多數の武士や社寺に對し、先づ在來の領地を安堵し、更に功を論じて賞を行ふべきであつた。かくて天皇の京都還幸の翌月たる元弘三年七月、朝廷では北條氏に黨與した者を除いて、その所領を舊の如く安堵せしめることを諸國に仰せ出された。即ち平安時代以來數百年の傳統を有する莊園制と鎌倉幕府の所領安堵の慣行とはそのまゝ、これを認められ、所領の知行に關してはなんら手を觸れられなかつたのである。

しかし恩賞の公正を期するには非常な難問題が横たはつてゐた。元來當代の土地制度そのものが複雑なるために、所領問題の處理も煩瑣なるものがあり、これを適切に處理すると共に、多數の將士に對して恩賞を公平に行ふものは、武人にしてしかも練達の士たることが必要であつた。中興政治に先づ雜訴決斷所、恩賞方を置き、主要なる武將等を擧用して參與せしめられたのは、この問題を解決するためであつて、その裁斷が政治の中心であるかの如く思はれたのも已むを得ぬことであつた。



しかもなほその成果が擧らないため不評の聲が起らんとしたが、この時野望を懐ける足利尊氏(高氏)は新政の未熟に乗じて反旗を翻し、恩賞を以て愚蒙なる不平の輩を傘下に參ぜしめるに至つたのである。

大義の晦迷　また鎌倉幕府の討滅、建武中興の成就についても公卿武家等にして互にその功を誇り、我執を捨てないことも尠くなかつた。即ち公卿の一部は徒らに武家政治開始以前の榮華を追想し、或は武士に對する傳統的な高位高官を誇り、武士はまた討幕の功績を己れに歸して公卿を侮る風があつた。公武兩者の悉くが眞に大義に徹し、よく和衷協同して大政輔翼の至誠を捧げたならば、中興政治は輝かしき成果を收め得たであらう。

また地方武士の大多數は先に北條氏の政治を惡むか、またはその頽勢の挽回すべからざるを見て、始めて官軍に従つたのであるから、眞の中興精神に透徹するものは少く、武家政治そのものについて敢へて疑義を挾まなかつた。むしろ彼等の心は長い間行はれて來た武家政治に慣れ、全國多數の舊幕府の家人は幕府の復興を求めた。而してこの弱點に乗じて足利尊氏は幕府の再興を標榜し、好餌を以て鎌倉重代の家人を招き、更に多くの公卿をも靡かしめ、以て大義を紊すに至つたのである。

## 第二節 吉野時代

### 一 足利尊氏の叛逆

尊氏の野望　建武中興に當り、討幕の御事に勳功殊に多くあらせられた護良親王が征夷大將軍に補せられ給ふや、新田楠木名和の諸將は皆その下にあつたが、足利尊氏は源氏の流として鎌倉時代から名望高く、後醍醐天皇が特に眷顧を加へさせられたのに狎れて、獨り中興政治に隱然たる勢威を示し、祖先以來の野望を遂げるはこの時なりとして、護良親王に拮抗する風があつた。こゝに於いて親王は尊氏の心中を察し給うて新政の前途を憂慮せられ、密かに尊氏排撃の策を運らされた。尊氏は親王の御態度に脅威を感じ、策謀を廻らして親王を讒しまゐらせた。建武元年(一九九四)十一月、親王は鎌倉に遷され給ひ、翌二年七月、尊氏の弟直義のためにいたましき御最期を遂げさせられた。



北條時行の亂と尊氏の東下 北條氏滅亡の後、その殘黨は隱微の間に再舉の機會を窺つて蠢動し、新政の進展を妨げてゐた。建武二年(一九九五)七月、北條高時の遺子時行が鎌倉に侵入した所謂中先代なかさきだの亂はその最も大なるものであつた。足利氏は高時以前を先代と見做し、時行のことを中先代といひ、尊氏以後を後代と稱してゐるが、これは尊氏自らが鎌倉幕府の後繼者を以て任じてゐたことを示すものである。一時行は信濃に兵を擧げ、その兵力侮るべからざるものがあり、遂に鎌倉に迫つたので、足利直義は鎌倉を捨て、成良親王を奉じて西走した。この時尊氏は京都にあつたが、この亂を利用して非望を遂げんとし、時行征討と、征夷大將軍諸國總追捕使の拜命とを奏請した。朝廷では、既に尊氏の野望を知り給ひ、幕府政治を復活するが如き職に補任することを許されなかつた。然るに尊氏は勅許を待たずして東下し、時行の兵を破つて鎌倉に入り、新邸を營んでこれに居り、敢へて朝命を奉ぜず、叛逆の色を漸く露骨に示した。かくして護良親王の薨後、朝廷に於ける武家の棟梁と認められてゐた義貞を敵視し、遂にその地盤を覆へすべく、義貞以下を討つを名として檄を遠近に飛ばすに至つた。

## 尊氏兄弟の西走

建武二年(一九九五)十一月、天皇は尊氏討伐のため皇子尊良親王

を上將軍とし、義貞以下を副へて東下せしめられ、且つ陸奥の北畠顯家をして背後より鎌倉を襲はしめられたが、義貞は箱根竹ノ下の戦で敗れ、尊氏直義兄弟はこれを追うて西上した。翌年正月、天皇は畏くも延曆寺に行幸あらせられたが、やがて顯家の軍が到るに及んで官軍の兵勢大いに振るひ、義貞正成長年等は奮戦して洛北の戦に尊氏兄弟を破り、賊軍を九州に走らしめた。尊氏は備後の鞆たもとに到つた時、醍醐寺三寶院賢俊の斡旋によつて光嚴院より院旨を賜ひ、これより持明院統を奉じて賊名を避けんとした。惡逆極まる足利氏が後に武家としての制覇に略、成功したのは専ら皇統を奉じたとなせるによるのである。

九州に於ける官軍の雄菊池武敏は、勤皇軍の主將として阿蘇惟直よしのちかと共に尊氏を邀撃し、必死の抗戦を試みたが、延元元年(一九九六)三月、筑前多々良濱の一戦に惜しくも敗れた。尊氏は勝に乗じて九州の主なる豪族をその麾下に従へ、太宰府に入つて上洛の用意を整へた。

## 楠木正成の戦死

この間、京都に於いては尊氏の東上に備へる方策も着々進めら



れた。即ち顯家をして再び義良親王を奉じて陸奥に下向せしめられ、また一方には義貞を西下せしめて銳意中國の賊軍を撃破せしめられた。義貞は先に尊氏に應じて叛いた赤松則村を播磨白旗城に攻めたので、則村は城を死守しつゝ、急を尊氏に告げ、その速かなる東上を促した。よつて尊氏は少貳大友の諸氏を従へ、同年四月太宰府を發し、備後の鞆に到り、直義は陸路より、尊氏は海路より水陸呼應して進み、その兵力極めて大であつた。されば義貞は一旦白旗城の圍を解いて兵庫に還り、直ちに事態を京都に報じた。

朝廷では廷議を開かれ、楠木正成は一旦賊軍を京都に入れて後、これを挾撃すべきことを獻策したが一同に容れられず、急ぎ兵庫に下り義貞を援くべきことを命ぜられた。正成は朝命を畏み、生還を期せざる覺悟を以て軍を兵庫に進め、主將義貞と力を協せ、海陸より迫る雲霞の大軍を邀へてよくこれを防いだ。然るに衆寡敵せず、官軍終に敗れて義貞は纔に身を以て逃れたが、正成は力戰苦闘の後、弟正季と七生報國の誓を遺し、一族郎等六十餘人と共に惜しくも湊川の露と消えた。時に延元元年（一九九六）五月二十五日であつた。

## 叡山行幸

湊川の敗報は京都の上下を震駭せしめ、天皇は賊兵の東上を避けて叡山に行幸あらせられ、義貞等が扈從し奉つた。續いて六月京都は合戰の巷となり、叡山の戰に千種忠顯は忠死し、また洛中の戰に官軍潰えて名和長年も壯烈なる戰死を遂げた。天皇は叡山より勅を諸國に下して勤皇の軍を募り給うた。これより先、尊氏は入京を前に山城八幡の本營に光嚴院及び御弟豐仁親王を迎へたが、八月擅恣にも豐仁親王即ち光明院を奉戴し、これによつて叛賊の名を免れんとした。且つその後、尊氏は光明院より征夷大將軍に補せられるといふ形式をとつて幕府を開いたが、これらの事は大義名分上認めらるべきでないことはいふまでもない。

この年十月、尊氏は叡山にましました天皇に京都還幸を奏請した。天皇は官軍の不振を憂へ給ひ、他日を期して徐ろに再舉を圖らんと思召され、官軍の柱石新田義貞をして皇太子恆良親王及び尊良親王を奉じて北國に下らしめられ、北畠親房をして尊澄法親王、宗良親王を奉じて伊勢に、五條頼元等をして懷良親王を奉じて讃岐に、次いで伊豫に赴かしめられた。これらの御事が實に天皇の深謀遠慮に出でさせ給ふところであることは申すまでもない。かくて天皇は尊氏の奏請を許容せられて京



都花山院家の邸に入り給うたが、尊氏は畏れ多くも部下の武士をして天皇を警固せしめ奉つた。

## 二 吉野朝廷と勤皇諸臣の活動

吉野皇宮 天皇は尊氏の不遜をみそなはし、遂に同年十二月、密かに花山院家の邸を出でまして吉野山に入らせられ、これよりこの地に皇居を定めて朝政を聽しめられた。爾來、後龜山天皇の京都還幸まで五十七年に亘つて、朝廷は概ね吉野山にあつたので、この間を吉野時代といふ。

吉野は深山幽谷を擁する天然の大城郭である。即ち大和・紀伊・伊勢三國の山地の中心を占め、守り易く攻め難い要害である。而して東の伊勢は北畠親房及びその子顯能がその勢力を扶植せる國であつて、大湊などの港灣を控へ、西南の紀伊は水軍諸將の根據地で、海上交通の便があり、北には大和の平野が展開し、西に聳える葛城・金剛の連峰及び河内は楠木氏の扼するところである。されば吉野山に據られることは、規模頗る雄大なる御計畫であらせられたのである。

## 新田義貞・北畠顯家の戦死

天皇は吉野山に皇居を定められると共に、先づ東國・北國・西國等の將士をして東西より進んで京都を回復せしめんことを圖り給ひ、更に諸皇子を諸國に派遣して各地方に官軍の中心を作らしめられた。北國にては義貞が恆良親王・尊良親王を奉じて越前金ヶ崎かねがさきに據り、子義顯・弟脇屋義助、その子義治を従へて力戦したけれども、尊氏は主力を以てこれを攻撃したので、延元二年（一九九七）三月、城終に陥り、兩親王はいたましくも薨ぜられ、義貞も同三年閏七月、萬策の效空しく、越前藤島に戦死した。

また陸奥の顯家は義良親王を奉じて、同二年八月西上の途に就き、弟顯信や結城宗廣と共に至るところに賊軍を撃破し、京都の回復近きにあるを思はしめたが、相次ぐ激戦に力盡き、翌三年五月、和泉の石津に於ける一戦に惜しくも敗れ、二十一歳を以て皇事に仆れた。しかし九州にては官軍大いに振るひ、菊池武士たひひ・武光兄弟は屢、少貳一色の軍と戦つてこれを破つた。

諸親王の御下向と諸國の忠臣 吉野朝廷にては顯家・義貞相次いで陣歿し、落莫の秋が訪れたが、少しも屈し給ふことなく、北畠親房等が樞機に參じて一意大勢の挽回を



圖つた。天皇は再び諸親王を地方に下し給ふこととなり、延元三年(一九九八)九月、義良親王・宗良親王は親房・顯信父子及び結城宗廣等に奉ぜられて東國に到り給ふこととなつた。

然るに義良親王・宗良親王の御一行が、伊勢大湊より船を艤して出發せられるや、間もなく激しい風波が起り、船隊は離散した。即ち義良親王は顯信・宗廣と共に辛うじて伊勢に還られ、親王は再び吉野に入らせられた。宗良親王は遠江に着かせられて、井伊谷城に入り給ひ、三河の足助重治、遠江の井伊道政等の諸士が忠勤を致した。親房は常陸に着いて筑波山麓の小田城に據り、東國に於ける勤皇軍の中心となり、遙かに九州の菊池阿蘇氏とも聲息を通じた。また伊豫にましました懷良親王は更に九州に下つて南九州の賊を平げられ、菊池武光は親王を奉じ、諸道の官軍中最も有力なる勢力となつた。四國では土居通治、得能通言等早く義兵を擧げ、忽那義範、河野通堯等も伊豫に起つて懷良親王を奉じた。

### 三 後村上天皇の即位

後醍醐天皇の崩御 然るに延元四年(一九九九)八月、天皇には御惱あり、同月十五日、先に伊勢より吉野に還啓せられた皇太子義良親王に御讓位あらせられ、翌十六日御劔を按じ給ひつゝ、吉野の皇宮に崩御あらせられた。寶算五十有二。天皇は波瀾重疊の世運によく中興の聖業を遂げ給ひ、やがて足利尊氏氏の叛するに及び、更にこれが討伐を圖つて種々御畫策あらせられたが、御雄志未だ成らざるに神去り給うたのである。義良親王は即ち後村上天皇にましまし、先皇の御精神・御遺業をよく繼述あらせられ、聊かも屈し給ふことがなかつた。

#### 北畠親房と神皇正統記

常陸の小田城に在つて勤皇の士心を鼓舞してゐた北畠親房は、後醍醐天皇崩御の悲報に驚き、直ちに吉野に歸つて後村上天皇を輔け奉らんとしたが、東北の形勢はこれを許さなかつた。親房が兵馬倥傯の間に神皇正統記職原抄の二書を著はして、朝政輔翼の誠を陳べたのはこの時のことであつた。

神皇正統記はその冒頭に「大日本は神國なり。天祖はじめて基をひらき、日神ながく統を傳へ給ふ。我が國のみ此の事あり、異朝には其のたぐひなし。」と我が國の神國たる所以を明確に敘べてゐる。而して皇祖天照大神の授け給ふ神器による皇位繼承の



正しく永遠なる所以を述べて大義を明らかにし、神器に具はる御徳によつて天皇が君徳を體現し給ふべきを進言し奉つた。その内容は皇位の繼承を中心として國史を概観したものであるが、特に政治の得失に論及して、その鑑戒となるべきものを重んじ、以て政道の振興せられんことを望んだものである。實にこの書は親房が忠誠を披瀝し、赤心を吐露せる血涙の結晶であつて、國體を明徴にせる點に於いて千古不滅の史書といふべきである。

親房はその後、關大寶の二城に據つて皇事に努めてゐたが、興國四年(二〇〇)三城遂に陥るに及び、吉野に歸り、朝廷の柱石となつて、四條隆資等と共に天皇を輔佐し奉つた。親房は東國の諸族を招致して義兵を擧げしめ、また紀伊を始め、中國、四國の水軍をして皇事に勤めしめたので、官軍の勢力は著しく挽回した。

楠木正行の忠烈　その頃楠木正成の子正行は、よく父の遺志を體して、南河内を中心にその力を養ひ、近畿官軍の柱石となつて、勤皇の軍を起し、北河内その他諸處に轉戦し、度々賊軍を破つて京都を回復せんとした。尊氏はこれを恐れ、正平三年(二〇〇)八月、大軍を高師直、師泰兄弟に授けて河内に向かはしめたので、正行は決死の覺悟

を以て吉野皇宮に參り、天皇に訣別申上げ、五日四條畷に賊軍を邀へ撃つた。初め正行の軍は優勢であつたが、終に敗れて壯烈な最期を遂げ、一族多くこれに殉じた。この敗戦は官軍にとつて大なる打撃となり、天皇は一時吉野山を出でて、大和の賀名生あなぶに行幸あらせられたが、賊軍は吉野皇宮に到り、火を放つてこれを焼くの惡逆をも敢へてした。

足利氏の内訌と勤皇諸臣　足利氏一族は始めより名分に晦く、利害關係によつてその勢力を集めたのみであつて、その結合力は極めて脆弱であつた。されば正平の初年に早くも内部に對立を生じ、尊氏直義兄弟及び高師直、師泰兄弟等が相争ひ、諸將の結束も亦紊れた。そのため直義は先づ正平五年(二〇一〇)官軍に降つて尊氏と争つたが、翌六年に一時和睦して、師直、師泰を殺した。同年尊氏兄弟はまた不和となり、次いで尊氏が官軍に降つたので、吉野朝廷は一時京都を收められるに至つた。然るに翌七年、尊氏は直義を鎌倉に殺すや再び叛し、次いで尊氏直冬父子相争つて直冬は官軍に歸順した。それより賊軍はまたも跳梁し、官軍は八年及び九年には夫々一時京都を回復したが、何れも間もなく奪還された。行宮も時に賀名生や河内金剛寺同



觀心寺攝津住吉神社等に遷される有様となり、朝廷の柱石たりし親房は正平九年（一一四六）六十二歳にて薨じた。しかし、足利氏も同十三年尊氏死して内訌は愈々激しく、同十六年官軍は一時京都を手中に收めることを得、その勢力を回復しつつあつた。この頃九州にあらせられた征西大將軍懷良親王は菊池武光武朝等を従へて征戰に當り給ひ、正平十四年（一一九八）八月、筑後川の戰に賊將少貳頼尙の軍を破つて勢益振るひ、九州に威武を輝かされた。しかし、長慶天皇の文中二年（一一三三）武光卒し、弘和三年（一一四三）親王薨去せられ、その後官軍は次第に振るはなくなつた。またこれより先、東國に於いては新田義貞の子義興が宗良親王の下に東國の經營に當つてゐたが、終に武運拙く、正平十三年（一一一八）武藏の矢口に戰死し、東國の官軍は漸く勢力を失ふに至つた。

#### 四 長慶天皇の即位と後龜山天皇の京都還幸

長慶天皇の即位 正平二十三年（一一二八）三月十一日、後村上天皇は攝津住吉の行宮に崩御あらせられた。天皇は御幼少の頃から御身を軍事に投じ給ひ、先には遠く

東北に官軍を督せられ、即位の後は先皇の遺勅に従ひ、中興繼述の御精神を懷かせられて、ひたすら皇威の伸長に叡慮を用ひ給ひ、あらゆる艱難を親しく嘗めさせられた。然るに今や御雄圖半ばにして神去りましたのである。

長慶天皇は御父後村上天皇を嗣がせられ、御祖父後醍醐天皇以來の御素志を達せらるべく叡慮を廻らし給うた。河内和泉の楠木和田橋本氏等忠臣の子孫にして、よく父祖の遺志を繼承したものがあつたのを始め、諸國に義兵を擧げるものも尠くなかつたが、その勢力は何れも大でなかつた。天皇は畏くも苦難を嘗めさせられつゝ、大和榮山寺に行宮を遷し給うたこともあつた。

後龜山天皇の京都還幸 弘和三年（一一四三）長慶天皇は皇弟後龜山天皇に御讓位あらせられた。顧みれば吉野山に朝廷が遷されてから既に五十餘年を経過し、吉野朝廷のために忠誠を抽んでた人々も多くは空しき枯骨となつた。足利氏は尊氏の後、義詮を経て義滿の代となり、細川頼之の輔佐によつて漸く部下の諸將を統御し得るやうになつた。然るに持明院統には正しき神器が傳へられてゐないため、足利氏が長く朝敵の汚名を蒙ることを恐れてか、元中九年（一一五二）義滿は吉田兼熙を遣は



して、後龜山天皇の京都還幸を奏請した。天皇は多年の戦亂による國民の憂苦を軫念あらせられて、義滿の奏請を聽許し給ひ、行幸の御儀を以て吉野山を出御、同年閏十月京都に還幸あらせられた。かくて御讓位の御儀によつて、後伏見天皇の御玄孫に當らせられる後小松天皇に神器を授けられた。多年の戦亂はこゝに鎮まり、これより足利氏の室町幕府も亦自ら認められることとなつた。

### 五 吉野時代の精神

中興精神の顯揚 後醍醐天皇の建武中興の大業は、かくて長く繼續せず、聖業を翼賛し奉つた忠烈の諸臣並びにその子孫も多くは節に殉じた。しかし、この數十年の歴史には國史の精華が凝り固まり、その精神は永く後代の國民に深き感銘を與へてゐるのみならず、永へに皇基を固くする礎となつた。

吉野時代の精神は中興精神そのものを根本として、これを繼述せんとするもの以外ならない。即ちそれは國體の本義に發し、神道の研究、宋學の攝取等に基づく實踐的な自覺によつて昂揚されたものであり、天皇親政、文武一統の大業を紹述して、これ

を輝かしく發揚せんとするものである。吉野朝廷御歴代の天皇及び後醍醐天皇の諸皇子はよく中興の聖旨を體せられ、その御行實は勤皇精神を鼓舞する根原となつた。而して勤皇の諸將士は國家のため、また中興翼賛のため、全く一身一家の利害を棄ててよく孤忠を捧げ奉り、その多くは祖孫兄弟相承けて遺志を繼ぎ、如何なる逆境に臨んでも毫も節義を變ぜずして皇事に殉じ、以て數十年の間頽勢を支へたのである。而してこれら吉野時代の君臣の精神を察するに足るものが數々ある中に、殊に文學に於いては注目すべきものがある。

文學を通じての精神 吉野時代は幾多忠臣の事蹟を通じて見られるが如く、烈々たる尊皇の至誠が披瀝せられ、痛憤の悲涙が流された時代であるだけに、それらが凝つて文學の表現となつたものも尠くない。増鏡、太平記、新葉和歌集等が即ちその主なるものである。

増鏡は建武中興後間もない頃の述作と考へられ、大鏡などの系統に屬する歴史物語である。その内容は治承四年(一八四〇)後鳥羽天皇の御降誕より元弘三年(一九九三)後醍醐天皇の京都還幸まで御十五代凡そ百五十年のことを記してゐる。その立



場には武家政治の非道を痛憤する態度が取られ、頼朝が總追捕使となつたのを、この日本國の衰ふるはじめはこれよりなるべし」と記し、更に承久の變に於ける北條氏の僭上無道と、後鳥羽上皇の新島守の御歎きを具さに記してゐる。降つて後醍醐天皇の御討幕を述べ、最後にめでたく京都に還幸あらせられ、流された人々も都に上り、枯れにし木草の春にあへる心地す」と喜びの眉を開いたことを以て本書の結びとしてゐる。その著者は明らかでないが、後醍醐天皇に奉仕した朝臣であると考へられてゐる。

古今の戦記文學の數ある中にも、別けて讀者に最も深き感銘を與へるものは太平記である。太平記は後醍醐天皇即位の文保二年(一九七八)から後村上天皇の正平二十二年(二〇二七)に至る五十年間の時代を吉野朝廷の立場に於いて敘したものである。平家物語の如き佛教的無常觀を去つて特に現實的色彩に富み、全篇を一貫して皇室尊崇の思想が流れ、勤皇諸將の勇戦奮闘と忠誠精神とが遺憾なく表出せられてゐる。而してその間史論を點じ、和漢の故事を引用し、隨所に流麗なる行文を點綴し、朗々誦するによきものである。後世國民が吉野の悲史に涙を濺ぎ、忠勇義烈の精神

を興起する源泉は本書に負ふところ最も大であり、この意味に於いて本書が國民精神の昂揚に貢獻し來れる功績は蓋し甚大であるといはねばならない。

新葉和歌集は後醍醐天皇の皇子宗良親王の撰せられたものである。親王は中務卿征東將軍宮として、或は關東に、或は越後に、或は東海に、殆ど吉野朝廷の全時代を終始してひたすら中興の御事に努められた。親王は和歌の道に優れさせられ、吉野の君臣の歌詠が徒らに朽ち果てることを惜しまれ、弘和元年(二〇四一)にこの歌集二十卷を編んで長慶天皇に奏進せられた。その内容は後醍醐天皇から御三代の數多くの御製を始め、吉野朝廷の君臣のみから選ばれて千四百二十餘首を收め、年代は總べて元弘以後に限られてゐる。それらの歌詠は形式上は時代一般に見られる類型的束縛を受けながらも、尋常の風流韻事と異なる嚴肅なる氣持に溢れ、憂國勤皇の至情や悲壯激越なる心情の吐露されたものが尠くない。殊に親王が武藏國こて小手指ヶ原の戦に詠まれたる

君のため世のため何か惜しからむ捨ててかひある命なりせば  
との雄々しい三十一文字にはこの時代の精神が凝り固まつてゐる。



而してこの精神のよつて来る根原には君臣の間に強く懐かれた正統の信念がある。この歌集の御序に「ちはやぶる神代より國を傳ふるしるしとなれる三種の寶をも承け傳へましまし」と述べられたのは、最後の後村上天皇の御製に

四つの海浪もをさまるしるしとて三つの寶を身にぞ傳ふる

と詠ませられたのと相應じて、その尊嚴さに胸打たれるものである。

吉野精神の復活 吉野時代に發揮せられた皇國精神及び勤皇の行動は、その後永く國民の精神に生かされるものとなつた。即ち室町時代には太平記によつて人心をひき、江戸時代には徳川光圀をして楠木氏を顯彰せしめ、また大日本史を編纂して、吉野朝廷の正統を主張し、且つ廣く勤皇諸臣の功績を録せしめ、降つては頼山陽をして日本外史に筆を執らせて楠木氏を稱揚し、吉野山萬朶の櫻を讚へしめた。承久の變に破れ、元弘建武に一旦成るも遂に挫折した復古維新の精神と勤皇諸臣の忠誠は、かくして幕末の志士をして奮起せしめる源泉となり、明治維新に至つて遂に王政復古の大業を完遂せしめる基となつたのである。吉野の忠臣の骨肉は朽ちたりと雖も、その氣魄は磅礴として國民の心に現實に生きてゐるのである。

## 第三章 室町時代

### 第一節 室町幕府の政治

#### 一 室町幕府の特質及び職制

幕府の特質 室町幕府の名は足利義滿が京都室町に政廳を開いたことから出てゐる。今その政治上の特質を通觀するに、その威權は最初から大でなく、概して鎌倉幕府の如き質實剛健な政治力に缺けてゐることが見られる。將軍やその幕僚は、細にして洗煉された文化の傳統を持つ京都に生活し、公卿と接觸したことなどによつて、その教養は昂められたが、それは武家の本質からは遠ざかつたものであつた。元來足利尊氏は名分を紊しつゝ、利を以て部下を懐柔する方策に出たのであつて、源頼朝の場合と異なり、武家の棟梁としての權威に缺け、主従恩義の關係も必ずしも鞏



固であつたとはいへない。されば幕僚の恣なる行動に對してこれを抑へるだけの實力がなく、この弱點は遂に後々までも長く残り、時に消長はあつたにしても、室町幕府は内部の争亂を斷つことが出来なかつた。その上、地方の諸豪族も夫々の地盤を固め、領土の擴張を圖る状態であつたから、足利氏は常にこれが操縦に苦心せねばならなかつた。またこの時代は諸氏に相續に關する係争が頻發し、その度に將軍はこれに干渉し、その争に乗じて威權を擴張せんとした。しかしそれは成功しなかつたのみならず、足利氏自身も屢、相續問題に惱まされ、これが却つて諸氏に跋扈の機會を與へることになつた。

京都開府 初め足利尊氏は源頼朝と同じく鎌倉に幕府を開くことを考へたが、當時の京都に於ける事情から遠く關東に去ることが出来ず、且つ尊氏は頼朝と異なつて、西國の諸國に大なる勢力を有し、その勢力から遠く離れることが不利であつたので、京都に於いて恣に幕府を開いたのである。よつて鎌倉には關東管領を置き、鎌倉時代に於ける六波羅探題と幕府との所在地を交換せるが如き形とした。その後義滿に至り、後龜山天皇が後小松天皇へ御讓位あらせられたことによつて、幕府政治が

自ら認められることになつたのである。而して室町幕府は鎌倉幕府の後繼を以て任じ、その法律は貞永式目を用ひ、尊氏以來の式目追加は建武以來追加と呼ばれる。

幕府の職制 幕府の職制は大體に於いて鎌倉幕府に類似してゐる。先づ前代の執權の如く將軍を輔佐して幕政の大綱を握るものに管領がある。管領とは本來は職名でなく、長として管轄する意であるが、始め執事と稱して高師直、仁木頼章、細川清氏が相次いで就職した後を、斯波義將が繼ぐに及んで管領と稱し、爾來職名となつた。この職に就くものは、足利氏の一族にして威權大なりし斯波、細川、畠山の三氏に限られてゐたので、これを三管領といふ。

廳所としては鎌倉幕府と同じく政所、侍所、問注所があるが、その機能は何れも前代より著しく減少してゐる。即ち政所は本來は重要機關たるべきものであるが、主たる政務は管領が見たので、この廳は財政を掌り、また將軍家の家政を沙汰するに止まつた。侍所は武士の進退、洛中洛外の警備、刑の執行を掌る。その長官を所司といひ、赤松、山名、京極、一色の四氏が交代にこれを世襲したので、この四氏を四職といふ。問注所は領地關係その他諸種の裁判事務を掌るものであるが、直接裁決の事には當ら



なかつた。

更に評定衆や引付衆が置かれたことも鎌倉幕府と同様である。評定衆は前代武家政治の中樞をなしたが、この時代には形式的な評定機關たる意味が濃厚となつた。引付衆は訴訟恩賞所領社寺貿易等の事を決し、政治上の實力を有した。

右の職制を概括するに、將軍の下に管領があり、管領の下に評定衆と政所侍所問注所があり、評定衆の下に引付衆がある。更にまた各種の奉行が多數置かれて政務を分掌し、その職を世襲する場合も多かつた。以上の中、管領及び侍所の所司は最も重職であり、これを數家に分つて世襲せしめたことは、權臣が幕政を壟斷する弊害を絶たんとする留意に出たものとも考へられるが、實は幕府勢力が分裂して相争ふ原因を導いた。

地方の職制 地方の職制については、鎌倉に關東管領が置かれた。さきに尊氏は鎌倉に下つて北條時行の亂を平定し、留まつて征夷大將軍、關東八箇國の管領と稱し、關東の政治を始めた。その後正平四年(二〇〇九)尊氏の次男基氏が鎌倉に下つて關東管領となり、これより氏満滿兼持氏と子々世襲して非常な勢力を有し、宛ら幕府に

對立するが如き觀があつた。その職制は大體室町幕府を模し、幕府の管領に相當するものを執事といひ、上杉氏代々がこれに當つた。而して將軍が公方くぼうと稱するや、關東管領もこれに倣つて關東公方と稱し、執事上杉氏が關東管領と稱するに至つた。足利氏の關東公方は持氏の時に一旦亡び、その後、遺子成氏しんぎが復したが、上杉氏と争つて下總古河こがに逃れ、古河公方と呼ばれた。よつて上杉氏は京都より足利氏の一族を伊豆堀越ほりこに迎へて推戴した。これを堀越公方といふ。やがて戰國の世となつて兩公方共に北條氏に滅ぼされた。

九州は吉野時代の戰亂に際し、征西大將軍懷良親王を中心として官軍が長く勢力を張つた所であつたから、足利氏は殊にその地の維持經營に意を用ひた。且つ九州は我が西海の鎮めとしても重要な地位を有することには、古來變りがなかつた。よつて吉野時代の末、足利氏は今川貞世さだよ了俊を派遣して九州探題たらしめ、その後、澁川氏がこれに代つた。九州探題は關東管領と共に幕府の兩翼をなしたが、後に幕府はその統御に苦しむに至つた。

諸國に守護・地頭が設置されてゐることは前代と變りがなく、その機能も同様たる



べきであつた。たゞこの時代の守護は、次に述べる如く、政治的・經濟的に勢力が増大して幕府の政令を奉ぜざるものが多いなり、幕府はその統制に苦しんだ。地頭も多くは莊園の領有に努めると共に、守護の家臣となる傾向があつた。

## 二 守護權力の擴大と莊園の崩壞

統制力の紊亂 足利氏は武家政治を復しても、家人に對して強力なる統制力を發揮することが出来なかつた。従つて家人の放縱は次第に募つたため、尊氏は守護・地頭を戒飭して先代以來の法規に遵はしめるやうに努め、武力に任せて土地を押領し、或は地頭職を管領して己が家人に給與することを禁じた。かゝる制令はその後も屢、繰返されたが、何れもその效なく、打續く戰亂は却つて守護をしてその勢力を擴大せしめる機會を與へた。守護は本來その國內の治安維持と家人統制とを以てその任務とするものであるに拘らず、その有する武力を利用して本所領家の莊園や地頭の收入を侵害し、これを恣に處分する傾向を生じ、地頭も亦屢、本所領家に對する貢納を押領し、或は他の武士の所領を侵すに至つた。また幕府は守護に命じて、諸國に段錢

棟別錢等臨時の課役を徵收督促せしめることが多かつたが、幕政の不振は動もすれば守護が職權を濫用して課役を私用のために徵收する機會を與へた。

足利氏の恩賞政策 尊氏が武力を掌握した時の事情は、頼朝が幕府を開いた時とは頗る異なるものが存する。頼朝舉兵の際、これに味方した者は何れも源氏の復興といふ熱烈なる精神に燃えてゐたが、それと共に、後に頼朝が部下に與へ得た恩賞地は平家からの沒收地や奥羽五十四郡等甚だ潤澤なるものがあつた。然るに尊氏の場合はこれと異なり、建武の新政に叛逆して足利氏に味方した武士に多くの恩賞を與へて、その望をつなぐ必要に迫られてゐたに拘らず、尊氏には新たに收むべき土地が少かつた。よつて尊氏はこれが對策として兵亂に藉口して武士をして諸莊園・國衙領の得分の半分を兵糧料として割取せしめた。これを半濟と呼ぶ。これは元來は臨時の措置として武士を賞する方法であつたが、守護や地頭は一度この好資源を得るや、幕命の有無に拘らず、種々の口實を設けてその徵收を連年繼續するのを常とした。かくて本所領家の多くはその收益の半分を失ふ形となつたが、實際は更に甚だしくして、種々の課役を徵せられ、ために社寺權門の勢力は漸次衰微した。なほ幕



府は恩賞政策の一として國衙領の貢租の徴收を守護に請負はしめたが、これも守護の勢力が國衙領を侵す原因となつた。

守護権力の擴大　かくの如くして室町時代の守護は、法制上の権限に於いて鎌倉時代の守護と同様であるべきに拘らず、その實力に於いては著しく強大となつて來た。即ち吉野時代五十餘年の兵亂は守護の權力を擴大せしめる機縁となり、室町末期にもなればこれが益、助長せられて守護はその管轄する國を知行國として領有するといふ意識を明白にした。こゝに於いて國內の地頭莊官等は守護の家來の武士となり、守護の分封に與るものとなる形勢を馴致した。この間にあつて守護の地位は世襲となり、山名、大内、細川、島津氏等は何れも數國の守護として大いに勢威を張つた。また國司の管する國衙領の莊園化は既に平安時代から見られ、國司の私領たるが如くなつてゐたが、この時代にはその收益を全く守護に奪はれてしまつた。かくて守護はその權力愈、擴大し、やがて起つた應仁の亂後は諸國に割據する状態となり、領國內には幕府の法制に擬したものを施行して、宛も各、獨立するかの如き形勢を示すに至つた。こゝに於いて、守護の名稱は何時か消え、群雄は國主、大名、諸侯等の名を

以て呼ばれ、所謂戰國時代の世相を導くに至つた。

莊園制の崩壞　守護権力の擴大する過程は、これと表裏をなすものとして莊園制の崩壞過程を意味する。この事は既に敍べたことによつて自ら明らかであるが、特に應仁の大亂を契機として諸國に於ける莊園は更に破綻の歩を速めた。莊園の本所、領家たりし諸社寺や權門勢家には年貢が納められなくなり、莊園は殆ど皆大名領地に加へられた。南都、北嶺の經濟力が衰へ、公卿摺紳の生活が窮迫するに至つたのは、主として莊園の崩壞によるものである。

かくして安土桃山時代に入つて天下統一に向かふや、土地の知行制度が樹立せられ、諸大名以下に夫々領地が宛てがはれて社會は安定した。こゝに於いて近世の封建制度は完成し、莊園制は全く消失したのである。

### 三 幕政の推移

義滿義持の公卿化とその榮華　足利義滿は父義詮の死により、正平二十三年（二〇二八）十一歳を以てその後を嗣いだすが、管領細川頼之を始め側近の者の輔佐により、足利



氏の勢威は漸く盛んとなつた。

義満は長ずるに及んで源頼朝以來幕府に傳はれる質樸の風を忘れ、搢紳に近づいて公卿的な生活に馴れ、漸く足利氏の公卿化が見られた。即ち義満は弘和二年(二〇四二)左大臣を稱し、同時に源氏公卿の筆頭たりし久我氏が繼ぎ來れる淳和獎學兩院別當及び源氏の長者を手中に收めた。このことは爾後江戸時代の末まで征夷大將軍が大臣の顯官を拜し、兩院別當並びに源氏の長者を兼ねる例を開く所以となつた。ついで後龜山天皇京都還幸の翌々年即ち應永元年(二〇五四)征夷大將軍を辭し、同時に平清盛以來武家には嘗て先例のなかつた太政大臣に任ぜられた。翌年にはこれを拜辭し、出家して天山道義と號し、洛北に北山第を營んでこれに移つたが、なほ朝廷及び幕府の政務に干與した。公卿として榮達した義満は遂に僭上の振舞が多くなり、且つ奢侈を事とし、遊樂に耽るに至つた。

義満の長子義持は父の辭職の後を承けて將軍に補せられたが、義満の在世中は政治の實權がなほ義満にあつた。義満の死後自ら政を視るに至つたが、彼も亦遊樂に耽り、或は不臣の行爲が尠くなかつた。なほ弟義嗣は父義満の愛によつて後嗣たら

んとして果さなかつたので兄の態度に不平を懷き、義満の歿するや、吉野勤皇の遺臣が活動を始めたのを機會にこれに應ぜんとし、幕府のために抑へられた。しかし、應永二十三年(二〇七六)關東管領足利持氏の執事上杉氏憲禪秀が持氏に叛いたのを機として、義嗣はまた氏憲と通じて大亂を起すに至つたが、これ亦失敗し、捕へられて自刃した。これより幕府の争亂は絶える時なく繼續した。

將軍繼嗣問題と義教 義持は應永三十年(二〇八三)退隱し、子義量が將軍に補せられたが、同三十二年義量は若くして歿した。義持には他に子なく、弟は皆僧侶であつたため、後嗣を定めないで幕政を執つてゐたが、同三十五年義持も歿した。よつて管領畠山満家は山名時熙三寶院満濟等と議し、義持の弟で先に天台座主であつた僧義圓を還俗せしめて後嗣とした。これ將軍義教である。義教はその性格が嚴正であつたから、よく幕政を振肅し、幕府の威權を保つことに努めた。これより先、關東管領足利持氏は嘗て義持の猶子となつたので、義持の嗣たらんことを期してゐたが、その希望が叶はなかつたため、持氏は義教に快からず、よつて幕命を奉じなかつた。執事上杉憲實は常にこれを諫めたが、持氏は肯かざして益々反抗の氣勢を逞しくした。よ



つて幕府は大軍を發して持氏を攻め、永享十一年(二〇九九)これを滅ぼした。これを永享の亂といふ。かくて幕威は大いに擧つたが、義教の嚴格にして高壓的な政策は一部の幕臣の不評を招き、義教を惡むこと甚だしかつた。赤松滿祐は、嘉吉元年(二一〇二)六月、京都の自邸に義教を招き、急に起つてこれを害し、領國播磨に赴き、白旗城に據つて叛した。こゝに於いて嫡子義勝は八歳の幼少で家督を繼ぎ、山名持豊等の武將をして滿祐の亂を平定せしめた。世にこれを嘉吉の亂といふ。義勝はついで將軍職に補せられたが早逝した。豪族の勢力はかゝる間に漸く増大し、幕政は次第に混亂の状態となつた。

室町時代には將軍家にも諸將の家にも相續争が相次いで起つた。これは即ち家臣の對立を反映するものであり、延いて主従關係の破壊を導き、下位の勢力はこの争に乗じて増大して行つた。義持義嗣の争を最初の例として、右の永享の亂、次の應仁の亂等、何れも將軍家繼嗣問題の紛糾が表面化したものであつて、諸勢力の分裂的傾向は十分これに看取せられる。

義政の失政と諸將の分裂 義勝に次いでその弟義政家を繼ぎ、文安六年(二一〇九)將

軍に補せられた。義政はその前半の政治に稍、見るべきものがあつたが、長ずるに及び、財用の不足せるにも拘らず、祖父義滿に倣うて次第に奢侈に流れ、重課を徴して上下の怨を買つた。この頃豪族の勢力は次第に増大し、且つその對立的傾向は助長され、就中、管領細川勝元と赤松氏討伐に功のあつた山名持豊とが何れも數箇國の守護として大なる權勢を有して相反目してゐた。時に義政は子のないため、寛正五年(一二三四)弟の僧義尋を還俗させ、名を義視と改めしめて後嗣と定め、勝元をして後見せしめたが、その翌年實子義尙が生まれたので、その生母富子はこれを後嗣たらしめんとして持豊に事を託し、これより細川山名兩氏の對立が激化した。且つこの頃管領家たる畠山氏、斯波氏も各、相續争を起し、黨を立てて争つた。これらの對立が遂に應仁の大亂を導く直接の原因となつたのである。

應仁の亂 應仁の亂は諸勢力の分裂、抗争が激化した結果として起つた戰亂である。その發端は文正二年(一二二七)正月、畠山政長が一族畠山義就と京都上御靈社に陣して相争つたことにあり、この争により細川勝元、山名持豊各、一族與黨の分國の兵を京都に招き、諸國の將士相分れて戦ひ、その戰亂は十一箇年の久しきに亘つた。勝



元方に従つたものは畠山政長斯波義敏以下二十四箇國十六萬人の軍であり、持豊方に従つたものは畠山義就斯波義廉よしかた以下凡そ二十箇國九萬人の軍であつた。京都の東西に陣を分つて相争つたので、前者を東軍といひ、後者を西軍と稱する。戦は主として京都に於いて行はれたが、もとより武士勢力の根據は地方に存した。従つて兵亂はその進行につれて地方に波及し、所領の争奪戦となるべきは當然の過程であつた。こゝに於いて戦局の前途は全く混沌たるものとなつたので、數年にして主將勝元と持豊の間に和議の希望が起つたが、事は容易に運ばず、持豊は和議の成立しないことについて大いに心痛し、勝元も養子勝久と共に剃髪した。ついで文明五年(二一三三)には持豊勝元相次いで歿したが、戦亂はなほ停止しなかつた。しかし同九年頃諸將漸く戦に倦んで領國に引上げるに至り、應仁の亂は漸く終局となつた。この間義政は一旦後嗣とした義視を斥けて、義尙をして繼がしめたので、義政義視の間に不和を生じたが、十年七月和議が成つた。

この戦亂の間、京都は平安京の名も空しく、日夜兩軍相闘ひ、兵火相次いで起り、無賴の徒はこれに乗じて横行し、殺傷掠奪を逞しうした。市中は焦土と化し、内裏仙洞を

始め奉り、洛中洛外の貴顯の邸宅や寺院などは多く焼亡し、諸家の重寶や記録の烏有に歸したのも莫大であつた。

群雄割據への移行　かくして應仁の亂は局を結んだが、この大亂はそのまゝに所謂群雄割據の時代へ移行し、全國を擧げて亂麻の如き状態となつた。應仁の亂に東西兩軍に分れて戦つた武將等は、皆歸國して地方の完全なる領有に力を集中し、他の武將とその封疆を争ふに至つた。所謂戦國時代は應仁の亂より直ちに連なるものであつて、この亂世は織田信長及び豊臣秀吉が天下統一の業を成就するまで百箇年に及ぶのである。

幕府の衰勢　文明五年(二一三三)應仁の亂の最中に義政の子義尙は幼にして將軍に補せられ、義政が依然として政治を視、義政の妻富子も常に政治的干渉を試みた。而して義政、義尙父子の關係も後には善からず、亂後の幕政は益々頹廢に向かつた。よつて義政は世の争亂に對して遂に逃避的となり、盛んに土木工事を起し、殊に京都東山に山莊を營んで、こゝに悠々自適の生活を送つた。

義尙は資性明敏であつて、その長ずるに及び、衰運を辿れる幕府勢力の回復を圖つ



た。即ち當時幕府の威令の及ぶ所は僅かに山城一國內に止まり、近國には豪族が多数の關所を作つて交通の障礙をなすといふ状態にあり、京都の生活も物資の缺乏に悩まされた。その上近江の六角高頼は幕命を奉ぜず、延暦寺その他の莊園を侵して勢力を振るつたので、義尚は先づこれが討伐に向かつた。しかし將士の士氣は弛廢して、最初より戰意に缺け、討伐の効果は擧らず、荏苒日を曠しくする中に義尚は近江で病歿した。ついで義視の子義材(義植)が將軍に補せられ、また六角氏を伐つたが、その成果を收め得なかつた。これより幕政は愈々亂れ、その治績の見るべきものもなくなつた。

その後の將軍は全く政治力を失ひ、その居所さへ定まらずして近國に走ること多く、各地の豪族の自立的態度は益々募り、幾多の政治的・經濟的中心が發生した。しかしこの間にも將軍は形式的ながらなほ存續し、義植から義澄を経て義植の復任となり、次に義晴、義輝、義榮を経て義昭に至り、織田信長の勢力が大となるに及んで、天正元年(二二三三)將軍の廢絶に至るのである。

## 第二節 經濟生活及び社會状態

### 一 産業

農業 室町時代には概して社會状態の動搖不安が甚だしかつたけれども、その間に於いても國民の生活は向上し、經濟は次第に發展しつゝあつた。農業は鎌倉幕府や莊園領主によつて開墾が進められた後を承け、前代ほどの活氣が見られないが、なほ新田開發は行はれ、且つ耕作法の改良が普及して收穫は増加しつゝあつた。殊にこの時代の末期に群雄割據の状態となるや、各大名は何れも領内の富強を圖り、民利に心を注いだため、農業も大いに進歩した。

農産物の中、最も重要なものは米であるが、米作は水田耕作が盛んであつて、耕作法も進歩した。裏作としての麥の栽培は益々普及し、その他粟、稗、黍、豆等も多く生産せられた。

養蠶は上世にかなりの發達を遂げたが、その後振るはず、絹織物や眞綿等も各地に



生産せられたが、支那より多量の輸入を仰いでゐた。棉は上世に一時輸入されたが、この時代に至つて草棉の名で近畿地方に栽培せられ、江戸時代の初期までに廣く全國に普及した。その他絹に次いで重要な被服原料たる麻苧は主として東北地方の寒地に栽培され、燈油または食用としての胡麻、荏胡麻や、染料としての藍等は各地に栽培された。また茶は早くよりあつたが、未だ普及してゐなかつた。然るにこの時代には喫茶の流行に應じて多くの茶園が開かれ、山城、大和はその主産地であつて、宇治茶の名は既に喧傳せられるに至つた。その他甲州の葡萄、紀州の蜜柑等の特殊物産もこの時代に起つた。

農業技術については農具の改良が徐々に行はれ、また牛馬の使用が普及した。そのため牛市や馬市その他の市場が至る所に立てられて盛況を呈した。灌漑は水車による技術が特に發達し、永享年間來朝した朝鮮使節はその方法の優秀なるに驚き、水車を朝鮮に輸入しようとして圖つたほどである。治水事業は諸國の領主が特に意を用ひたところであつて、堤防や池溝の修築に力を盡くした。

林業 林業は、主たる需要地に近い關係から、丹波、近江、伊賀、南大和等に盛んであ

り、土佐、安藝の良材も聞え、また木曾山を中心とする檜材も珍重された。かくて京都や鎌倉には殷賑なる材木市場が成立するに至つた。更にこの時代の末には各大名が山林保護のため、禁制を出してその濫伐を防がしめた。

水産業 漁業は國民の生業として古くから盛んであつたが、商業の發達と共に水産物も商品としての意味を持ち、各地に魚市場が成立した。この時代の漁業は主として海岸近くや河川等で行はれる網漁、釣漁等であつたが、時には西海の漁民が南朝鮮に出漁するなど、稍、遠海の漁業もあつた。製鹽業は瀬戸内海を中心として發達し、多量の鹽が製造せられて各地に販賣せられた。その製法も上世に行はれた藻鹽を焼く方法から進んで、鹽田を開き、大規模に製造するに至り、瀬戸内海沿岸の産地より兵庫、淀堺に輸送せられる鹽船は多數に上つた。

鑛業 鑛業もこの時代には更に發達して、鐵、銅、金、銀等の産額は漸次増加し、露頭採集から進んで掘鑿が盛んに行はれ、海外よりの需要は一層その増産を促進した。殊にこの時代の末期に、諸大名がその領内の富國強兵策を講じ、貨幣及び武器の原料としての鑛物生産に注目し、鑛山の開發に努力するに至つて、斯業は急激な發達を遂



げた。されば佐渡の金銀山が上杉氏により、石見・但馬の銀山が大内・尼子・毛利の諸氏により、甲斐の金山が武田氏によつて開發されるなど、鑛山の經營が各地に行はれた。精鍊法もこれに伴なつて發達し、海外にも誇るべきものとなつた。

工業 國民一般の生活程度の向上と共に、この時代には日用品の種目と量が増加した。これに應じて手工業の分化發達が促され、諸種の職人が多數生じた。これらの職人は従來主として朝廷・社寺等の需要によつて生計を立て、その附近に居住したが、この時代には工業の地方化につれて諸大名の保護の下に城下町にも集中した。しかしなほ傳統のまゝに朝廷・社寺等の免許を受けなければならぬ職業も尠くなかつた。工業の代表的なものは建築・鍛冶・鑄物・織物・製紙・醸造等であるが、これらの中特に盛んであつたのは鍛冶・鑄物の金屬工業と絹織・麻織等の織物工業とであつた。鍛冶は刀鍛冶や農具の製作などがあつたが、殊に刀劔については日明貿易に際して足利氏の貿易品として送られた數量は夥しいものがあり、群雄割據の時代となつてその製造は各地に興つた。鑄物は京都・三條の鑄物師が最も早く現はれてゐたが、諸大名が諸國に割據してより、大いに地方的發達が促された。織物は各地に精巧なものが生産された。殊に貿易地たる博多・堺・山口等にては明の職人の渡來によつてその發達が促され、金襴・緞子・縮緬等が製出されるに至り、京都ではこの時代の末に西陣織物業の礎地が開かれた。而してこの時代の手工業は需要者の注文によつて製作する以外に市場生産が盛んとなり、各種の手工業生産品が夥しく商品として現はれるに至つた。

## 二 貨幣の流通と金融

貨幣の流通 前代以來盛んに流通した貨幣は、この時代に於ける商業取引の擴大につれて益々普及した。貨幣は依然として官鑄せられることなく、宋錢・明錢がこれに充てられてゐた。殊にこの時代の日明貿易の主たる目的は銅錢を得ることにあつたといはれるほどで、その結果洪武通寶・永樂通寶・宣德通寶等が多數に輸入せられて大いに流通するに至つた。錢貨の普及に伴ひ、民間私鑄錢もまた増加し、劣等錢が尠からず混在するに至つたので、この惡錢を排除する手段として取引の際に撰錢が行はれ、またその限度を指示するために屢々撰錢令が出た。貢納もまたこの時代には



錢貨を以てすることが多くなり、従つて所領を測定するに上納額を意味する貫高くわんたかを以て土地を呼ぶことも行はれた。而して錢貨の中でも永樂錢が標準貨と認められたので、貫高に代ふるに永高えいこうなる用語も生じた。また戦國諸將には金銀の形態重量等を整へ、これを貨幣としてその領内に流通せしめるものがあつた。

金融業 經濟の發達に従つて金融業も亦盛んとなつた。鎌倉時代に金融業者を借上といつたが、室町時代にはその名稱はなくなり、酒屋・土倉が金融業に従事した。土倉の主なるものは幕府の財用を預ることもあり、公卿や大名の財務を引受け、遣明貿易船の金融に關與する者もあつた。また前代に見られた爲替も次第に發達し、これが後に兩替となり、今日の銀行業に進む過程を辿るのである。

### 三 商 業

市の發達 諸産業の進歩と増産及び貨幣の普及は、一面に於いて商業が發展擴大せることを意味する。中世商業の中心たる市場や座はこの時代に著しい發達を遂げ、廣汎な流通經濟も見られた。市場いちば・市庭いちぢやうは在來定期市として多く開かれ、室町時代

になつて愈々普及すると共に、一方には固定的設備を有して常時營業する市場も各地に發達した。就中、京都の四條・五條邊りは殷賑な商業地區を構成し、地方の小都市にも同様の店舗が發達した。殊に各地の社寺の門前には祭禮日の市が開かれたが、定着せる商店となるものもあつて、これが所謂門前町として全国各地に尠からず發生した。またこの時代の末期には大都市やその附近に特産物の取引に従ふ特殊市場も開かれた。京都の米場、淀の魚市の如きがそれである。この米場は米商人によつて組織された米場座によつて管理せられ、近江路から送られる米穀を一手に取扱ひ、その運搬に當る馬借も組合的な集團をなした。後世の大阪堂島や近江大津の米市場はこの米場を發端とするものであり、淀の魚市は海産物の集散市場として繁榮し、近世に於ける大阪雜喉場ざいごほばの魚市に繋がるのである。

座 座は前代のとを承けて商工業の各部門に發達が見られた。京都附近では上京の四府左右近衛府に屬する駕輿丁座かよぢやうざ、下京の祇園社に屬する吳服座・綿座等の諸座を始め、北野社の酒麴座、大山崎の離宮八幡宮の油座等多數の座が存し、中には廣く近隣の諸國に互つて營業權を占め、座外のものと同種營業を妨げるものもあつた。



また各地の市場には多くの座が夫々の席を占め、奈良南市には魚屋絹屋等三十餘の座があり、大阪四天王寺門前の濱市にも布座、紙座、蔭座等十九座があつた。また有力なる社寺には多數の座の本所となるものもあり、例へば興福寺大乘院の支配下にある座はその種類六十餘を數へた。

樂市樂座　かくの如く座はその全盛を見たが、この時代の末期に入り、一部の大名は領内に於ける商業の發展を企圖して座の有する特權を認めず、或は市場の營業を何人にも開放し、或は座を撤廢して自由に商業することを認め、更に營業に對する課役を免除するに至つた。これを樂市樂座と呼ぶ。戰國大名が樂市樂座の政策をとつたことは、また市座の舊來依存して來た社寺權門の勢力を一掃し、これを自己の統制下に置かんがためであつて、莊園を打破して領國の知行を完成せんとする政策と同様に、商工業にも統一的支配を成し遂げんとする意圖に出たものである。樂市樂座はその後信長秀吉を始め、諸大名によつて各地に及ぼされ、商人の新たなる進出にあらゆる便宜が與へられるに至り、近世商工業發達の素地が築かれることとなるのである。

#### 四 交 通

交通の狀態　吉野時代以來打續いた戰亂によつて地方の治安は紊れ易く、山賊海賊等の横行が尠くなかつたが、商業の發達、都市の勃興に伴なつて交通は海陸共にその量を増した。近江を始め諸國の各地には行商人が起つて、村々の各戸や市場を渡り行き、また庶民の間には伊勢の神宮、その他諸社諸寺への參詣、或は三十三所觀音靈場の巡禮等も盛んとなつた。海上では沿海の航路が何處にも發達し、北陸道と北海道方面との連絡もあつた。

關所の濫設　その上に、前代以來公卿社寺その他各地の領主は水陸交通の要衝に關所を設け、入港の船舶、通過の人馬貨物から關錢を徵收してゐた。即ち關所は港や河川はもとより、道路の各所殊に都市の入口などに盛んに設けられ、その關錢は交通施設の改善に用ひられるものではなくて、純然たる收益本位のものであつた。この種の關は既に建武中興に一旦その撤廢が圖られたが、室町時代になつて益、濫設せられて交通の妨害となつてゐた。されば商人等によつて關錢免除や關所撤廢の運動



が屢、起つた。而してこの時代の末諸大名は地方的統一を遂げるに及び、關所が障礙となることを感じ、軍事的なもの以外を漸次廢止するに至つた。後に信長秀吉も國內統一の進むと共に、その政策を推し及ぼし、收益を目的とする關所は遂に影を没するのである。

### 五 都市の發達

都市發達の曙光　この時代に於ける國民の經濟生活の進展、殊に末期に於ける諸大名の領内富強政策は各地に都市の發展を顯著に導くに至つた。

平安時代にあつては都市は政治的な意義を有し、中央には平安京があり、地方にては國衙の所在地即ち國府が小都市をなしたが、國衙の實權が衰へて莊園制が發達するにつれて國府は衰へ、莊司の所在地が纔かに小都市化した。また陸上交通の發達につれて街道に點在する驛家<sup>えきか</sup>即ち宿<sup>しゆく</sup>も漸次都市化し、東海道三島の宿の如きが現はれた。また河海の岸にあつた港は鎌倉時代にては、難波、兵庫等を除いて多く村落に過ぎなかつたが、この時代には物資の保管、輸送等が益、輻湊し、他の商工業者も集まつ

て和泉の堺の如き都市が現はれた。更に參詣者の蟠集する大社、大寺の所在地には既に述べた如く門前町が發達し、また寺院を中心とする僧侶、信徒の集團は寺内町<sup>じないまち</sup>を構成した。かくして村落から都市への發展、膨脹は顯著となつた。

京都　京都は帝都として引續いて大都市であつた。先づ皇居は平安末期より屢、里内裏を以て充てられ、その位置は固定しなかつたが、吉野時代の初めから京都御所は今の地に定まるに至つた。右京は平安初期以來大部分は田園のまゝであり、市街地は左京に發達し、皇居と公卿の邸宅もこゝに存し、賀茂川の東には公卿の山莊が點在してゐた。御所の西北方室町に幕府が開かれてより、將軍幕僚等武家の居宅がこの方面に集まり、市街は北方へも擴がり、町屋もこれに伴なつて東と北とに多く立ち竝んだ。且つ東山を中心として多數の寺院が點在し、禪宗五山も多く郊外に興され、京都は寺院都市としての色彩をも濃厚にした。應仁の大亂起るや、兵燹に罹つて一時は荒廢したけれども、やがて復舊して生産都市への道程を辿り、工藝や織物業等が盛んとなつた。

奈良　奈良は舊都となつて久しき歲月を閲し、昔日の偉は見られなくなつたが、



春日神社・興福寺等の歴大な財力を持つ社寺を中心として都市が形成された。そこには神官僧侶の外、商工業者が多く集まり、門前の聚落が發達した。然るに室町末期に入つてこれらの社寺は頼に頼勢に傾いたために、主として社寺に依存してゐた工人等はこれより一般庶民を顧客とし、金工・彫刻・織物等にその優れた傳統の技術を誇つた。こゝに奈良もまた生産都市たる性質を明らかにした。

鎌倉 鎌倉は頼朝の開府以來發達した都市であつて、地形の關係上、その區域は自ら限定せられてゐるが、種々の意味に於いて關東第一の都市を形成した。即ち單に政治的都市たるのみならず、また文化的にも鎌倉五山等があり、これを通じて優れた文化が關東諸國に傳播して行つた。人口の詳細は明らかでないが、鎌倉時代の正嘉年間の大飢饉には死者二萬人と傳へ、その後永仁年間の大地震にはこれまた死者二萬三千人と傳へられ、その大都市たるを思はしめる。従つてまた經濟的にも關東の中心をなし、多くの物資を吞吐し、商業も盛んであつた。室町時代には足利氏の最も重んじた地方的要衝として關東管領の所在地となり、依然としてその繁榮を保つた。然るにこの末期に上杉氏が鎌倉を去り、更に小田原に居城した北條氏がこれを

領有してよりその重要性が失はれ、鎌倉の富と文化は小田原に吸収されるに至つた。

小田原 小田原は應仁の亂後、北條早雲が城郭を構へてから城下町として俄かに發展した。北條氏は諸國の商人をこゝに迎へ、その股賑は京都鎌倉に劣らずと稱せられ、遠く支那から明人の來住する者もあつた。後に徳川家康は江戸を經營するに當り、小田原の町人を江戸に移住せしめた。

堺 港灣都市としては和泉の堺が最も顯著なる發達を遂げた。既に吉野時代に堺は四國・中國の武將等が畿内に入出入する門戸となり、また物資輸送の要衝であつた。よつて和泉守護となつた山名氏清の築城するところとなつてその繁榮の基礎が作られ、次いで大内氏の領となつた。應永六年(一〇五九)大内義弘はこゝに亂を起して敗死し、その時兵燹に罹つた民家が一萬餘と傳へられてゐる。その後、管領細川氏の領地となつて繁榮を回復し、商港として益々都市的發展をなし、遣明船の解纜することもあつた。町家には富商が多く、組合を作つて細川氏のために貿易船をも仕立てたが、遂に市民は富力によつて市の行政方面をも掌中に入れ、自衛の手段として武力を要することから、武士の浪人を傭ひ入れる場合もあつた。堺の文化は初めは明



文化の色彩が濃厚であつたが、後には遠く西洋文化を受容し、異國的な情調を漲らせた。なほ次の時代に於ける大阪の經營には堺の市民が多く移住してその中樞となつた。

兵庫 兵庫は平清盛以來港灣の修築が行はれ、瀬戸内海に於ける重要な海關であつた。而して興福寺、東大寺等がその權利を握り、入津料の收納は大なるものがあつた。また對明貿易の起點としても船舶の往來が頻繁であつたが、堺が貿易の中心となつてより、衰兆を來たすに至つた。

博多・山口 筑前博多の津は太宰府の門戸に當り、北九州の物資を瀬戸内海を経て京都へ輸送する起點であり、また北及び西は海を隔てて大陸に對する第一の港である。されば早くより宋船の往來があり、宋人も來住し、室町時代の中頃には大内氏の所領となり、對明交通の要衝として著しく發展を遂げた。而してこの博多を領して貿易上の勢力を持つた大内氏の城下は周防の山口であつた。山口は防府を外港として博多を経て明と通商し、且つ堺との往來も頻繁であり、また京都との關係も密接であり、戰國の争亂を避けて來た公卿僧侶を迎へた。されば山口は一時西都と呼ば

れ、富裕を以て聞え、外人も來住して文化が著しく發展した。

都市は商工業の躍進、大名の城下町經營策等によつて、近世に入つて顯著なる發展を遂げるのであるが、その要因はすべてこの時代に見られる。

## 六 庶民の擡頭

庶民の擡頭と徳政 國民の經濟生活の進展、殊に貨幣の流通、商業の發達は商人の擡頭を來たし、また都市の繁榮を導く所以となつた。かゝる社會の新事態はまた種種の社會問題を生むに至つた。その中最も注意すべきものは徳政である。徳政は既に敍べた如く、鎌倉時代の末期に幕府が家人の窮乏を救ふために發した政令であるが、それは既に富が一部の庶民に集中しつゝ、あつた事實を反映してゐた。しかも徳政令の効果は期待された如くでなく、むしろ經濟界の混亂を來たし、金融梗塞して家人は却つて苦しみ、庶民擡頭の趨勢は依然として助長された。

庶民の集團運動 室町時代に入つて商人が富裕となる傾向は強くなつたが、一方庶民一般も集團的勢力として擡頭して來た。即ち借錢契約の無効を強請する運動



がやがて庶民即ち當時所謂土民によつて屢、集團運動として起された。これを徳政一揆、土一揆などと稱する。尤も農民の集團運動は既に前代にも存したが、所謂土一揆とした知られてゐる最初の顯著なるものは正長元年(二〇八八)飢饉による民衆の生活難を契機として起つた一揆である。これは近江より京都に米を運ぶことを業とした坂本の馬借によつて起されたものであるが、他の民衆もこれに加はり、大擧して酒屋、土倉、寺院等金融を業とせるものを襲つて借用證文を破棄し、質物を奪ひ取つた。一揆の暴動は京都に止まらず、更に近畿諸國に波及して各地に起り、播磨では守護と戦ひ、山城の一揆は奈良に侵入し、年貢の免除を要求して社寺をしてこれを認めしめた。この時の一揆は幕府に對して徳政の發布を要求しなかつたが、その後嘉吉元年(二一〇二)に起れる一揆はこれを要求してその目的を達した。かくてこの時代を通じてこの種の運動は屢、繰返された。

この時代の土一揆には農民のみならず、商人、手工業者等各種の身分の者も加はるのを常とし、寛正文正年間には在京大名の下級の家臣にもこれに加はつた者があつた。また嘉吉年間の土一揆の如き、借財のない庶民にして公卿、武家等の困窮に同情

して蜂起したのもあつたといはれてゐる。

統治力の頹廢　かゝる土一揆は政治が紊れた結果、貧困なる者が生計に窮乏し、衆を恃むの擧に出たものであつて、多くは大飢饉、天災等の後に起つてゐる。しかも幕府は既に治安維持の根本的對策についての力と熱意とに缺けて、當座の手段のみを考へ、足利義政の如きは一代に數十回も徳政令を出し、これによつて幕府の債務を破棄した。元來酒屋、土倉等への課税は、幕府の重要な財源であり、土倉の組合は幕府の財務を掌つてゐたから、幕府としては酒屋、土倉を保護せねばならぬ立場にあつたが、徳政令は逆にこれらを苦しめることとなつた。また徳政令のため土倉が廢業して金融梗塞を來たし、そのため一層高い利率を貪る日錢屋が簇生したことも、時代の世相をよく物語る一端である。

また地方農村に於いては領主の苛斂誅求に對して積極的な一揆によらない反抗運動をなすものもあつた。即ち敢へて年貢の未進や嗾訴をなし、或は最後の手段として舉村逃亡の手段に出づる逃散も時に行はれた。また世情の不安によつて村落にては相依相助の精神、村内結合の傾向が促され、共同して利權を確保することに努



力するに至つた。これは後に争亂が鎮まると共に農村自治組織の母胎ともなるものである。

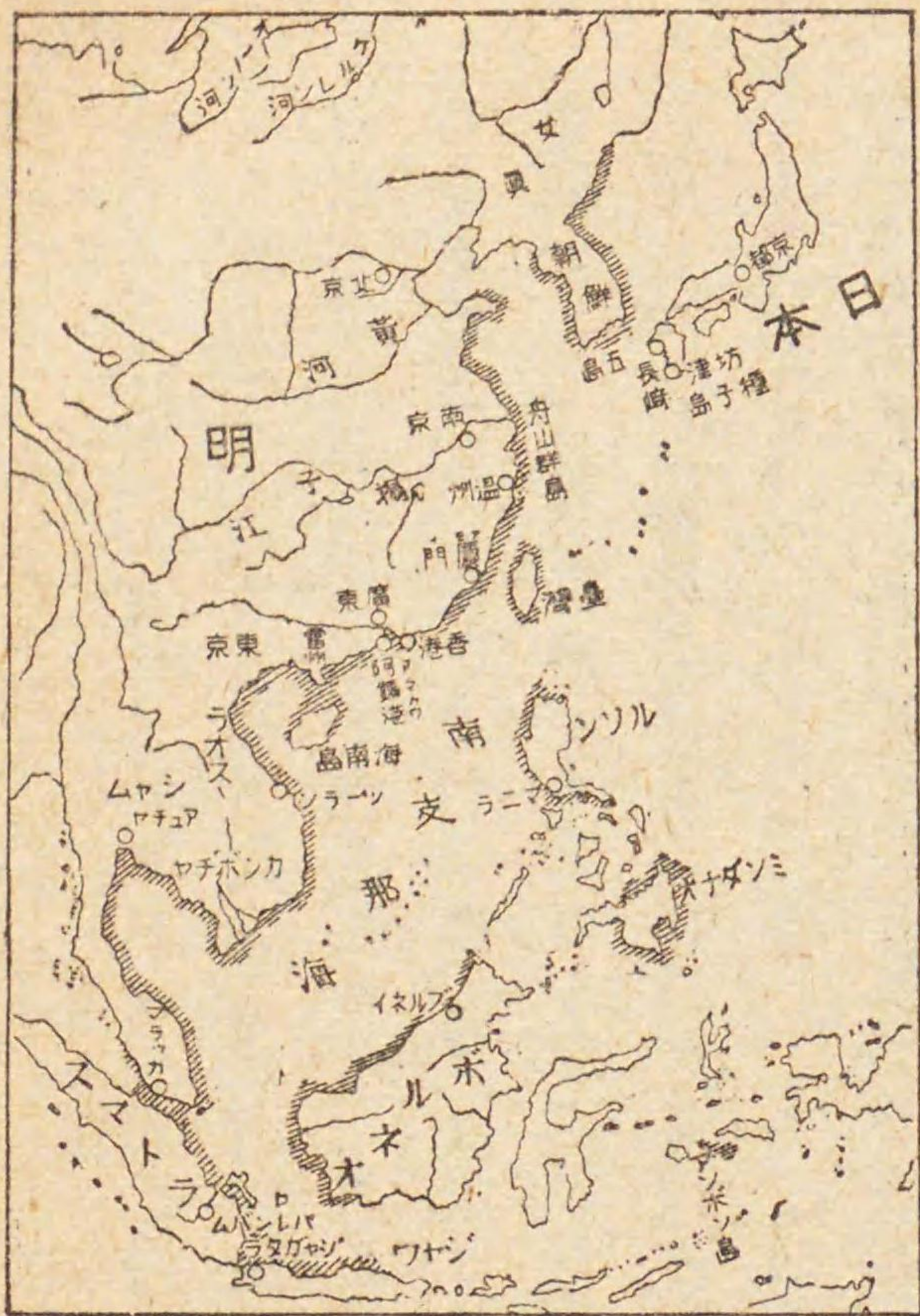
かくの如くして室町時代には、國民生活の様相に變化が齎されると共に、この間に土地經濟を主とした時代から貨幣經濟の進展する時代へ推移し、國民の經濟生活の動向は次第に近世的なるものへの展開を示唆するに至つた。

### 第三節 對外關係

#### 一 國民の海外發展

八幡船の活躍 さきに文永・弘安の外寇によつて、國民の海外進出への意欲は著しく誘發せられた。殊に航海に慣れたる勇敢なる海邊の住民は大いに大陸方面へ雄飛するに至り、その活躍は吉野・室町時代に入ると共に益々隆盛となつた。即ち九州及び瀬戸内海沿岸の住民等は、船に八幡大菩薩の旗幟を掲げ、よく千里の波濤を凌ぎ、支那・朝鮮・南洋方面等の沿岸に航して交易に従ひ、また時にその勇猛當るべからざる勢

を以て、抵抗者を蹴散らし、所在に威名を轟かした。彼地ではこれを倭寇といひ、船を八幡船と稱して大いに恐れ、私に貿易することを許さず、これを撃攘せんとしたが、何れもその効果は擧らなかつた。よつて高麗では正平二十二年(二〇二七)使節を我が國に送つてその禁壓を乞うたが、我が國はこれに應じなかつた。また支那では元が同二十三年に亡び、明の太祖朱元璋が國內を統一し、翌二十四年使節を我が國に送り、



(城海出進人邦は標) 圖展發外海

當時太宰府に居られた征西大將軍懷良親王に國書を示して海寇を禁ぜられんことを請うたが、親王は國書の文辭が無禮なるを責めて直ちにこれを却けられた。その後、明はなほ使を遣はし、入寇を以て我を威嚇したが、親王はこれを引見せられ、我が國が聊かも明の威を恐れざることを説い



て我が國威を示し給うた。

琉球民の活動　また琉球の民は暹羅を始め、東印度諸島及び印度等に活躍して貿易に従事した。即ちそれら南方諸國の特産物たる蘇木胡椒等を齎して明及び高麗と通商し、中繼貿易による利を収めた。而して琉球貿易の背後には南九州に雄視せる島津氏があり、薩摩の商舶は盛んに琉球に往復して南海の物資を我が本土に將來し、諸國との貿易に従事するものも尠くなかつた。かくて室町時代東亞海上を縦横に活躍した琉球船の姿は、本土の民の雄飛と相俟つて、我が國民の海外發展の隆盛を示すものであつた。

朝鮮との關係　朝鮮にてはその海外活躍に顯著なるものなく、主として我が本土の國民の進出に對する問題が中心をなした。平安中期以來半島は高麗の統治するところであつて、我が本土との關係が深く、殊に西海の民は盛んにこれに赴いて通商を行つた。元寇の際高麗は元に與して入寇したので、我が國民は屢、武威をかざして半島の沿岸に活躍し、また南鮮及び濟州島の經濟力は殆ど我が國民によつて占められるに至つた。高麗はこれを退げんとしたが成功せず、財政は疲弊して遂に内亂が

起り、元中九年(二〇五二)李成桂は高麗を滅ぼし、ついで朝鮮を開いた。

李氏は我が邊民の難を免るべく、屢、足利氏及び中國九州の諸大名に使節を遣はして修好を請うたので、彼我の間に平和な國交と通商とが回復された。然るにやがて朝鮮は對馬との關係が善からず、應永二十六年(二〇七九)六月、遂に兵船二百餘艘を以て對馬へ大舉來襲した。これを應永の外寇といふ。この外寇は一時京都を驚かしたが、宗氏はよくこれを防ぎ、九州諸將の援助を得て撃退した。その後朝鮮は再び我に修好を望み來つたので、九州探題ではこれに應じて九州方面より朝鮮に通商せんとするものには探題の書契を持參せしめることとし、宗氏も亦對馬の島民の通商には書契を携帶せしめることとした。その外に朝鮮では勘合印を以て通商の證とする制度をも始めた。而してこの頃、貿易港として釜山浦、釜山(慶尚南道)、蔚山(慶尚北道)、蔚山(慶尚北道)の三浦が開かれ、京城及び三浦には我が使節接待及び交易のため倭館が設けられた。かくの如く朝鮮は我が國のため大いに修好的な貿易の途を開いたので、我が邊民の私貿易に苦しむことが稀になつた。

この時代に諸國の大名にして朝鮮と修好し、貿易の利を収めるものが極めて多か



つたが、就中宗氏は特殊の關係を有し、年々五十艘の歲遣船を送る外我が大名及び商人の朝鮮貿易も殆どその手を介して行はれた。しかし後には宗氏は朝鮮との間に屢々衝突を惹起し、彼我の修好及び貿易も亦斷絶するに至つた。

## 二 足利氏の對明外交と貿易

足利氏の對明外交 懷良親王が明に對して斷乎たる御態度を示された後、足利氏は單なる利得の目的の下に對明外交と貿易とを開いた。即ち足利義滿は應永八年(二〇六一)使節を明に遣はし、且つ通商を求めしめた。翌年使節が明使を伴なうて歸朝せる際携へたる明の惠帝の國書は無禮なものであつたが、義滿はこれを受理し、且つ朝廷にはこれを奏上しなかつた。而してその後も勅裁を得ずして恣に使節を交換すること數回に及び、たゞ貿易の利を收めるに汲々として大義を顧みず、その後代々の將軍も略、義滿に倣つて對明外交を行つた。更に幕府は盛んに明の貨幣を輸入して國內に通用せしめ、國家的自覺の缺如を暴露した。

### 幕府の勘合貿易

さきに足利尊氏は後醍醐天皇を弔ひ奉つて京都に天龍寺を建

て、その費用を補はんがために造天龍寺船を元に遣はして貿易を行はしめたが、義滿以後の貿易もこの先蹤に倣つたものである。遣明貿易船は三艘乃至十艘より成り、幕府の公船たる證として明より豫て交附せる勘合符を携帯した。これを勘合船と呼ぶ。かゝる勘合制度は公船と私船との區別を明らかにし、以て我が邊民の私貿易を警戒する手段であつたが、事實は我が邊民が頻りに大陸沿岸に渡航して私貿易を營んでゐたことは既に述べた如くである。

勘合貿易船が往復に積載した貿易品は驚くべき莫大な量目を數へた。我が積載品は硫黃、銅等の鑛産物、刀劍、鎗等の武器、扇子、屏風、蒔繪等の調度品が主なるものであり、我が工藝技術の優秀さによつて大いに明人に珍重せられた。殊に日本刀は多數輸出せられ、極めて高價に買はれた。また我が國への積載品は銅錢を主とし、これに次いで生絲、絹織物、藥品、書畫、骨董の類があり、一般に唐物たうぶつと稱して愛玩あいがんせられた。

勘合貿易船の容積は千石内外のものを主とし、九州の門司、平戸、博多、坊津、瀬戸内海の赤間、關尾、道、鞆、兵庫、尾崎、大阪、堺等がその發着港であつた。一艘の乗組は平均百人以上で、多くの船は北九州の博多にて最後の準備を整へ、五島奈留浦なるとに到り風を待つて



出帆した。もとより支那海に於ける季節風の關係から、航路の變更されることもあつたが、多くは寧波に向かつた。載貨の交易は主として北京にて行はれ、將軍の貿易品のみは錢と物と半分宛にして交易されたが、明は我が商人の貨物については物々交換と定め、貨幣の海外流出を防がんとした。

なほこの勘合貿易船には常に禪僧が使節として、また商人の代表として派遣せられ、貿易船編成の企畫にも與つてゐた。もとより遣明船は宗教的使命を有するものではないが、禪僧は支那的な教養に富んで文筆に長じ、彼の地の事情に通じ、且つ將軍や幕臣に親近してゐたから、外交に重用せられたのである。かくして禪僧によつて明の文化が齎されて、室町時代文化の發達に寄與したのであるが、また一方明人は我が工藝品の優れた製作技術の傳授を求めてこれを習得せんとし、我が國の文化が彼の國に及ぼした影響も尠くない。

大内氏の對明貿易 諸國の大名社寺商人等の中には幕府より勘合符を受け、通商を行つてその富裕を圖るものが多かつた。諸大名の中、特に注目すべきは周防の大内氏の占めた特異の地歩である。大内氏はその領地が彼我交通の要路に當つてゐ

たため、もとより盛んに通商を行つてゐたが、應仁の亂の頃からは幕府の委託を受けて勘合符のことを專管するに至つた。かくして幕府が衰へると共に、明との通商を殆ど獨占して富強を極め、その城下の山口は貿易品の商業地となり、頗る繁榮した都市となつた。しかし戰國時代の末に大内氏が滅亡してより、勘合貿易は自ら絶えるに至つた。

かくて室町時代を通じて對明貿易は盛んに行はれたが、幕府の態度はとかく實利のみに偏して國家の體面を顧みなかつたのみならず、また一部國民の潑刺たる海外發展の機運を適切に指導し得なかつた。されば室町時代の對外關係に於いてはその成果が十分には發揮されなかつたが、やがて豊臣秀吉によつて天下統一が成らんとするや、海外發展の傳統的潛勢力は新たな秩序を以て展開することとなつた。

### 三 ヨーロッパ人の渡來

東西交通の發展 ヨーロッパ人の我が國への渡來は室町末期たる戰國の時代に始まる。國民はこゝに始めてヨーロッパ人に接し、その齎せる文物宗教に觸れた。



而してこれによつて全世界に對する視野を擴め、延いてまた國家的自覺を新たにするに至つた。

東西兩洋の交通については、古來東洋の絹絲絹織物麻布陶磁器金銀細工薰物香料等が西洋に輸出せられ、相互の交通は次第に盛んとなつてゐた。然るに我が鎌倉末期にトルコが小アジアに興り、更に後花園天皇の御代には東西交通の要衝たるコンスタンチノープルを占領し、その領土が亞歐に跨がるに至つたので、これまでの東洋貿易の通路は殆どトルコのために遮斷せられた。こゝに於いて西ヨーロッパでは直接東洋との海路通商を開くべき必要が切實に感じられて來た。

これより先、元の忽必烈に用ひられてゐたものにイタリヤ人マルコポーロがあつたが、彼の歸國後に著はした東方見聞記は、その内容の珍奇なるため各國語に譯出せられ、多くの讀者を得てゐた。而してこの書中には我が國をジバングと稱し、金銀珠玉に富める國であるとの傳聞が紹介されたため、ヨーロッパ人の間に日本渡航の憧憬が昂まるに至り、遂に我が後土御門天皇の明應元年(一一五三)コロンブスは日本に到らんとして西に航海し、偶然にもアメリカに到着した。この頃ヨーロッパでは航

海に羅針盤を用ひ、且つ天文学を應用して大洋に航することが既に行はれ、海外進出の機運は非常に顯著となつて來た。中にもポルトガルは地理上の關係よりしても東方發展に恵まれ、明應七年(一一五八)バスコ・ダ・ガマは始めて印度に達した。次いで後柏原天皇の永正七年(一一七〇)ポルトガル人は印度のゴア(臥亞)を占領し、その後更に東進して明國よりマカオ(阿媽港)居住を許されるに至り、これらを根據として盛んに印度支那と貿易を始めた。かゝる情勢であつたから、我が國を訪れた最初の歐洲人がポルトガル人であつたことも決して偶然ではなかつた。

ヨーロッパ人の來航と火器の傳來 後奈良天皇の天文十二年(一一〇三)一艘のポルトガル商船が大隅國種子島に來着した。島主種子島時堯はその船に同乗してゐた明人の説明によつて漂着の事情を漸く知つたが、その時ポルトガル人の携帯した小銃は島民をして驚異の眼をみはらしめた。先に文永・弘安の役に際し、蒙古人は火器を使用し、その後我が國でも一部に用ひられたやうであるが、その方法は未だ廣く行はれなかつた。されば時堯はポルトガル人から二挺の小銃を購ひ、家臣に火薬の製法を習得せしめると共に、鐵砲を製作せしめたところ、我が國が優れたる技術によつて早



くも極めて精巧なるものの製出に成功し、火器普及の端緒が開かれた。世にこれらの小銃を種子島と呼ぶ。

次いで堺の商人にて種子島に来てその製法を學ぶものがあり、その製造が各地に行はれると共に、戦國の時勢に乗じて忽ち近畿地方に擴がり、やがて關東にも傳へられて實戦に利用せられた。これによつて從來の戦法は一新せられるに至り、一騎討よりも集團的行動が重んぜられ、騎馬による戦は自ら鐵砲を用ひる歩兵戦に移行した。また鐵砲に對する防禦として鐵札てつさの鎧や、所謂南蠻鐵の甲冑等が珍重せられ、築城術も變化して幅廣き濠を廻らし、石垣を築き、壁面の厚い宏壯な樓閣を營むに至り、天守閣を有する近世的城郭が出現することとなつた。

ポルトガルイスパニヤとの貿易　ポルトガル商船が種子島に漂着したことは、また彼我の貿易が開始せられる端緒となつた。ポルトガル船は島津氏の領内たる薩摩の鹿兒島、山川、坊津、大友氏の居城豊後の府内、松浦氏の肥前平戸等に來航して盛んに通商を行ひ、諸大名も亦その利を知つて大いにこれを歓迎した。降つて元龜二年(二二二)には大村純忠によつて長崎が開港せられ、爾來長崎は貿易の中心地となつた。

一方イスパニヤ人も大いに植民に努め、太平洋を横斷してフィリッピン群島に來り、天正年間よりは我が國とも貿易を營んだ。當時これらのヨーロッパ人が總て南方より來たことから、これを南蠻人と呼び、その船を南蠻船と稱した。南蠻貿易に於ける輸出品は銀が最も多く、次に銅、刀、劍、漆器等であり、輸入品は生絲、絹織物等を主として、陶磁器、藥種等があり、大部分は支那製の商品であるが、印度支那、マライ、印度等の産物や、當時の國民にとつて珍奇なるヨーロッパの製品も齎された。

基督教の傳來　ポルトガル人の渡來後數年にして、基督教が始めて我が國に傳來した。當時ヨーロッパの基督教界では新教の隆盛につれてその反動が現はれ、イスパニヤ人イグナチオ・ロヨラは同志と共に舊教の一派として耶蘇會を起し、嚴肅なる規律を重んじた。その創立者の一人フランシスコ・ザビエルは基督教の未だ及ばない東亞への宣教を志し、ゴア及びマラッカに傳道してゐた。時にマラッカからゴアの耶蘇會に來た一日本人があり、ザビエルはこれに我が國の事情を聞いてその布教を思ひ立つた。かくて遂に一行を率ゐてゴアを發し、天文十八年(二二〇)鹿兒島に着き、領主島津貴久たかひさの許可を得て始めて基督教の布教を行つたのである。これ基督



教が傳來した最初である。この教は我が國に於いては當時吉利支丹宗または提宇子教と稱し、後に天主教または切支丹宗と呼ばれた。ザビエルは更に京都に上り中央にて全國布教の道を開かんとし、やがて平戸山口を経て京都に入つた。然るに京都は時恰も戦亂の際であり、布教の自由も得られず、やむなく堺を経て平戸に引返した。後また山口に赴き、領主大内義隆の許可を得てこの地方に布教し、大いにその効果を擧げ、また豊後の府内にも赴き、領主大友義鎮宗麟の優遇を受けて傳道を行つた。かくてザビエルは各地に布教の基礎を作り、二年三箇月の日本滞在を名残りに同二十年十月、ポルトガル船に乗つて印度に去つた。

基督教の傳道　ザビエルは日本人が聰明にして學識に富み、道理をよく辨ずるところを知り、布教について辛勞多きことを感じたが、同時に將來の普及を確信した。さればザビエルに随つて來朝したものにトレス及びフェルナデス等があつたが、この兩人はザビエルの去つた後も我が國に留まつて布教に努め、その後も引續いて人物の優れた宣教師が我が國に派遣された。こゝに於いて九州、中國等では基督教の隆盛を見、大村領長崎の如きは永祿年間に信徒一千五百人を數へ、一佛寺を毀つて教

會堂が建てられた。而してその宣教に諸大名の保護があつたことはいふまでもなく、中にはこれに歸信して洗禮を受けた大名もあり、大友義鎮、大村純忠等はその最も著しいものであつた。基督教は安土桃山時代に入ると共に益々普及することとなるのである。

基督教が我が國內に尠からぬ信徒を速かに獲得した理由は、國民が外國文化に對する感受性に敏であつたことによるのであるが、また當時の戰國諸大名が武力と財力とを擴充する手段として基督教を保護したことにもよる。即ち南蠻人の齎せる武器と火藥とは武備を強化するのに必要であり、また南蠻船の積載せる珍奇な商品の輸入は利益を收める所以であり、これらの目的を達するためには貿易と離すべからざる關係にあつた布教に便宜を與へなければならなかつたのである。なほ當時渡來した宣教師は特に學徳あるものが擇ばれ、何れも信仰と布教のために獻身的に精進し、且つ教育や慈善事業にも盡力したことなども、人心を收める所以となつたのである。



## 第四節 室町時代の文化

## 一 神祇崇敬・神道及び和學

神祇の崇敬 建武中興に於いては上世聖代への復歸が意圖せられ、従つて祭祀に於いても舊制を興し、恆例臨時の神事を闕怠なく執り行はんとせられた。従つて吉野朝廷におかせられても殊に神事を重んじ給ひ、また天下靜謐のために屢、諸社に祈願を籠めさせられ、祭祀の嚴修と社壇の紹隆とを望ませられた。されば伊勢の神宮、石清水八幡宮、住吉神社、阿蘇神社、熊野三社等の大社の神官より尊皇の至誠を捧げるものが多く出たことは當然であつた。續いて室町時代に入つて、朝廷は御財政に於いて十分とはいひ得ない状態にあらせられながら、歴代天皇は上世の盛時のまゝに朝儀を行ひ給はんとの叡慮を懷かせられ、古來のまゝに恆例臨時の祭祀が行はれた。但しこれを鎌倉時代以前に比較すれば、その規模が小さくなる傾向にあつたのは已むを得ないことであつた。

足利氏に於いては尊氏は晩年自己の所業に省みて罪障の輕からざるを察し、諸寺院を建立すると共に神社を崇敬することが篤かつた。またその子孫代々は源氏の支流として氏神たる八幡宮を尊崇し、石清水八幡宮、六條左女牛八幡宮等に奉幣を重くし、社領を寄進し、また祇園、北野その他の諸社も武家によつて崇敬せられた。庶民もこの間に伊勢の神宮を始め諸社に參拜する風が盛んとなり、氏神の祭祀を通じて村落の自治的結合を固くした。

伊勢神道 神道説の中、先づ伊勢神道は元寇以來喚起された旺盛なる神國思想によつて大いに發達を遂げたけれども、室町時代に於いてはその顯著なる展開を見えない。しかしその間にあつて、建武中興及び吉野時代に於ける度會常昌の勤皇事蹟、同家行の戰場裡に於ける武勳は、よく伊勢神道の精神とその燃ゆるが如き信念を發揮したものといふべきである。また吉野朝廷の柱石北畠親房は家行との交渉が深く、神皇正統記の神祇觀念も伊勢神道に負ふところが多い。殊に伊勢神道の清淨正直と心神とを重んずる精神は親房の思想を通じて強く示され、日常天皇に仕へ奉る生活態度にも體現せられた。なほ吉野時代の初め、僧慈遍は伊勢神道の流れを汲



んだが、独自の説を展開し、國民は悉く神風の教即ち天照大神の示し給へる皇道の徳化を知るべきであると唱へた。同時に神佛の關係についても神は佛の本源なりとし、佛法はもと種子たる神より出で、一度西方に進み、やがて落花結實するや、再び我が國に歸來したものであると説いた。これは既に見られた神本佛迹説の展開であり、ついで吉田兼俱によつて唱へられる思想の前驅となつた。

吉田神道の創唱　その後室町末期に至つて、新たに吉田神道唯一神道が吉田兼俱によつて創唱された。吉田家の本姓は卜部氏であつて、累代神祇官並びに京都吉田神社に奉仕してゐたが、兼俱は神道を研鑽して卜部家所傳の神道は萬法の根原なりとし、元本宗源神道と稱した。これを一に唯一神道、また吉田神道ともいふ。その説くところは、神は天地の根元であるから、有心無心一切は神道に歸するとし、我が國は萬國の根本、諸神は一切精靈の元神であるとなした。また日本の國は神國、道は神道、國王は神皇、祖は天照大神であり、一神の威光百億の世界を照らし、一神の附屬永く萬乗の王道を傳へ、天に二日なく國に二王なきものであるとて、神道と國體との關係を明らかにし、以て皇道の尊嚴を説いた。而して神佛の關係については、神道は根幹

儒教は枝葉、佛教は花實なりといひ、儒佛を神道に攝取し、さきに慈遍の唱へた神本佛迹説に通ずる説を樹てた。兼俱はかゝる神道思想を唱道すると共に、國民の敬神觀念に投じて文明十六年(一一四四)吉田神社の南に齋場所を設け、これを神道根本の道場と稱し、その中心に太元宮を置き、これを圍んで日本國中の大小神祇三千百餘座を祀り、また祈禱や祓を行つた。久しく兩部習合に慣らされた國民に對して、兼俱が我が國を根本とする神道説を唱へたことは、思想史上大なる意義を有する。

庶民の敬神　この時代庶民の間には、雜多な俗信が行はれ、それは種々な方面に示された。しかしかゝる風潮にも拘らず、古來の神祇に對する崇敬が昂まり、伊勢の神宮の參詣が盛んとなつたことは特に注目すべきである。元來伊勢の神宮は餘社と異なり、私の奉幣を禁ぜられ、また嚴に佛教を忌んで僧尼の參詣が許されなかつた。然るに、鎌倉時代頃より僧俗共に神宮に參詣することが認められ、廻國の巡禮者や僧侶に連れられた多數同行者の參宮が行はれるに至つた。それと共に神宮にても參拜者の利便を圖る方法が講ぜられ、崇敬者に對し祈禱や祓を行ふ御師と稱する神役が生じた。參宮の風は室町時代に入つて益々盛んとなり、御師と地方との連繫も緊密



となつた。またこの時代には村々に於いて毎年一部の村民が代表して神宮に参詣することも行はれ、各地に伊勢講が發達した。

有職故實の研究 和學には先づ有職故實に關する著作が多く現はれたことが注目せられる。後醍醐天皇の御撰になる建武年中行事日中行事は、朝廷にて行はせられる御儀式や、禁中の日々の御作法を書かせられたもので、室町時代に於いても大いに重んぜられ、畏くも歴代天皇が宸筆を以て書寫あらせられる場合も尠くなかつた。ついで吉野時代には北畠親房の職原抄が著はされて官職研究に重きをなし、室町時代には一條兼良の公事根源、三條西實隆の三内口訣等が名高く、殊に兼良は有職故實について當代第一の學者であつた。有職故實の研究は古來の節度を保たんとする精神と、復古的思想とを根柢とするものであつて、朝儀を振肅せんとする運動でもあつた。

國史の研究 國史の研究も亦同様の思想を基調として起つた。鎌倉時代以來の國家意識の昂揚に伴ひ、日本中心の思想は神道の發展と深く關聯しつゝ、國史への反省を導き、吉野時代には北畠親房の高邁なる識見によつて神皇正統記が述作せら

れたが、また室町時代には僧周鳳によつて日本外交史ともいふべき善隣國寶記が著はされた。

古典に對する關心としては、特に日本書紀の研究が盛んとなり、傳寫の諸本を纏めて校合を行ひ、その原形を保存しようとする努力も見られた。書紀全體についての註釋書は著はされなかつたが、その神代卷は神聖なる我が國體の淵源を説いた重要部分として格別に重んぜられ、忌部正通の神代卷口訣、一條兼良の日本書紀纂疏、吉田兼俱の日本書紀抄等が相次いで現はれた。これらはまた雷に註釋書たるのみでなく、有力な神道説をなしてゐる點にその重要性が認められる。

上世文學の研究 次に上世の文學に關する研究について見るに、先づ萬葉集研究は前代に仙覺の殘したやうな名著は見られないが、一條兼良、三條西實隆や宗祇は萬葉集を重んじ、これを古典として研究する機運が見られた。しかもこの時代には古今集を慕ふ心は大いに熾烈であつて、註釋書の如きも親房の古今和歌集註に次いで兼良の古今集童蒙抄が出で、また諸藝に秘事、口傳の盛んであつた風潮に伴ひ、これにも所謂古今傳授の奥儀が神秘的觀念を以て傳へられた。次に伊勢物語と源氏物



語とは大いに普及してその註釋書も多く著はされた。殊に源氏物語については、吉野時代に長慶天皇は御親らこれを研究あらせられて仙源抄の御撰があり、室町中期以後にはその研究が益々盛んとなつた。就中一條兼良の花鳥餘情はその態度に文章と文章とを味ははんとする面を有することが注意せられ、宗祇實隆またその研究を以て聞えた。かくてこれらの古典のやがて武士庶民の間にも廣く親しまれるに至る素地が築かれつゝあつたのである。

## 二 佛教の普及

其佛教の動向 南都北嶺や高野山等は元弘建武以來の争亂に、武力獲得の手段として著しく政治的に利用せられたが、宗教的にはなんら見るべきものが現はれなかつた。その中にあつて延曆寺は依然として教界至高の地位と世俗的勢力とを保ち、興福寺は武力的には諸將を凌ぐ勢威を誇り、その衆徒からは筒井氏の如き豪族が出た。また真言宗では醍醐寺三寶院の賢俊や滿濟が足利氏に重んぜられて政治の機務に與り、その地歩を確立した。而してこれらの舊宗派は古い傳統に誇つて、前代以

來新興の諸宗派に對して時々露骨な壓迫を加へたが、戰國の争亂と共にその傳統的勢力を失墜した。

淨土宗の發展 淨土宗は法然の弟子より既に多くの派に分れ、やがてそれが更に流派を生じ、互に消長があつた。吉野時代から室町時代にかけて東國地方に根強い普及があり、殊に聖岡(了譽)は學識博く、淨土の教説に神道との調和を發見し、その教義の宣布に努めた。關東に於ける宗勢の興隆は彼及びその弟子聖聰に負ふところが多い。またこの時代を通じて、淨土宗は朝廷の御歸依を忝うし、その權威を加へた。

眞宗の發展 眞宗は宗祖親鸞の後、東國諸國の教線は次第に擴大したが、纏まつた組織を有せず、僅かに親鸞の廟所たる京都東山大谷の本願寺と、親鸞の弟子眞佛の系統が住した下野高田專修寺とが著はれてゐた。本願寺では吉野時代の頃、覺如存覺の父子が出で、宗旨勃興の素地が固められつゝあつたが、その著しい發展は應仁の頃兼壽(蓮如)によつて行はれ、同時に一宗の中心的勢力を確保した。眞宗に對する他宗の迫害は早くから加へられてゐたが、蓮如の時になつて遂に比叡山の衆徒が大谷の本願寺を破却するや、蓮如は京都を逃れ、蹶然起つて傳道に邁進し、應仁・文明の亂世の



さなか大いに教線の擴張に努めた。即ち主として北國近畿地方を巡錫して人心を化導し、先づその根據として一大城郭の觀ある越前吉崎坊を建立し、續いて壯大なる山科本願寺を營んでこれに祖影を安置し、諸國には支域的な意味を有する道場を多數に設け、晩年には大阪に石山坊を建設し、その宗勢は一代の間に頓に高まつた。その傳道は所謂御文章によつて平易に教義を説くと共に、各地に講會中かうちゆうを組織し、その寄合を通じて相互の信仰を深め、これを以て宗勢を確保する手段とした。かくして不安動搖を續ける當時の社會に於いて、他宗による信仰上の妨害や、武力による生活上の壓迫が加へられるとき、集團運動を以てこれに對抗し、時には武器を執つて戦ふこともあつた。これを一向一揆と呼ぶ。

蓮如の後、天文元年(二一九二)比叡山の衆徒は日蓮宗一揆や近江の六角氏と聯合して山科本願寺を攻め、これを焼き拂つたので、それより大阪の石山は本願寺となり、一宗の根據として愈、その防備を堅固にした。石山本願寺はまた殷賑なる寺内町を有し、諸國の道場門徒と連絡を保つて戰國の群雄にも比すべき勢力を築き上げた。

## 日蓮宗の盛衰

日蓮宗は日蓮の歿後やがてその門下に教義上の相違が起つて多

くの分派を生じ、激しい論争を展開したが、全體としての宗勢は次第に向上した。吉野時代には日像が京畿方面に活動して、朝廷及び足利氏の保護を得、その後、諸派各地に活躍して寺院を建立し、益、庶民教化の運動を盛んにした。蓮如と略、同じ頃日親が出で、争亂疾疫凶作相續いて人民苦惱せる時勢を慨嘆し、日蓮に倣つて立正治國論を著はして日蓮以來の信念を一層強く主張し、迫害に對して聊かも屈しなかつた。それと共に宗勢も大いに盛んとなり、その一揆の力は侮り難いものがあつて、天文元年(二一九二)には山科本願寺の攻略に加はつた。しかし同五年には比叡山の衆徒と衝突して敗れ、京都に於ける二十一本山は徹底的に破却せられたため、一時京都に於ける勢力は衰へた。但し關東に於ける勢力は、なほ依然として盛んなるものがあつた。

禪宗の消長 禪宗の中、臨濟宗は吉野時代からその中心が京都に移り、朝廷、武家の厚き保護を受けた。宋僧祖元の法系を引ける夢窓國師疎石は後醍醐天皇の御召によつて鎌倉より入洛し、京都南禪寺の住持となつたが、後には足利氏の歸依を受け、その門に春屋妙葩しゆんぐわ、絶海けつかい、中津義堂ちかつぎだう、周信等の名僧が輩出し、禪風を鼓吹すると共に儒學を振興した。疎石と併稱された大燈國師妙超は花園天皇、後醍醐天皇の御信任を忝う



し、大徳寺に住した。また足利尊氏直義等は一國一寺一塔の方針の下に全國に安國寺と利生塔とを營み、臨濟宗をしてその事に従はしめ、且つ尊氏は疎石の勧めにより、後醍醐天皇の御菩提を弔ひ奉り、兼ねて陣歿の靈を慰めんとして天龍寺を創建した。かくして臨濟宗は足利氏代々と深く結合するに至つたのである。

なほ既に鎌倉時代に主なる禪寺の格式として五山の稱が起つたが、吉野時代には京都及び鎌倉の夫々に五山の制が定められた。即ちそれは五山の上、南禪寺と京都の天龍寺、相國寺、建仁寺、東福寺、萬壽寺、鎌倉の建長寺、圓覺寺、壽福寺、淨智寺、淨妙寺であつた。五山以外にも著名な禪刹が京都を始め全國に多く建てられ、宗勢は次第に盛んとなつた。

元來禪宗は鍛錬と工夫とを重んずるものであつて、吉野時代に於いても勤皇の忠臣や足利氏の幕僚には眞摯な修練を行つた武將も尠くなかつた。しかし室町時代に入ると共に、禪僧は朝廷幕府の厚き庇護に狎れて漸くその本來の面目を失ひ、好んで政治に接近し、殊に外交貿易の事を管掌するに至つた。かくして宗教的使命から次第に遠ざかり、應仁の亂の前後にもなれば、詩文繪畫等の餘技に耽り、權門に出入し

て談論交遊を事とする風も見られるに至つた。この時大徳寺に「休宗純」があつてかゝる状態を慨嘆し、禪徒に「一點菩提心なしと嘲り、また妙心寺の雪江宗深は大いに宗風の振肅と宣揚とに努めた。

曹洞宗は祖師道元が山中に幽棲して坐禪工夫に専念した遺風をよく傳へて、中央の權門と接觸することが少かつた。しかも宗門にその人多く、各地に法燈を掲げて宗風を宣揚した。中にも紹瑾は鎌倉末期に出でて宗風大いに擧り、その弟子紹碩も亦傑出し、共に地方教化に貢獻した。降つて應仁の亂以降には廢れた寺院が興されるなど、次第に庶民の間に擴がる傾向を示した。

### 三 儒學の發展とその普及

京都の學統 京都に於ける文章、明經兩道の儒學は、陰陽道などと共に時代を負荷する使命を失つてより既に久しきものがあるが、しかも清原中原、菅原大江、小槻等の諸氏は古來のまゝに世傳の學統を傳へて來た。その中にあつて清原宣賢は一代の碩儒と謳はれ、和漢の學に精しかつた。また一條兼良、三條西實隆等は和學に優れた



る外、朱子學をも究め、時代有数の學者であつた。

儒學の發展 室町時代に行はれた儒學の主なるものは依然朱子學であり、禪宗の僧侶によつて著しく發展せしめられた。而して儒學が禪僧の教養として重んぜられることは一般的風潮となり、殊に疎石の門下に出た多くの俊髦は何れも儒學に造詣深く、その一人たる義堂周信は義滿の信賴を受け、將軍や幕僚に四書五經を學ぶことを勧めた。また東福寺の岐陽方秀は禪儒一致を唱へて講書に力を致し、訓點法を改めて四書集註ししゅうちゅうに和點を施し、一條兼良はその門に學び、神道と朱子學との調和を試みた。その他多數の禪僧は朱子學のために盡くし、近世朱子學興隆の素地をなした。

五山文學 奈良時代及び平安初期に興隆した漢詩文は、平安中期以後次第に衰へたが、鎌倉時代に至り、禪宗宋學等の影響によつて、漢文學にも再び見るべきものが現はれて來た。殊に吉野時代からは漸く禪僧獨特の卓出せる漢詩文を作ることが流行して盛況を呈し、中巖圓月、義堂周信、絶海中津等はその名一世に響いた。當時の禪僧の漢詩文は少くとも表現の形式に於いて元明人の文章と殆ど異なることがないが、その風格は我が國の文學としては特異の存在であつた。かゝる漢詩文は京都の

五山を中心として發達したので、これを五山文學といふ。五山文學は禪僧の朱子學と密接な關係を以て發達を遂げ、京都の文化を飾つてゐたが、この時代の末期に於ける禪僧の地方進出によつて廣く地方にも普及した。

儒學の普及 この時代にはまた儒學の地方普及が禪僧によつてなされた。殊に應仁の亂後、群雄割據の状態となつてより、諸大名の中には好んで禪僧を聘して修養に努め、治政の道を聽き、或は教化事業に盡力せしめたものが尠くない。文明の頃、禪僧桂庵玄樹けいあんげんじゆは肥後の菊池氏及び薩摩の島津氏に相次いで聘せられ、それらの地方に於いて儒學興隆の根柢を培養した。特に薩摩にては文明十三年(一一四二)大學章句を刊行したが、これ我が國に於ける朱子新注の書の最初の上梓である。また南村梅軒は天文年間土佐に赴き、朱子學を提唱して節義を鼓吹した。土佐は早くより五山禪僧の感化があつたが、梅軒以後こゝに所謂南學が起つたのである。その他戰國の時代に諸國に逃れた禪僧は儒學を以て夫々の地方に教學を哺育した。

周防の大内氏は對明貿易の利を占めて富強を誇り、學問にも意を用ひたので、著名の僧侶が來つて領内の教化が進み、またその許へは兵亂を避けて來た多くの公卿學



者が迎へられたので、京都の貴族文化は一時山口に移植された觀を呈した。殊に大内義興は五山の禪僧景徐周麟に就いて儒佛を學ぶと共に、學問を獎勵したので、明應八年(一一五九)正平版論語が家臣によつて翻刻され、また典籍の出版や輸入が盛んに行はれ、その子義隆に至つて大内氏の文教は最盛期を現出した。大内氏の後を繼いだ毛利氏も文教に力を注ぎ、小早川隆景は禪僧を聘して學生の教授に當らしめた。また永享から文安頃にかけて上杉憲實は、鎌倉圓覺寺の僧快元を請じて下野の足利學校を中興せしめ、内容を整備充實すると共に、爾來専ら新古兩注の儒學を講ぜしめた。而して全國から多數の學徒こゝに集まり、教を受けたものは更に諸方に學問を傳播し、文化の地方普及に貢獻した。

なほ庶民教育については、前代より僧侶が寺院に於いて士庶の幼少なる子弟を教育する風習があつたが、この時代にはそれが益、普及した。その修得する所は、讀書作文習字及び經典の讀誦等であり、殊に習字は重んぜられた。教科書としては往來物類や實語教などが用ひられた。

#### 四 新興の國文學

和歌の沈滞と連歌の興隆 和歌は吉野時代に於いて新葉和歌集その他芳山の餘薫を傳へるものがあつたが、室町時代の歌風は鎌倉時代以來の風を承けて、傳統の殻に籠る傾向があり、題詠が益、盛んとなつて沈滞の色は蔽ひ難くなつた。勅撰の歌集も後花園天皇の御代、永享十年(二〇九八)に奏覽を遂げた新續古今和歌集を以てその跡を絶つた。しかし歌詠の趣味はこの後に於いても士民の間に普及しつゝあつた。

和歌が傳統にのみ囚はれてゐたのに對し、この時代の特異性を示す文學は連歌である。連歌はもと和歌の上の句と下の句と、或は下の句と上の句とを二人で唱和し、合せて一首の和歌とする即興的なものに源流があり、かゝる方法は既に平安時代から行はれたが、それは和歌の餘技に過ぎず、獨立の文學とは考へられなかつた。然るに鎌倉時代から五十韻百韻と連續させる長篇連歌が行はれて次第に獨立の文學となる形態を整へ、吉野時代に二條良基等が始めて菟玖波集なる連歌集を編したことは連歌興隆の基をなした。次いでこの時代に宗祇は連歌の發達を頂點に達せし



め、その撰せる新撰菟玖波集は勅撰に準ぜられた。連歌は詩想の獨自にして自由なるを特色とし、連歌會を催して詩興をほし、いまゝにするものであつて、類型化した和歌の桎梏を脱し、清新な感覺を躍動せしめた。なほこの時代の末に山崎宗鑑（きん）が出でてより俳諧の連歌が流行し、文藝の世界に一つの分野を占めるものとなつた。

謡曲狂言 歌舞を中心とする猿樂・田樂の類は、從來は極めて卑俗または素樸なものが多かつたが、この時代に觀阿彌（くわんあみ）・世阿彌（よあみ）等がこれらを猿樂の能として集大成したかく大成せられた能樂は室町時代の代表的新興藝術であり、且つ近世演劇の源流ともなつた。その劇文學は即ち謡曲狂言である。謡曲は比較的短い敘事詩的劇曲であつて、幾多の先行文學や民間傳承等に題材を求め、その種目は多岐に分れてゐる。その文辭は所々に古歌・古詩や戰記等から佳句を引用し、華麗な韻文的口誦をなしてゐる。而して謡曲が通じてその特色とするものは、古來の國民精神を基調として、神韻漂渺たる情趣の中に幽玄なる表現を尙ふことにあり、佛教的色彩が殊に濃厚である。狂言は謡曲を能樂として演ずる間に行はれるもので、その演技は滑稽にして輕妙であり、原始的猿樂に通ずるものがある。謡曲の嚴肅にして重厚なるに對して、そ

の詞は時代の口語を用ひ、その内容は時代の世相をよく捉へて通俗的であり、明朗である。而して謡曲・狂言等が單なる感傷詠嘆の抒情文學に代つて所作の文學として興隆したことにより、時人が藝能を愛好し、且つ重んじたことが窺はれる。

御伽草子 室町時代の中期以降に數多く現はれて普及した物語的作品に御伽草子類がある。これらは童蒙の讀物として作られた通俗的な短篇であり、各の規模が小さく、描寫もまた低俗の感を免れないが、取材の範圍は多く各種の物語傳説等に求められ、鳥獸・蟲魚・草木を擬人化した童話も見られる。それらの説話は、よく世相を反映して、民衆に適切な散文學を提供しようとしたところに、新興文學として見るべき價值がある。

この時代の國文學を大觀すると、潑刺たる生氣に富んだものも興つたが、概して沈滞の状態を示した。しかし從來貴族を中心とする一部の人々の文化に過ぎなかつたものが、一般に廣く普及する端緒が見られ、これがやがて江戸時代に於ける百花撩亂たる國民文學を展開せしめる苗床となつたことが考へられる。



五 美術工藝とその風尚

繪畫の新傾向 平安後期より鎌倉時代を通じて發展した大和繪は、吉野時代に入る頃から次第に衰へ、繪卷物は氣魄を失つた。佛畫は多數に畫かれ、明兆あきあきの如き名家も出たが、この時代を特色づけるものは肖像畫及び水墨畫であつて、共に禪宗に關聯して勃興し、時代の好尚に投じて大いに發達した。

肖像畫は禪僧の像が多く作られた。禪宗では師を尊ぶ精神からその肖像即ち頂えん相さうを重んずるために、禪宗の隆盛と共にこれが益々盛んに畫かれた。肖像畫はまたこの時代の個性を重んずる傾向と一致して廣く普及し、武人その他の畫像も描かれるに至つた。

鎌倉時代には宋・元の繪畫が流傳し、その畫風も受容せられたが、室町時代にはその間から特に水墨畫の發達が見られる。水墨畫は色彩を用ひずして墨色を基本とし、簡單雄勁なる筆致を用ひて對象の精神を畫くことを特色とし、華美纖細を斥けて主觀性を重んじ、描寫に著しい捨象を行つて、深い精神の含蓄を尙ぶものである。かゝ

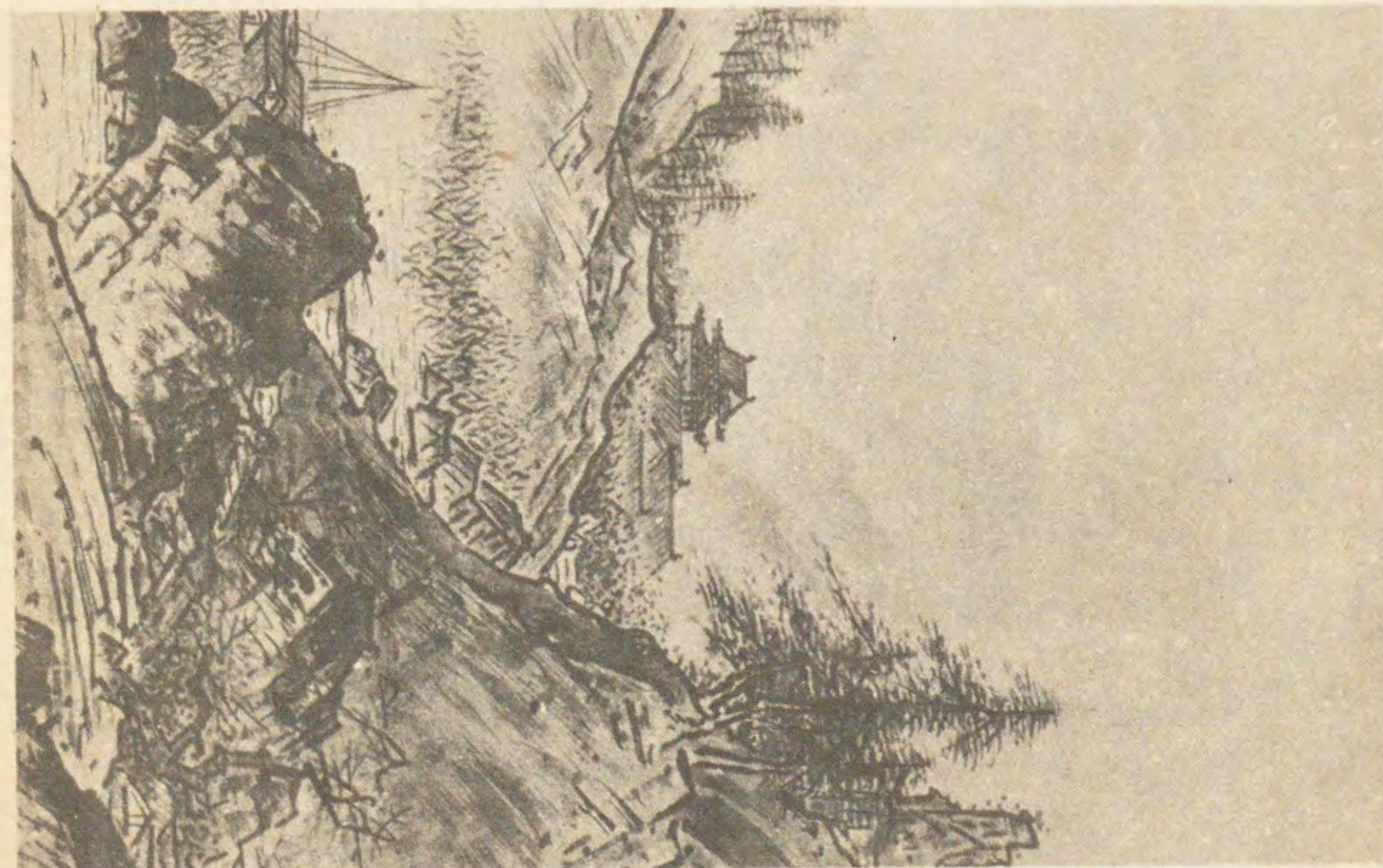
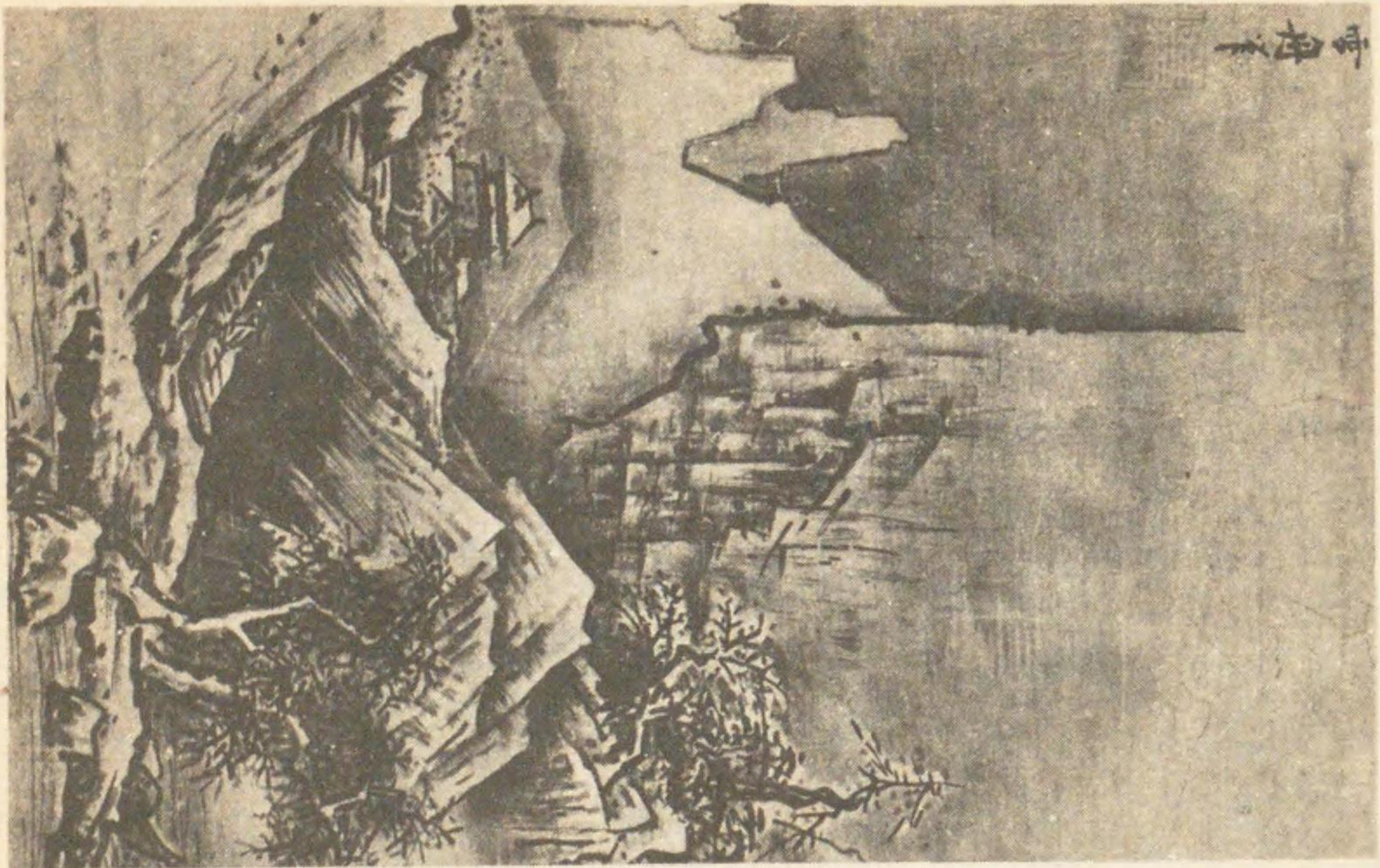
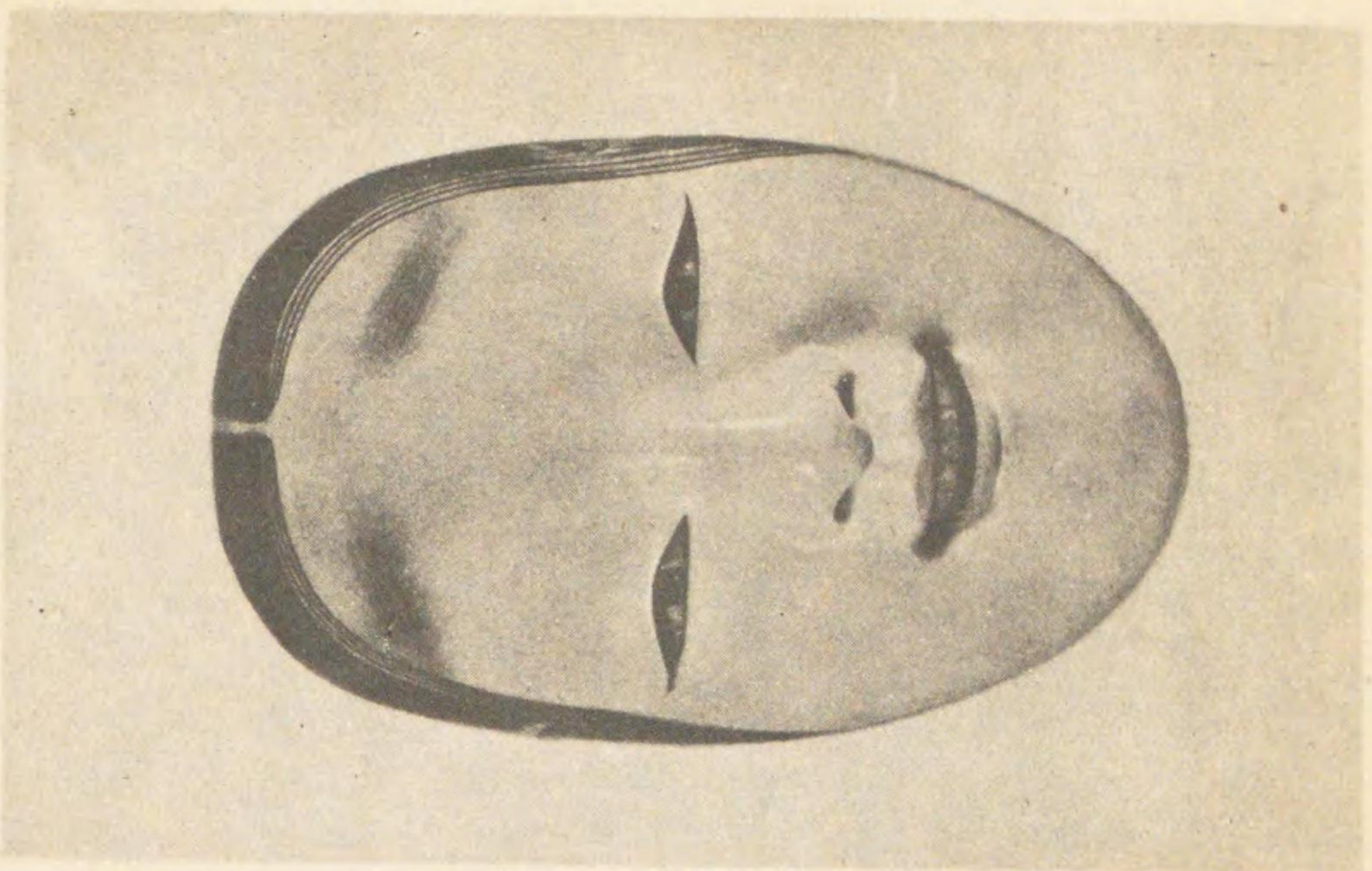


圖 水山冬夏筆舟雪

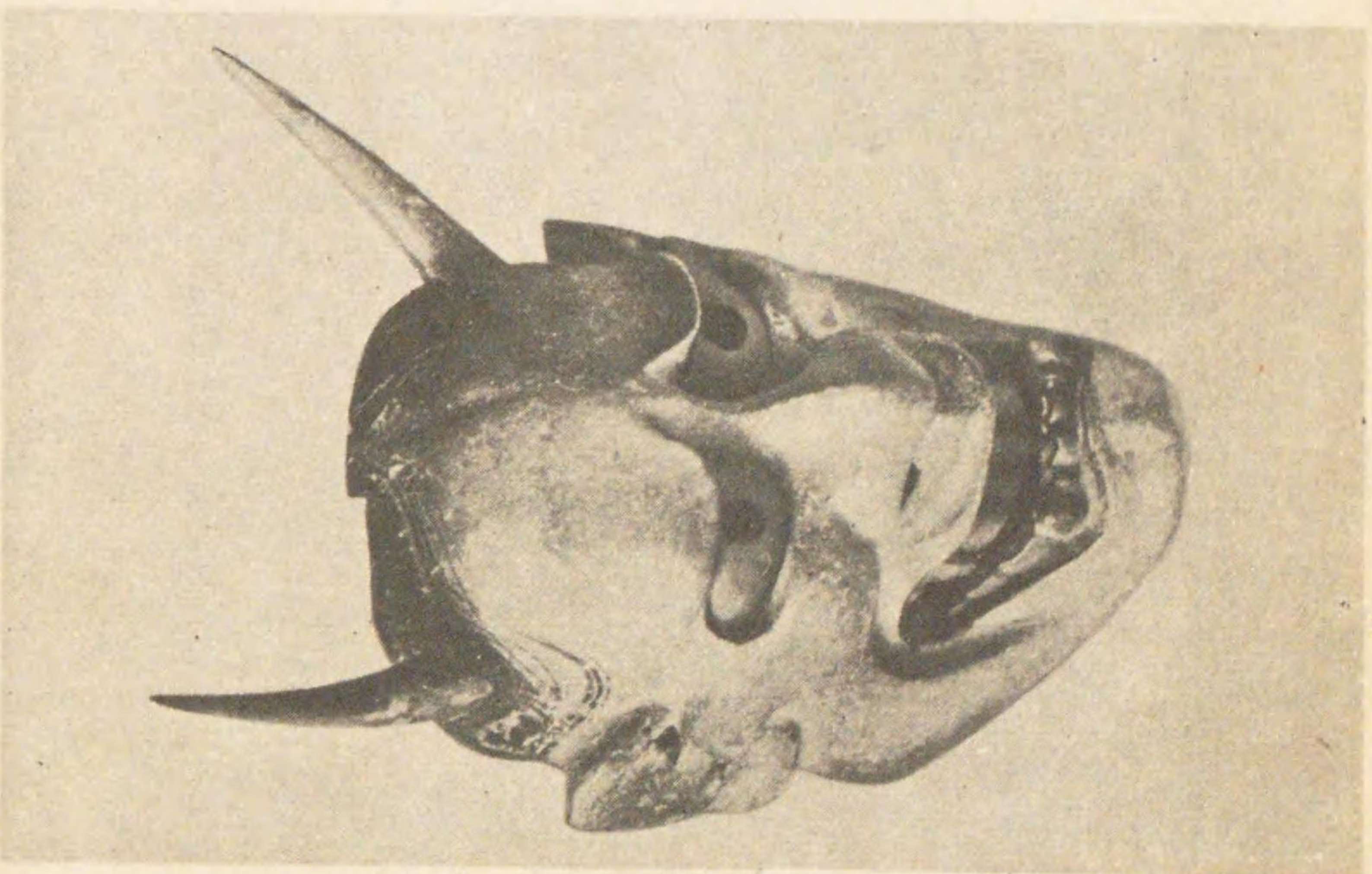


小面



能

般若



面

る水墨畫は禪宗の精神に適ひ、幽幻枯淡を尙ぶ時代精神に合致して大いに流行し、優れた作家を相次いで生むに至つた。前代に於いて既にその萌芽が見られたが、室町時代には如拙、周文等が出て水墨畫の境地は著しく進んだ。而してそれらの畫家は畫題を多く支那の風物に借りたが、やがて古今獨歩の畫才を現はした雪舟によつて淡彩を主とする日本の山水畫が渾成せられ、我が國民精神たる自然に對する親和の情感がよく表現された。その一門またよく師風を繼ぎ、水墨畫の隆盛が導かれた。

次に室町時代末期に雪舟の畫風に源流を發しつゝ、しかも日本畫と宋元の水墨畫とをよく綜合せる一大系統を組織し、新しき旗幟を樹てたのは、狩野元信によつて開かれた狩野派である。元信は將軍義政の繪師たる正信の子で、夙に宋元畫を學んだが、また大和繪の素養をも積んだ。従つてその表現は水墨畫の筆致を主とせる中によく日本の情趣を漂はせ、また具體的、説明的な構圖にその特質を示し、よく國民の好尚に投じたので、こゝに狩野派の傳統が永く維持せられる基が開かれた。

新興の彫刻 この時代に普及した鎌倉時代新興の諸宗派は總じて佛像を重視せず、舊佛敎も衰微に向かつたので、佛像彫刻には特に見るべき特色もなくなつた。し



かしその間にあつて、鎌倉時代から能面彫刻が行はれ、能の發達に伴なつて益々盛んとなつたことは注目すべきである。能面は能樂の象徴的性質に支配せられて、普通の彫刻技術を以て律すべからざるものがあり、それは一見無表情であり靜的であるが、しかも深き含蓄を藏し、いはば複雑なる表情を一瞬に凝固せしめたる象徴主義の藝術ともいふべく、よく幽玄の美を湛へてゐる。

建築の様式 神社建築に於いては前代に比して急激な變化を見ないが、佛寺的手法が在來よりも多く加へられるに至つた。流造の社殿は最も普及し、各地にこの時代の構造を留めてゐる。佛寺建築は今日に遺るものが尠くないが、禪宗寺院に注目すべきものがある。禪宗建築は鎌倉時代以來の所謂唐様が行はれたが、更に各種の手法を融合して新味を出した。應永年間の造營にかゝる京都東福寺三門の如きは、その代表的なものである。

住宅建築の遺構は乏しいが、京都にてはなほ寢殿造が多く營まれ、鎌倉その他の地方では武家造が漸次普及しつゝあつた。またこの時代には書院造が行はれた。これは禪宗寺院の書院即ち書見の場所や、住持の居間たる方丈等を中心として發達し

たものであつて、多くの部屋を自由に連絡せしめ、玄關を設け、部屋に疊を敷き、襖障子を具へ、床、違棚等を作るのを特色とする。かくの如き書院造は日本住宅建築として、現代に連絡を有する意味に於いて重要なものである。なほ茶室もこの時代に書院造の中に作られることがあり、やがてこれが獨立して茶室建築となるのである。

室町時代の建造物中、代表的遺構は京都鹿苑寺金閣と慈照寺銀閣とである。鹿苑寺は應永年間に義滿が北山第に建てたものであつて、禪宗寺院であるが、住宅建築ともいふべく、その金閣は寶形造三層の樓閣をなし、建築様式として獨創的意匠に富み、その形状は輕快洒脫、周圍の山水自然によく調和してゐる。慈照寺はそれより約八十年後れて文明年中に義政が東山に營んだもので、その中の銀閣は寶形造二層をなし、東求堂と共に、當時の建築を存し、枯淡なる庭園と相應じて見るべきところが尠くない。

工藝の發達 工藝品についてはこの時代に於ける生活の向上に伴なつて、座右の日用器物にまでも技巧が重んぜられ、殊に漆工、蒔繪等の技法は大いに進んで優美精巧となり、大陸の技術を凌いだ。刀劍裝具の目貫、小柄等には大いに技巧が凝らされ、



後藤祐乘（いしむね）とその系統とが彫金に重きをなし、甲冑には鎌倉時代以來の明珍家が著名であつた。また茶道の流行につれて、茶の湯の釜が多く作られ、筑前蘆屋釜等が世に珍重せられた。更に陶工の發達はこの時代の特色となり、近江信樂（おたけ）燒備前燒が隆盛となつたのを始め、各種の陶窯が生じて素樸な趣味が尙ばれ、我が國陶藝に於ける一大進展を示した。これを要するに工藝もまた他の美術と同様に日常生活に深い關係を有しつゝ、その技術が次第に普及するに至つたことが注意せられる。

## 六 東山文化

文化の特色 足利義政は應仁の亂後、文明十二年（一一四〇）京都東山の山莊に銀閣を建て、爾來數奇風流の生活に耽つた。義政のこの東山生活を中心として、室町末期には在來から兆しつゝあつた文化が、亂世をよそに上流人士によつて大いに洗煉せられ、特殊なる發達を遂げた。よつてこの時代を一に東山時代と呼び、その文化を東山文化といふ。東山文化の特質は我が國古來の風雅を尙ぶ精神に、前代以來攝取醇化せられた禪の精神を加へてこれが渾然たるものに醸成せられた點にあり、殊に幽

幻・枯淡の境地を以て著しい特色とする。かゝる境地はまた世の煩はしい争亂を避け、財政困乏の中に見出した安慰の心でもあつた。而して東山文化は上流社會に起りながら、やがてその様式は民衆の間に擴がる萌芽を示し、後の時代には廣く普及して現代生活と密接な關係を結ぶに至るのである。

茶道と作庭 東山文化の特色は茶の湯に於いて最もよく窺はれる。茶を喫する風は既に鎌倉時代以來盛んとなつてゐたが、東山時代に始めて茶道が興り、喫茶の慎しみ深く、術はない行法を通じて、幽玄なる佗（わ）の境地を感得することを旨とするに至つた。義政は東山の閑居に藝阿彌相阿彌と相會して茶を喫し、更に奈良の僧珠光を召して茶會を催し、こゝに茶道の成立が見られた。その後、茶道の精神と行法とは珠光の門流に出でた武野紹鷗（すけおう）その他多くの茶人によつて次第に發展せしめられ、桃山時代に千利休によつて大成され、江戸時代には朝搦武家は勿論、庶民生活の作法としても普及し、以て今日に及んだ。また茶の湯に伴なつて京都六角堂の專慶が花を立てる技術を工夫し、次第に生花の道が發達した。香道もこの時代に一層洗煉されてよく時代文化の風尚を示した。作庭の術はこの頃特に發達し、林泉の調和、木石の配



置に妙を極めて閑寂の風趣を現はし、狭小なる庭園に於いて廣大な山水を感得せしめ、四疊半裡に人生を悉くすといふ茶室建築に相應するものとなつた。京都の銀閣、龍安寺等の庭園はその代表的なものである。

書畫名器の愛玩 この時代にはまた書畫名器を鑑賞する趣味が大いに盛んとなつた。即ち義政が支那から盛んにこれらを輸入して多數の名器を藏し、その愛玩に耽つたのを始め、上流の人士一般に骨董を喜ぶ風が興つたのである。元來鎌倉時代以來宋・元との交通によつて舶載された繪畫や器物は、唐物と呼んで珍重せられてゐたが、この時代にはその傳存の由來が重んぜられると共に、禪的教養を通じて鑑賞する風が尙ばれ、またこれを蒐集することも流行した。君臺觀左右帳記は義政の蒐藏品の目錄として有名であるが、これに美術批評の現はれてゐる點は特に注目される。かくて書畫骨董を愛玩する風はやがて一般庶民にも流行して一種の教養と考へられるに至るのであるが、それは東山時代に築かれたものの普及に外ならないのである。

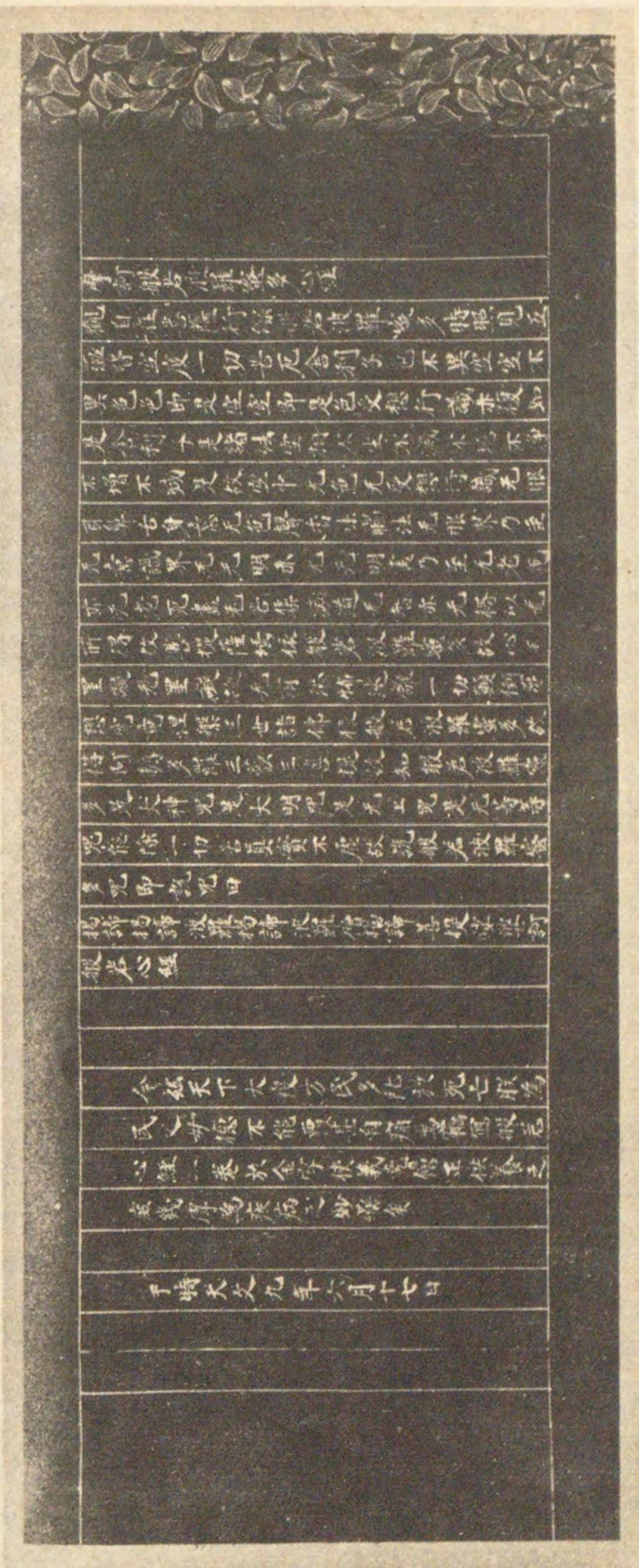


鹿苑寺金閣



慈照寺東求堂





### 第五節 群雄の割據

#### 一 戦國の群雄

戦國の世相 室町幕府は既に述べた如く最初より道義性に缺け、大義の貫ぬけるものがなかつた。されば幕政の中心たるべき將軍に統率力がなく、幕府の権臣、地方の豪族が愈々跋扈するに至つて、遂に應仁の大亂となつた。それより將軍は全く無力を暴露してたゞ虚名を有するに止まり、その實權は管領細川氏に、細川氏の權は更に執事三好氏に、三好氏の權はその臣松永久氏にと次第に推移して、權力下向の大勢を示し、やがて松永久秀は將軍義輝を弑するに至り、幕府存立の實は全く失はれた。

かゝる下剋上は時代の風潮をなして全國に漲り、守護はその權臣に勢力を奪はれることも尠からず、且つ政争の進展に伴つて、大名の配置は屢々變じて勢力の均衡が破れた。かくて上下の秩序は亂れ、諸國の大名は互に割據して侵略を事とし、所謂群雄割據の形勢を呈した。よつて應仁の亂後室町末期の百餘年間を世に戦國時代と



もいふ。

この時期が亂離の世相を呈したことは否み得ないが、これを地方的に見れば、群雄は何れもその領内の政治、經濟等に完全なる支配力を發揮し、更に民政に治績を擧げ、商工業を振興して財力を富裕にせんことを圖つた。それと共に、かゝる領内に對する統一的精神を擴充して、海内統一の雄志を懐くものも尠くなかつた。されば極めて無秩序なる如く見える抗爭の中にも、次に來るべき天下統一の萌芽が既に含まれてゐたといふべきである。しかも道義地を拂つたといはれる戰國の時世に於いてさへ、群雄は何れも皇室を中心と仰ぎ、忠誠を捧げる精神を懷いてゐたのであつて、國民一般も亦同様であつた。天下を統一し、天下に號令するためには、先づ京都に上り、天皇の大命を奉じなければならぬと考へられたのは、即ち我が國本來の皇室中心思想の顯現である。

關東の形勢 戰國の世相が全國に展開した中に、先づ關東にあつては關東公方の二家對立と權力の下向があつた。さきに永享の亂に足利持氏が將軍義教のために滅ぼされてより、その實權は執事上杉氏の握るところとなつた。上杉氏は後に持氏

の遺子成氏を擁立したが、成氏は上杉氏の勢力の盛んなるを忌み、これと争つて鎌倉を逃れ、下總の古河に移つた。こゝに於いて將軍義政の弟政知が上杉氏に迎へられ、伊豆の堀越に居た。かくて關東にては古河堀越兩公方が對立したが、何れも大なる勢力はなく、むしろ上杉氏の實力が大であつた。上杉氏も鎌倉にて山内・扇谷の兩家に分れてゐたが、扇谷上杉氏はその家臣太田持資がよく軍政を修め、新たに江戸城を築くに及んで、勢威甚だ盛んとなつた。しかし、山内上杉氏の讒によつて持資は暗殺せられたため、扇谷上杉氏の武威は大いに衰へた。その後兩上杉氏の間には抗爭が起り、爾來交戰多年に互り、互にその實力を消耗した。

北條氏の興起 かゝる東國の騷亂に漁夫の利を占めたものは、風雲に乗じて起つた北條早雲である。早雲はもと伊勢長氏といひ、性豪邁で霸氣に富み、先づ駿河に下つて今川氏に寄食しつゝ、徐ろに形勢を察して古河公方に通じ、密かに堀越公方を窺つてゐたが、偶、生じた堀越家の内訌に乗じ、俄かに襲うてこれを滅ぼし、遂に伊豆を略して韮山城に據つた。こゝに於いて氏を北條と改め、入道して早雲寺宗瑞といひ、次いで關東に入つて小田原城を奪ひ、遂に相模を徇へた。その子氏綱、孫氏康も智勇に



優れ、頻りに近隣を併せ、大永四年(一一八四)には扇谷上杉氏の據れる江戸城を陥れて、これを川越に走らせ、天文六年(一一九七)には川越城をも取り、更に翌七年には房總地方に兵威を振るへる里見氏と下總國府臺こふだに會戦してこれを破り、その地方に勢力を及ぼした。その後兩上杉氏共に衰へ、古河公方も亦滅亡するに至つたので、北條氏は全關東の霸權を握り、その居城小田原は非常な繁榮を呈した。

武田上杉兩氏の争覇 山内の上杉憲政は天文二十一年(一一二二)北條氏康に逐はれて越後に走り、その家臣であつた長尾景虎に頼つた。景虎は生來勇敢で用兵の術に優れ、春日山城を根據として早くも國內を平定し、武威を隣國に輝かしてゐた。されば憲政が來り投ずるに及んで、屢、兵を關東に出して北條氏と争ひ、長驅小田原城門を包圍したこともあつた。かくて景虎は憲政の家格を尊び、その譲りを受けて上杉氏を稱し、のち薙髮して謙信と號した。

謙信と覇を争つた名將は甲斐の武田晴信(信玄)である。晴信は沈着で智謀に富み、屢、兵を信濃に出して諸族を降したが、小笠原村上の諸氏は遁れて越後に走り、上杉氏に頼つた。謙信はこれを援けて信濃に出兵し、川中島に進出して信玄と雌雄を争つ

たが、勝敗は遂に決しなかつた。その後信玄は北條氏と戦つて駿河遠江を侵し、更に西上を策して三河の松平氏を破つたが、遂に元龜四年(一一三三)四月、病歿して目的を果さなかつた。

東北の豪族 東北地方の豪族には陸奥の伊達むすね・章あきら・南部、出羽の秋田最上等もろなの諸氏があつて互に封疆を争つた。中でも伊達氏は岩代の北部より起り、植宗・晴宗が出でて四隣を侵略し、最も優勢となつたが、土地が中央から遠隔であるため、天下の大勢に關係がなかつた。

織田氏の崛起 本州の中部に在つて、他日飛躍を遂げるに至つたのは、尾張の織田氏である。尾張はもと管領斯波氏の領國であつて、その守護代に織田氏があり、信長の祖先は更にその庶流であつたが、信秀に至つて尾張に雄視し、豊沃の平野を占めて實力を蓄へ、その子信長をして活躍せしめる基礎を築いた。時に駿河の名族今川氏は勢力甚だ盛んで既に遠江を略し、更に版圖を三河に擴め、松平氏を服した。その後今川義元は更に信長の勢力を併呑せんとして、正親町天皇の永祿三年(一一二〇)五月、駿遠・參三國の大兵を率ゐて尾張に侵入した。信長は寡兵を以てこれを桶狭間に邀



撃し、風雨に乗じて奇襲を試み、忽ちにして義元を殲した。信長の威名はこゝに於いて遠近に轟いた。

中國の形勢 轉じて中國の方面を見るに、出雲の尼子、周防の大内の兩氏が最も顯はれた。尼子氏は室町幕府の重職京極氏の支族として累代出雲の守護代であつたが、戰國のさなかに經久が出てより、大いに家を興して屢、大内義興と戦ひ、晴久に至つて益、強大となり、伯耆、因幡を侵した。大内氏は周防の舊族で外國貿易の利を收めて財力も豊かであつたが、義興に至つて遣明船の事を管掌して益、富強となり、また近國の侵入をよく斥けた。然るに義興の子義隆は富強を恃んで驕奢に流れ、文雅に耽つて武事を輕んじたため、國政大いに亂れ、遂に天文二十年(二二一)老臣陶晴賢すゑはるかたに弑せられた。その頃安藝にては、義隆の部將毛利元就が吉田の小城より起り、頻りに領土を擴めた。元就は元春、隆景の二子をして夫々吉川、小早川兩家を嗣がしめ、それらの勢力を合して愈、強大となつたが、天文二十四年(二二五)晴賢篡奪の罪を鳴らして嚴島にその大軍を襲ひ、一舉にこれを滅ぼして大内氏に代つた。その後尼子氏を滅ぼしてその領土をも併せたので、毛利氏の版圖は中國より九州、四國に跨がる十餘箇國

に及んだ。

四國九州の諸雄 四國では管領細川氏漸く衰へ、戰國の末期に長曾我部元親が土佐より起つて諸族を平げ、遂に四國に雄視した。九州では少貳氏に代つて家臣龍造寺隆信が肥前に起り、豊後には大友義鎮が出て、薩摩の島津氏は南九州を占め、三者鼎立の觀があつた。就中、島津氏は古來南九州に雄視せる豪族であつて、戰國の末に義久が出て最も優勢であつたが、その地西南に偏せるため、中央の大勢に關係するところが少かつた。

## 二 群雄の地方政治

群雄の施政 この時代、地方に割據した群雄は各、兵戈を交へて日もこれ足らざる間にも、領内の統治については大いに心を用ひ、積極進取の經營を行ふのを常とした。もとよりこれらの武將が莊園制を破壊して地域的統一を成し、或は武斷的政治を行ふためには、それに伴ふ犠牲も尠くなかつたが、結局はこれによつて富國強兵の實が擧げられ、民福の増進に向かふことになつた。また群雄の中には一般の領民に臨



ひに家來に對すると同じく、武士主従の情義を以てしたものがあつた。例へば北條早雲は針を倉に積む程の勤儉であつたが、しかも玉を碎いて惜しまずといはるるばかり士民を愛撫し、孫氏康もまた父祖を繼いで政治を整へたので、領民は皆よく心服した。武田信玄は鑛山の採掘を始め一般産業を奨励すると共に、領民の賦税を軽減してひたすら民力の涵養を圖つたため、人心の歸嚮を得、甲斐の國人は永くこれを徳とした。

群雄の施政の中、特に重きをなすものは農民及び商人に對する政策であつた。室町時代の農村は相次ぐ戦亂によつて總じて激しい誅求を受け、その上凶年飢饉等には甚だしく窮乏して、一揆や逃散が屢起つた。然るに強力な武將が出づるに及んで、領内を組織的に支配すると共に、農民の保護についても深く意を用ひた。即ち地頭が年貢を抑留することを戒め、百姓の年貢不納や、他領への逃散を禁じ、故意に隠蔽せる隠田を取締り、また土地の開墾、治水事業に努めた。商業は領内の財力を富裕ならしめる基礎として重んぜられ、商人に對しては市座の羈絆を解いて自由賣買を許し、その城下に商人の集まることを奨励し、その營業に種々の便宜を與へるものもあつ

た。かゝる政策は織田豊臣兩氏によつても繼承せられ、近世の産業界に躍進を來たさしめる一要因となつたものである。

群雄の法制 上世の律令は中世に入つて官制に關する法として残つたけれども、一般には鎌倉幕府の實踐的な法制が社會を指導するものとなつた。室町幕府も鎌倉幕府の法制を繼承したが、戦國の諸雄によつて破られ、代るに地方的な法制が出現した。かゝる群雄の法制は古くより存する家法の系統を引く性質のものであつて、家法が大名の領内全般に及ぶものに進展したとも見られる。それらが多數存する中に、大内氏の大内壁書、今川氏の今川かな目六、北條氏の早雲二十一箇條、伊達氏の塵芥集、武田氏の信玄百箇條、長曾我部氏の百箇條等は、その主なるものである。何れも道義性を重んずる我が古來の法制精神をよく示し、武士の平時並びに戦時に於ける覺悟、主や親に對する服従などを強調し、また中には學問教育に關心を寄せて、文武兼備を主張せるものもある。

これらの法制に見られる規定の中特に注目すべきものを拾ふに、先づ家臣の統制を嚴にし、團結を鞏固にせんとするものがある。即ち大名は家臣の進退について符



に深き關心を拂つて上下の關係を緊密にすることに努め、婚姻の如きもその許可を受けしめた。また物頭、組頭の制を設けて武士相互間の秩序を正し、新たに加はつた武士を寄子とし、寄子の支配者を寄親といつて、その間に父子の如き關係を結ばしめた。所領については、その處分を著しく制限して賣却を禁じた。

その他總じて規律を重んじ、刑律を嚴重にせることが特徴として擧げられる。また喧嘩兩成敗と稱し、二者相争へば理非を論ぜず當事者雙方を罰する事も、この時代に盛んに行はれたものであつて、これは訴訟裁判の簡捷を期すると共に、部下の團結に破綻を生ずることを戒めるための方策である。縁坐法もこの時代に著しく擴大せられ、時に犯罪者の主従、縁者のみならず、郷村全體を處罰することもあつた。

## 第六節 皇室と國民

### 一 皇位の相承と列聖の御仁慈

皇位の相承 元中九年(二〇五二)後龜山天皇の京都還幸と共に、後小松天皇は神器

を受け給うた。後小松天皇は御天資英邁にましまし、朝儀の復興には特に御意を注がせられ、和漢の學にも御造詣深くましました。應永十九年(二〇七二)皇子にましまさず稱光天皇に御讓位あらせられたが、後小松上皇は天皇が御年少且つ御庭弱にわたらせられたため、常に御親ら諸事を攝行あらせられた。正長元年(二〇八八)天皇崩御あらせられ、伏見宮貞成親王の御子彦仁王が上皇の御猶子となつて踐祚あらせられた。即ち後花園天皇にまします。天皇は和漢の學を始め、書道、繪畫、詩歌その他の道に秀でさせ給うた。朝政の振興については特に御意を注がせられたが、時勢は漸く亂世に向かひ、三十六年の長き御在位の後、寛正五年(一一二四)七月、皇子後土御門天皇に御讓位あらせられた。同年十二月、仙洞に催された御會に「八紘歸聖猷」の題にて七言絶句をもつし給ひ、御教化多年にして功ならずとせられ、皇家古に復せんことを望ませられしは洵に畏き極みである。後土御門天皇も同じ大御心にあらせられ、

まつりごとその古にのこりなくたちこそかへれ百敷のうち  
と詠ませ給ひ、應仁の亂以來の亂離及び御料の窮乏の中にあつて、よく朝儀の維持に努め給うた。明應九年(二一六〇)天皇崩御あらせられ、皇子にまします後柏原天皇が



踐祚あらせられ、治世を思はせ給ふ御製の數々をものし給うた。大永六年(一一八六)天皇崩御によつて皇子後奈良天皇が踐祚あらせられた。天皇の御代は天文年間を中心として戦國の争亂最も甚だしく、そのために畏くも朝儀の闕怠することを深く慨かせられ、公道行はれず、賢聖有徳の人無く、下克上の心盛にして暴惡の凶族所を得たり。と仰せられた。併しながら次に正親町天皇が立たせ給うて後世は漸く前途に輝かしく曙光を仰ぐに至つた。天皇は織田信長に對して入洛を促し給ひ、信長は聖旨を奉戴し、深き感激を以て海内統一の業に邁進したのである。

御財政の式徴 室町時代莊園制が崩壞に向かふと共に、禁裏御料の收納は次第に減じた。即ち當時御料地についてはその事務を總括するため朝臣中から御料所奉行が任命せられ、その下に各御料地の莊務に當る申次(まうじ)が置かれてゐたが、打續く亂世のために御料地の莊務が妨げられ、従つて皇室の御財政は畏くも御意に適はなくなつて來たのである。かゝる傾向は室町初期より見られ、戦國の亂れとなつて益、激しかつたが、幕府はその力の足らないため、御用度の進獻はあろか、禁裏の守護も十分出來なかつた。されば遂に恆例の儀式も時に闕かせられ、即位の大禮さへ長年に互つ

て滞らせ給ふに至つた。

皇室の御仁慈 かくの如く御財政の式徴にも拘らず、列聖は常に民草の上に大御心を垂れ給ひ、仁慈の聖徳は何時の世にも變らせられなかつた。寛正元年(一一二〇)より飢饉疾疫相續き、死者算なく、京都の内外酸鼻を極めるや、後花園天皇は畏くも民草の安穩を一途に祈念あらせられた。然るにこの時足利義政は聊かも民苦を顧みざるのみならず、或は遊樂に耽り、或は土木事業を興してその費用を民に課したため、天皇は、殘民争採、首陽薇處々、閉爐鎖竹、扉詩興吟、酸春二月、滿城紅綠爲誰肥と御製の詩を義政に賜うてこれを戒められた。また

後土御門天皇御製

うれへなき民の心と聞くからにいまぞ我が身のたのしみとせむ

後柏原天皇御製

をさめしむわが世いかにと波風の八十島かけてゆく心かな

等を拜する時、御軫念の程深く心に銘しまつるのである。後奈良天皇は天文年間飢饉疫病にて民の苦しむのを憂へさせられ、御親ら般若心經を金泥にて書寫し給ひ、そ



の御奥書に「朕爲民父母、徳不能覆、甚自痛焉」と仰せられ、また同じく紺紙金泥の般若心經を諸國に下して萬民の福利を祈らしめられた。洵に仰ぐも畏き極みである。

## 二 國民の忠誠

國民の尊嚴 皇室の尊嚴は何時の代にも渝ることがないのはいふまでもない。而して室町末期に於いては、國民は幕府に權威を感じないやうになり、直接に皇室の尊嚴を拜し、御歴代の御仁慈に浴して感激すること切なるものがあつた。殊に幕府指令下にあつた地方豪族は、直ちに皇室から官爵を拜受してこれに無上の榮譽を感じ、或は親しく勅諭を傳へられて感奮興起したのである。周防の大内義隆、安藝の毛利元就、尾張の織田信秀を始め、駿河の今川義元、相模の北條氏綱、越前の朝倉孝景、越後の長尾景虎や真宗の本山たる石山本願寺など、何れも即位大禮の御料、皇居修理の御用等を奉獻した。また近江の六角高頼や尾張の織田信秀等は相前後して神宮御造營の費用を奉納した。また伊勢の慶光院清順尼は後奈良天皇の勅許を得て諸國を行脚し、廣く寄進を募つて遂に外宮を造營し奉つた。

この時代、主に莊園の喪失によつて、公卿等が財政窮乏に陥つたことは實に甚だしかつたが、何れも貧苦を顧みず奉公の赤誠を捧げた。中でも三條西實隆、山科言繼等は地方に赴き、諸豪族に説いて御用度の獻納、御料地の復興等につき率先皇事に勤むべきを勧めた。實隆は後土御門天皇以後御三代五十餘年に亙つて仕へ、朝に在つては天皇に學問を講じ奉り、出でては遠近の豪族に勤皇を説いた。言繼は老軀を以て地方豪族に遊説して皇事に盡くすところが多く、曾て岐阜に使い、途中大雪に惱まされながら、すべらぎのみことのりには武士もしたがはしめよ天地の神と詠じた。また正親町天皇の御代、京都の町人にて折々供御を上り、内裏の御垣の修理に力を盡くすなど、忠誠を致すものもあつた。而して古來國民が最も光榮とせる官爵は、幕府の手を経ずして直接朝廷より拜戴するに至り、四方の群雄は何れも天皇を奉戴して天下に號令せんとした。

皇室の尊嚴 かくて朝廷の尊嚴は亂世の中にも儼然として輝いた。地方豪族や一般人民は天日の輝かしき光を仰ぐ如く、天皇の御稜威を高く拜し、尊皇の精神を振起した。而してこのことは群雄が皇室を拜して天下統一を翹望する時運を導いて、



第二編 中世  
次の安土桃山時代が展開されるのである。

昭和十八年八月二十日印刷  
昭和十八年八月二十五日發行

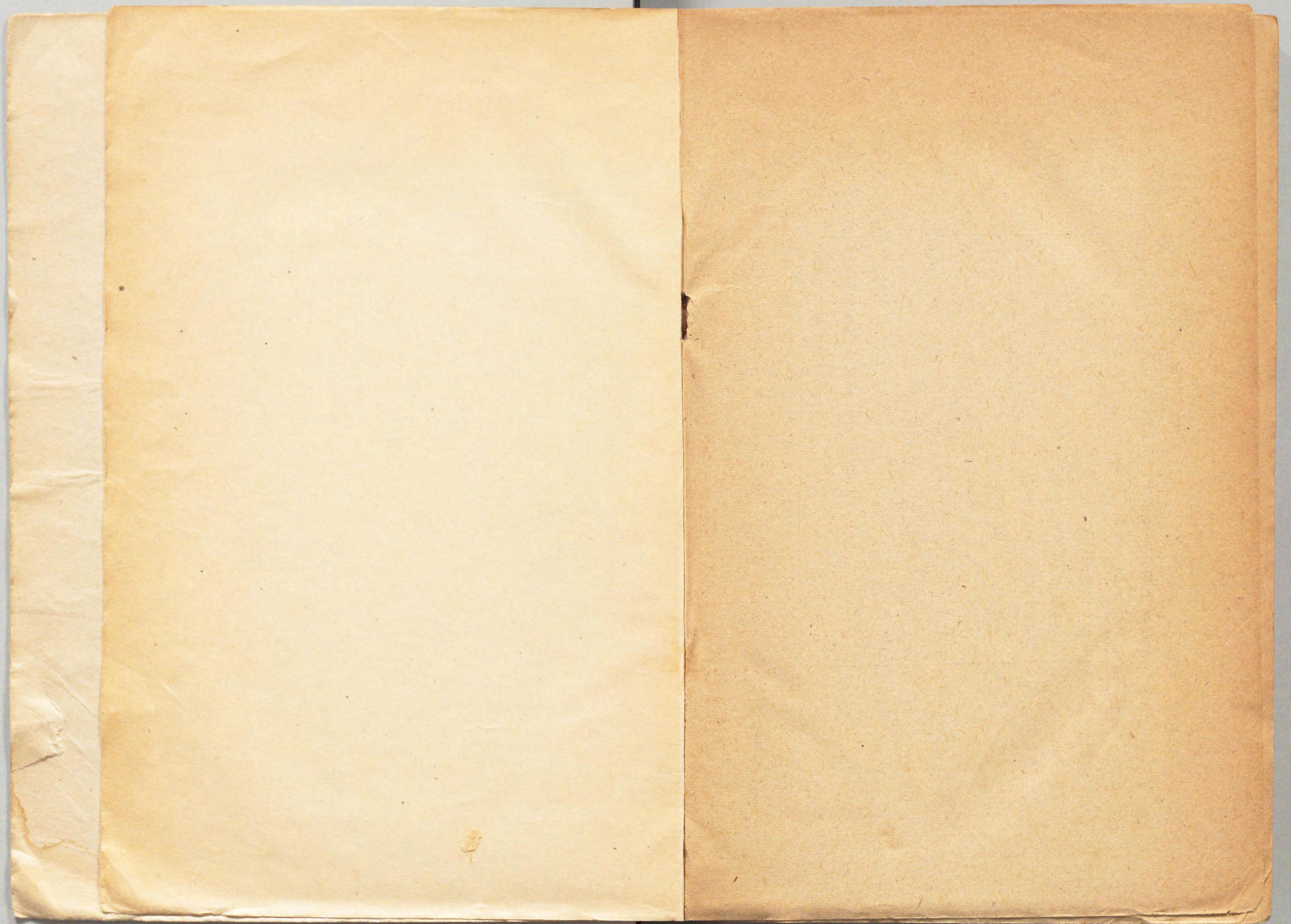
文部省編纂  
内閣印刷局印刷發行

販賣所 内閣印刷局發行課

東京都麹町區大手町  
電話丸の内(三)三五一一三五九  
振替東京 一九〇〇〇

全国各地官報販賣所  
全国各地主要書店  
定價貳圓







32.11. 5



